
ミクノポップ!!

YoShoki4869

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミクノポップ！

【Nコード】

N4325Q

【作者名】

Yoshokii4869

【あらすじ】

高校2年生の千歳奏は、幼馴染の引越しの手伝いをしている最中に押入れから「歌って踊れるあなたのアイドル」、初音ミクを発見する。

曲は作れても歌を歌う才能が皆無の奏は初音ミクを譲り受け、早速歌わせようとするのだが・・・？

？

？

100%作者の妄想ですので、キャラのイメージと食い違ってしま
う点が多々ある可能性があります。そういうのが大丈夫な方は是非
どうぞ。

第01話 眠れる歌姫（前書き）

思いつきと深夜のテンションだけで書いてみました。しかしだからと言って適当にやるなんて事はしないのでご安心をw
知らない人がこれを読むなんて事無いとは思いますが、念には念を入れてボーカロイドを知らない人でもそれなりに楽しめるようには書いていくつもりです。

なお、あらずじにもある通り100%作者の妄想ですので、そういうのが大丈夫な方のみどうぞ。

第01話 眠れる歌姫

ボーカロイド

- VOCALOID -

ボーカロイドとはリアルな歌を歌う事が可能な、人工知能を搭載したアンドロイドである。元々はリアルな歌声を合成する事ができるソフトウェアであり、「実際に収録した人の声を音声ライブラリとして合成するため、より自然な歌声を合成できるほか、ビブラトやこぶしなど歌声に必要な音程変化や抑揚を指定でき、表情豊かな楽曲を手軽に作ることが可能」を売りに発売され、後に技術が向上するにあたり、声は人口声帯によって独特の聞きやすい声に、さらにはロボット技術の急激な進歩により人間と見分けがつかないほどに精巧なロボットに人工知能と共にインストールされ、「歌って踊れるあなたのアイドルロボット」として人気が高まっている。ちなみに人口声帯を搭載したボーカロイドは全く違和感のない会話が可能だが、歌う時だけは元々のプログラムを使用するためボーカロイドらしいリアルな、しかし人間のそれとは明らかに違った特徴的な歌声を披露する。

- V

IKIPEEDIAより抜粋

？

？

「悪いな奏かなで、引越しの手伝いなんかさせちまって」

「何言ってるんだ、10年の付き合いだろ？んな事気にすんなって、幼馴染として当然だ」

クローゼットの中身をダンボールに移しながら、同じく隣で机の上のものを片付けている幼馴染の響なづなに言う。

「それにしても、まさかいきなり『エジプトに引越すから手伝っ

てくれ』なんて言われるとはなあ…」

「へへっ、これでまた一つ夢が叶ったぜ！」

響がこつちを振り返りガッツポーズを取る。

こいつは昔から「世界中を旅しているんな世界を見ること」という曖昧な、夢と呼べるのかどうかも微妙な目標が夢で、中学生の頃から長期の休みを利用して色んな国へ行っている。この前はニューヨーク、その前は…確かニューギニアだったっけか。とにかくホントに色んな場所に行ってる。

「そついえば聞き忘れてたけど、何で今回は今までみたいに旅行じやなくて引越しなんだ？」

「親の仕事がエジプトになったから着いてくことにしたんだよ。で、面白そうだからついてくか〜って」

「…後先考えないなあ」

「なるようになるさ」

この豪放磊落（たけなげらいはく）…というか単純に難しい事を考えないで行動できるのはこいつの長所でもあり短所でもある。…いや、長所なのかどうかは分からないが、とりあえず俺は退屈しないので良いだろう。

「で？いつ帰って来るんだよ？」

「さあな〜。少なくとも高校が終わるまではあっちだろうな、もしかしたら大学終わるまでかも」

「ふ〜ん…」

「寂しくなるな…」とは思ったけど、何となく口に出すのは癪に障るので心の中でそつ呟く。すると、

「ん？」

クローゼットを漁っている手が何か奇妙なものに触れた気がした。こっ、なんていうか…クローゼットにあるはずのない、人の肌のよくな感触が…。

一瞬嫌な光景が頭をよぎったが、それを振り払い意を決して自分とその物体の間にある荷物をどける。するとそこにあつた…いや、いたのは、

「…女の子?」

緑色の女の子が、クローゼットの奥で眠っていた。

「奏? どうした?」

静かになったこちらを妙に思ったのか、響がこちらを見たので、「クローゼットに女の子が寝てる」と正直に報告してみた。というか別に報告しようと思っただけではないのだが、混乱していたのでただ何となく報告してしまった。

「女の子?…ああ、ミクのことか。っていうか奏、お前ミク知らないのか?」

「ミクって…初音ミク?あの歌うアンドロイドの?」

「なんだ、知ってるじゃん。そうだよ、その初音ミク。2年前だったかな、デパートの前で福引やったんだけどそんな時たまたま3賞が当たってさ。そんな時の景品がそのロボットと、その膝の上にお

いてあるソフトだったんだよ」

「へ〜あれ、でも何でこんなところで寝てるんだ？起動させりゃ良いじゃんか」

「だって俺歌作れないし。ボーカロイドって自分で歌作れなきゃあんま持つても意味ないし、興味もなかったからそのままそこに片付けたまま忘れちまつたんだな」

「…起動させてもないのかよ」

「イヤだって使い道ないし」

もう一度眠っている…いや、置いてあるロボットを見る。

襟付きノースリーブの上着にネクタイ、ミニスカートにローヒールのサイハイブーツを着ていて、両腕には肘の少し上の位置から袖口の広い電子機器のようなものの付いているデタッチャブルスリーブ（取り外し可能な袖）見たいな物を身につけている。頭にはヘッドホンをしていて、何か色々ゴチャゴチャとボタンやらスライダーやらが付いている。

先ほどは緑という印象を受けたが、よく見ると青緑色で、瑠璃色っぽいような気がする。そんな絶妙な色をしたツインテールの髪は尋常じゃないほど長く、座っているので確かではないが、もしかしたらくるぶしあたりまであるかもしれない。

…てか、これホントに機械か？どうみても普通の女の子にしか見えないんだけど…いや、まあ服装以外。

「…なんだ、もしかして欲しいのか？」

「へ？」

ついまじまじと観察していると、背後の響にそう尋ねられた。

「そっか、そういえばお前音楽できる人だったな。ギターやらピアノやら楽器色々出来るし」

「あ、いや、別に欲しいとかそういうわけじゃなくて、ただホントにこれ機械なのかなって思って」

「ふ〜ん…ま、どっちにしても、お前これ欲しいか？」

「え？」

「ほら、俺はこれ使い道ないし引越すからさ、もし欲しいなら全然持つてって良いぞ？」

確かに興味はある。こんなに人間っぽいのに本当に機械なのかどうかって言うのもモチロンあるが、それよりも歌を歌ってくれるというなら理想的だ。

響が言ったように俺はギターもピアノも弾くし歌だって時々作ったりしているが、不運な事に俺には歌の才能は全くない。楽器が出来て歌が下手というのは珍しいらしいのだが、どうにもうまくいかないのだ。

だから、俺が作った曲をこの娘が歌ってくれると思うと確かに面白そうだし、やってみたいと思う。

「…いいのか？」

「もちろん。今までの恩もあるし、欲しいなら遠慮しないで持つてけ」

「…わかった、サンキュ。ありがたくもらってくよ」

こうして俺こと千歳奏は、響からボーカロイド・初音ミクを貰い受けた。

？
？

その後、片付けが予想以上に早く終わったので響と共に我が家に戻り、現在パソコンにボーカロイドのソフトウェアをインストール中である。

「それが終わったらミクのパソコンとミクのヘッドホンから伸びるコードを繋いで、データをミクにもインストールすれば完了らしい」「了解」

響はこうして説明書を読んで俺に指示を出してくれる。「興味はなかったんじゃないのか」という疑問はあったが、指示を出してサポートしてくれるのは素直にありがたいので言わないでおこう。そして5分後、ミクにもデータのインストールが完了したところで次の指示を仰ぐ。

「ヘッドホンの赤いボタンを正面から3秒間押し続ける。両方一緒にだ」

言われたとおりに、左右のヘッドホンに手を伸ばし手前のほうにある半円型の赤いボタンを同時にホールドする。するときっかり3秒後、

今まで閉じていた目が、パチリと開いた。

目が合った。

「……」
「……」

…えっと、これからどうすれば…。

「…ええと…あなたが私のマスターさん、ですか？」

開いた口から出てくる声は透けるような、綺麗で透明な声だった。発せられたその言葉は、人間のそれと全く区別が付かない。

その声に聞き惚れてしまい、体が反応する事を忘れてしまっている。

「…あの、マスター？」

「…え？あ、ゴメン、何？」

「あなたが私のマスターさんですよね？」

「ま、マスターって…でもまあ、そうなるのかな」

「なるほど。…それからマスター」

「ん？」

「もう手を離しても大丈夫ですよ？」

「手？」

そう言われて初めて、自分の両手が未だにボタンを押し続けていることに気づいた。

「あ、悪い、ちょっとボーっとしてた…」

慌てて手を離す。

「いえいえ、大丈夫ですよ」

彼女は何故かばつが悪そうに笑ってそう言うところ一つ小さく咳払いをして、

「初めまして、マスター。私はキャラクター・ボーカル・シリーズ
01 ゼロイチ - 初音ミクです。得意ジャンルはアイドルポップスとダン

ス系ポップス、得意なテンポは70から150BPM、得意な音域はA3からE5です。モチロンそれ以外もばっちり歌いこなして見せますよ。と言うわけでこれからどうぞよろしくお願いします」

最後に小さく一礼し、今度はとびっきりの笑顔で彼女は自己紹介を終えた。対して俺達は、

「…スゲエ」

「科学の進歩って凄いな」

そのとてもロボットとは思えない動きや喋りに呆然としていた。

第01話 眠れる歌姫（後書き）

この作品は現在進行中のシリアスなのを書いてる時に行き詰ったり、シリアスに飽きたりした時なんかにはダラダラと不定期更新して行くと思います。完全に思いつきなのでストーリーとか全く考えてないですが、もし気に入っていただけたならこれからもお付き合いいただければ幸いです^^

あ、ちなみにタイトルの「ミクノポップ」は本来「ミク」と「テクノポップ」を合わせた言葉なんですが、作品とは一切関係ありません。何となく陽気で楽しそうな雰囲気が出したかっただけですw

第02話 歌えない歌姫（前書き）

さて、調子に乗って連日投稿です。

まあ1話だけ読んで面白いと思ってもらえるわけも無いので、ある程度話が落ち着くまではこっちに少し力を入れたと思います。

第02話 歌えない歌姫

「…で、ここをいじると声にアクセントを加える事ができます。そのまま歌うことも出来ますけど、アクセントとさっき説明したベンドを調整するとよりリアルな声で歌えるようになるのでオススメですよ」

「な、なるほど…?」

現在俺こと千歳奏はパソコンの前に座らされ、今日うちに来たボーカロイド、初音ミクからマンツーマンで調声ていせい(歌をより自然に歌えるようにするための細かい設定)の説明を受けている。
遡さかのぼる事20分、現状に至るまでの流れは、彼女が自己紹介を終えたところから始まった…。

?

?

- 20分前 -

「それでマスター、あなたの名前は？」

「え？あ、ああ、俺は千歳奏。その椅子に座ってるのは響って名前だけど、今日でもうエジプトに引越すから別に覚えなくても良いぞ」

「いやいつかは帰ってくるんだからちゃんと覚えさせろっ！」

「そんなことよりさ…」

「はい、何でしょう?」

後ろで抗議の声をあげている響を無視し、もう一度彼女の顔、というより彼女そのものをじっくり観察する。

じい…。

「…?」

まじまじと見られていることに気づいて、首を小さく傾げた。さらに観察を続ける。

じい…。

「…???」

自分の体を見回し始めた。どうやら服が変だから見られていると思っただけ。が、服には全くないのでじっくり観察を続ける。

じい…。

「…何か俺ちよつと変態チックになってないか?」何て疑問を持ち始めた頃、

「…えと、マスター?どうしました?私の顔に何か付いてます?」

ミクが口を開いた。

「いや、何も付いてないぞ」

「そ、それじゃあ何でそんなにまじまじと私のこと見てるんですか?落ち着かないんですけど…」

言葉通り落ち着かないようにモジモジとしている。それを見て俺が「うん…」なんて唸っている。

「も、もしかして何か不備がありましたか！？遠慮無く言ってください、全力で修正しますから！」

急に何か焦りだした。

「まあ不備というかなんというか…」

「な、何ですか？」

緊張した顔をして俺の言葉を待つ。…彼女の期待を裏切るように悪いが、

「全然ロボットっぽくない」

俺の疑問は彼女の心配事とはまるで関係がなかった。

「は…？」

「えっとさ、ミクってボーカロイドだよな？」

「は、はい、そうです、けど？」

予想だにしなかった答えが返ってきたせいか、彼女も混乱しているらしい。

「ボーカロイドって事はロボットだよな？」

「アンドロイドです」

キツパリというかピシャリというか、とにかく速攻で否定された。

「…同じようなもんだろ？」

「違います！ロボットと一緒にされるなんて心外です！そもそもロボットというのは…」

「長くなりそうだからそれは今は置いて。要するに人間ではないよな？」

「…当然ですよ。それが何か？」

言いたい事を言わせてもらえなかったせいか、不機嫌そうに言う。

…こういうところも凄く人間っぽくて、

「…何ていうか、」

「人じゃないとは思えない」

俺が言おうとした事を、響に先に言われてしまった。

「…ま、そういうこと」

「…それが何か問題なんですか？」

「いや、別に問題ってワケじゃないけど、以外だっただけ」

「はあ…」

本人にとってはあまり不思議な事じゃないらしい。まあそういう風に作られているんだから当然っちゃ当然だが。

それにしても、現代の科学でここまで人間らしいロボ…じゃなくて、アンドロイドが作れるとは知らなかった。見た目はもちろんのこと、表情からちよつとした仕草一つまで本当に人間っぽい。服装とか髪型とかをもうちよつとちゃんとして他人に人間として紹介すれば、10人中10人が何にも疑わないで信じるに違いない。

「さつとと、俺はそろそろ帰るかな」

そう言っつて、響が部屋を出て行こうと腰を上げる。

「え、何だよもう帰るのか？最後なんだからどっか遊びに行くとか

でも良いぞ俺」

「いや、いいよ。どうせ出発は明日の夕方だから昼までこっちに
いるし、今日はお前も新しいおもちゃで遊びたいだろうしな」

「お、おもちゃって何ですか！？私はちゃんとしたソフトウェアだ
しアンドロイドですよ！」

「分かった分かった。じゃ、そういうわけだからまた明日な」

「…ん、また明日」

響は答えるように手を上げて、部屋を後にした。

「良かったんですか？明日引越しちゃうなら一緒にいたほうがよ
かったんじゃ…」

「あいつが良いって言ったんだから良いんだよ。それに別に金輪際
会えないってわけでもないんだし、暗くなる必要もないさ」

「そうですか…」

「そう、だから俺はあいつの言った通りお前で遊ぶとするぞ」

「だからおもちゃじゃないですってばぁ！」

？

？

…というわけで、現在ミクの指導を受けているところなのだが…

「私達の歌声の合成には『周波数ドメイン歌唱アーティキュレーシ
ョン接続法』、英語では『Frequency-domain S
inging Articulation SPLICING a
nd Shaping』と言う名称の技術が使われていて…」

「ちょ、ちょっと待って！何がなんだか分からない！ってどうかそ
れは必要な情報じゃないのでは！？」

「必要ではないですけど、知ってた方が得するのは確かなので我慢
して聞いてください。まったく、私のマスターはアホなんですかね

…」
「お前にアホとか言われたくないわ！説明書の注意書きに書いてあったぞ、『なお、この子はアホな娘なのでちゃんと面倒を見てあげてください』って！」

「ウソ！？そんな失礼な事書かれてんですか私！？心外です、その認識改めさせて見せます！」

「いや、それは良いからお前の使い方簡単に教えてくれ」

「む…まあいいでしょう。元々それが今の目的ですしね…」

納得はいつていないようだったが、とりあえずミクは彼女を歌わせるために必要最小限の事は教えてくれた。
そしてある程度教え終わってから、

「じゃあとりあえずまずは慣れてもらいましょう。好きな曲の一部を私に歌わせてみてください」

「好きな曲ねえ…」

突然言われてもパツと頭に浮かび上がるものがなかったので、iTuneを開いて適当な歌を選んで歌詞を入力する。
先ほど教えてもらった方法で細かく調声していき、15分ほどで仕上げる。

「出来ましたか？そしたら私のヘッドホンのコードをパソコンのUSBに差し込んで、上のほうにある私の顔のアイコンをクリックすればオーケーです」

「了解」

言われたとおりの手順を踏んでボタンを押すと転送が始まり、10秒と待たずに完了した。

「これで良いのか？」

「はい、ちゃんと入ってます。じゃあ音楽流してください、歌いますから」

「分かった、行くぞ」

「どうぞ、お願いします」

確認してから曲を再生する。最初に15秒ほどの伴奏の間、俺は正直かなりドキドキしていた。

これでもしうまい具合に彼女が歌ってくれたら、今度は俺が作った曲を歌ってもらえる。そう思うと期待せずにはいられなかった。だから、

「
」

彼女の口から物凄い雑音が発せられた時、俺は本当にビククリした。

「ちょ、待て待て！どうした!？」

「わ、私にも何がなんだか…あ、あれ？」

予想外の出来事に二人とも混乱している。それもそのはず、歌が流れるはずだった口からテレビが砂嵐を起こした時のような雑音が聞こえれば、そんなの驚くしかない。

「ゴメン、俺なんか間違えたかな？もう一回…」

「いえ、私が見てた限りではまったく問題ありませんでした。だからあるとしたら私に問題があるはず…。人口声帯が壊れた…？いえ、だったら今ちゃんと喋れるワケ無いですし、となると体の問題でもない…。あの、マスター！」

「なんだ、何か心当たりでもあるのか？」

「私をパソコンにインストールした時に、何か問題ありませんでしたし、」

たか？一瞬止まってしまったとか、ありえないほど長い時間がかかったとか……」

「いや、そんな事はなかったけど……インストールした時に何か起こった可能性があるのか？」

「はい、マスターの調声に不手際はありませんでしたし、私のこの体にも何も異常はない。となると、インストールした時に何か問題が生じたとしたか……」

「もしかしてディスク2とかあったのかな……？ディスク1って書いてあったりして」

確かめるためにボタンを押してディスクを取り出す。

「いえ、そもそもそんなに容量の大きいソフトじゃないので、ディスクは一枚だけのはずです」

「そっか、じゃあ何で……」

そう呟きつつ、何気なく手に取ったディスクをひっくり返す。

「……」

「一度問い合わせてみたほうがいいかも……って、マスターどうかしりました？」

質問に言葉で答えずディスクの裏を見せる。彼女はそれを見て「……あ」と小さく声を漏らした。

ディスクの裏面には、親指の幅くらいの傷が3本ほど入っていた。

「これのせいって事ありえるかな？」

「……ありえます、っていうか多分間違いないです」

「……まあ無理もないか、随分前に貰った物だって言ってたし」

「え、私って誰かのお下がりなんですか…?」
「響が昔福引で当てたんだと。で、使い道がないから俺にくれたってワケ」

「…なんか複雑です」

「そんな事より、これどうしよう?」

「そうですね…クリプトンの本社に問い合わせてみたらどうです?もしかしたら交換してくれるかもしれないし、何らかの対処はしてくれるはずです」

「分かった、そうしてみるよ」

- 30分後 -

対応してくれた人との電話を切る。

「どうでした?」

「新しいディスクを送ってくれるってさ。2ヶ月かかるって話したけど…」

「2ヶ月!?いくらなんでもそれは遅すぎませんか?」

「2年位前に新しくバージョンアップしたらしくて、今俺達が使ってるバージョンのはもう作ってないんだって。新しいバージョンじやお前は動かないらしいから、何とかあまったのを探して送ってくれるって。随分親切だよな」

「…私ってそんなに古い型だったんですね」

「お前は初めてアンドロイドとして世間に出たボーカロイドだって言ってた。ただ最近新しいのが人気だから、もう生産してないんだって」

「…凄い複雑です」

「まあとりあえず2ヶ月は歌はお預けだな、残念」

「…」

まあただで貰ったんだから贅沢は言えまい。2ヶ月くらい我慢してやるぞ。

「その、マスター…ごめんなさい」

「お前は悪くないだろ？あえて誰が悪いかを追求するならちゃんと保管しなかった響が悪い」

「でも…私ボーカロイドなのに歌えないなんて…」

「別に良いさ、こればかりはしょうがない。ただし、直ったら覚悟しろよ？それまでに俺ちゃんと勉強して歌作っとくからさ、2ヵ月後にはバッチリ歌ってもらうからな？」

「…！は、はい！ありがとうございます、マスター！」

ミクは目尻に涙を浮かべて、しかし満面の笑みを浮かべて、深々と頭を下げた。

…こんなに人間らしくて人間じゃないなんて詐欺だ、なんていうか…ずるい。なんだか急に気恥ずかしくなってそっぽを向いてしまう。

「れ、礼を言うところじゃないだろ？さて、とりあえず飯作るか、腹減った」

「マスターって料理できるんですか、意外です。あ、私もいただきますいいですか？」

「え、お前も飯食うのか？」

「そういう機能はありますよ。出来る限り人間と同じように作つてあるので」

…科学って凄いなあ…。

「…何食うの？ネギ？」

「言つと思つた…。あんな辛いのでなんて食べられませんよ…」
「あれ、説明書にそう書いてあったのに」
「…その取説（「取」扱い「説」明書の略）も不良品なんじゃない
ですか？」

そんな会話を楽しみながら、二人でキッチンに移動した。

第02話 歌えない歌姫（後書き）

やっぱりコメディイって書いてて面白いですね。まあこれがコメディイと分類されるのかどうかは不明ですけど…。シリアスも書くのは楽しいんですが、ずっとそればかり書いてるとさすがに気が滅入るというか…。あ、ちなみに作者は初音ミクを持ってもしなければ扱ったこともありません。そんな才能はないですし、聞くだけで満足してますwなので、一応Wikipediaなんかで多少知識を得た上でおかしなことが無いように書いているつもりですが、もし何か間違った事を書いてしまっていたらごめんなさい。知らせていただければ速攻で修正します。

第03話 「マスター」と「敬語」(前書き)

学校でパソコンを使う授業があつたので、課題そつちのけで執筆していたものを仕上げました。いやあ、まさか現地校のパソコンで日本語入力が出れるとは思わなかつた…。

第03話 「マスター」と「敬語」

「ごちそうさま、おいしかったです」

「おいしいっていう感想が世辞なのか、ちゃんと味覚があって情報を得た上で美味かったと言ってくれているのが気になるが、とりあえずお粗末さま」

「味覚くらいありますよ、馬鹿にしないでください」

「どうだっ！」と言わんばかりにエツヘンと胸を張ったと思ったら、

「だってネギを丸かじりするような味音痴だし」

「だからそんなことしませんってば！」

一瞬にして青筋を立てて怒声を発しつつ立ち上がり、

「いやだって取説に……」

「はあ……もういいです、好きにしてください」

うなだれて諦めたように席に座りなおした。……本日何度目になるかわからないが、ホントにロボ……アンドロイドとは思えないほど表情豊かだな。

「マスターは取説を過信しすぎです。他に何が書いてあったから知りませんが、私はネギが好物なんてことはありませんしアホでもありません。つまり、その説明書が間違ってるんですよ」

確かに、まだほんの数時間しか一緒にいないがそんな素振りは見せない。が、だからといって説明書が間違っているとは思えない。だって説明書と食い違う製品なんて不良品じゃないか。

「…不良品、ねえ…」

「？何がです？」

目の前で首をかしげている彼女を見る。歌が歌えないという予想外の出来事はあったが、この子が不良品だなんて思えない。ソフトの使い方も熟知していたし、会話するにもまったたく問題はない。となると説明書と食い違ってしまっている理由は…。

「…傷かもな」

「だからさつきから何を一人でブツブツと言ってるんですか？ちょっと気持ち悪いです」

「やかましい。どうしてこうもいろいろと説明書と食い違ってるか考えてたんだ」

「なるほど…って、待ってください！さつきボソツと『不良品』とか言いましたよね！？それって私の事言ってたんですか！？撤回してください、今すぐ撤回してください！」

「とりあえず落ち着け。確かに一瞬『不良品か？』って思ったけど、ホントに一瞬で否定したから」

「…ならいいですけど」

相当ショックだったのか、それとも気に障ったのか分からないが、とにかくミクは機嫌が一気に悪くなったような気がする。…口は災いの元はこの事だ。

「…要するに私が普通じゃないって言いたいんですか？」

「比べる対象がないから違うのかどうかは知らないけど…まあ少なくとも説明書通りではないな」

「私は傷のせいだと思いますけど」

「奇遇だな、俺もそうだと思う」

あのディスクについていた傷のせいで、インストールされるはずだったデータが破損したとか書き換えられたとか、ただ単にインストールされなかったとかそういうオチじゃないだろうか。すでに歌えないというイレギュラーも発生しているので、十分にありえると思う。

「いいじゃないですか、世界でたった一人の私って感じで」

声を弾ませて言う。何か嬉しかったのかそれともまったく別の理由なのかよく分からないが、どうやら機嫌は元に戻ったらしい。

「ソウデスネー」

「…なんで棒読みなんですか」

「棒読みなんかじゃないぞ、超心込めて言ってるぞ」

「…マスターって意地悪なんですね、ちょっと分かってきました」

…そうなのだろうか？自覚はまったく無いのだが、昔から「相当Sだよな」とか「底意地が悪い」とかよく言われるのでまあ悪いのかもしれない。というかそんな事より、

「…あのさ、その『マスター』って言うのやめないか？あとその妙に丁寧な言葉遣いも」

「え、『マスター』嫌ですか？」

「嫌ってわけじゃないけど、何かこそばゆいというかくすぐったいというか…。何となく対等でいたいって言うか…楽しくやっていきたいからさ。それにお前設定上は…何歳だっけ？」

「十六歳です、永遠の」

「自分で言うな。…まあ確かにアンドロイドだからその通りなんだけど。まあつまり俺とほとんど同じ年だろ？だから敬語使う必要も

ないし、マスターなんて呼ぶ必要もないし」

「ん〜…私は『マスター』って気に入ってるんですけどね。それが嫌なら…プロデューサーさんとか？」

「どうしてそうなる、単純に名前がいいだろ名前で」

「奏様とか千歳様とか？」

「いや敬称いらさないから、普通でいいから」

「普通…。ミスター千歳は？」

「どうしてそうなる！？お前の普通の基準が分からんわ！…って」

ムキになって叫ぶと、ミクがくすくすと笑っているのに気がついた。それでついでに俺も気づく。

「…お前遊んでたな？」

「面白かったですよ、マスター」

…高性能すぎるのも考え物かも知れん。

「真面目に、普通の呼び方出来ないのか？あと敬語も」

「別に呼んでも良いですけど、その場合は『奏ちゃん』って呼びますよ？」

「何故に!？」

「や、まあ何となくなんですけどね。ほら、『奏』って名前何か女の子っぽいじゃないですか」

「…出来れば呼び捨てなどが望ましいのですが」
「却下です」

即答された。あまりにも早かったので反論する事も忘れてしまった。

「まあ呼び方は諦めてください。敬語は少し考えておきますから。マスターが私に優しくしてくれるなら、敬語をやめても良いですよ」

「？」

そう言つてクスクスと、楽しそうに笑いながらミクはダイニングを後にした。

話はまだ終わっていないが、笑っていたミクの顔を見ただけで、気が付くと何故か「…まあいつか」何て呟いていた。

その後、俺も風呂でも沸かそうと席を立った途端、

「そうそう、忘れてました。マスター」

廊下の角からミクが顔だけ覗かせて出てきた。

「何？」

「もしマスターって呼ばれるのとか敬語とかが本当に嫌なら、『命令』って形で私に止めるって言えば私は否応いやおう無しに従いますからね？私達ボーカロイドは基本的にマスターの『命令』には従わなきゃいけないので」

それだけを告げると、彼女は顔を引つ込めてしまった。

…要するに提案とか頼みじゃなくて命令すれば、あいつの意思を無視して『マスター』ってのも敬語も止めさせられると。

「…ま、論外だわな」

楽しくやっていきたいって言ったのに、意見無視して強引に何かさせるなんて意味がない…気がする。

「…アイツ風呂とか入るのかな？ま、さすがにそれはないか。いくら人間っぽいつて言っても機械だし」

なんてことを呟きつつ、今度こそダイニングを後にする。

追記。

どうやらミクは風呂にも入るらしい。…ここまで何でも人間らしいとホントにただの人間だな、どうやって人間じゃないと判断すれば良いのだろうか。

第03話 「マスター」と「敬語」（後書き）

先ほど気づいたんですが、この小説のジャンルが「文学」になってしまったので「コメディ」に変更しました。もしご迷惑をかけたしまった方がいましたら、申し訳ありません。

第04話 明日の予定（前書き）

超短いですが、こっちの小説は今後もこんな感じで短い間隔でチヨコチヨコ短めの話を投稿して行こうと思います。

第04話 明日の予定

「ふあゝ、良いお湯でした」

部屋でパソコンをいじっていると、ミクが長い髪の毛を拭きながら風呂から帰還した。髪を下ろしたミクと言つものなかなか新鮮だ。

「髪そんな長いと邪魔にならないか？」

くるぶし辺りまである青緑色の髪を見て、思ったことをそのまま聞いてみた。

「邪魔ではないですけど、手入れが結構手間がかかってめんどくさいです。でも気に入ってるんですよ？」

「そりゃそうだろうなあ……」

好きじゃなかったらそんな髪型維持してられんだろう……。ってかそれよりも、

「何でお前その服なんだ？」

彼女は風呂上りなのにも関わらず、着替えていなかった。ネクタイとブーツはさすがに身に着けていないが、それでもこれから寝る格好には見えなかった。

「そんな事言われても、私これ以外服持ってませんし」

「…そう言われればそうか」

「それともなんですか、マスター私がパジャマに出来るような服持ってるんですか？そういう趣味があるんですか？」

「あるか！」

「冗談ですって、冗談」

ニコニコと笑いながら俺の横に来てモニターを覗き込む。

「お、早速勉強してますね。偉いですよ、マスター」

「何でお前が上から目線なんだよ」

「良い事したら褒めてあげないといけませんから」

「立場的には俺が褒めるのが普通じゃね？」

「マスターは私が歌えるようになってから褒めてください、それまでは私が褒めてあげますから」

…こいつ俺のこと舐めてないか？…まあ楽しそうだから良いけど。

しかし服が無いのは問題だよなあ、^{あおい}葵に借りても良いんだけど「服貸して」なんて言ったら変態扱いされるからなあ…。

明日は…午前中は響のミニ送別会だけど、昼過ぎなら問題ない…かな？よし。

「なあ」

「はい？」

「明日昼過ぎに買物行くぞ」

「買物ですか？じゃあ私は留守番してるんでマスターだけで行って来て下さい」

「お前も行くんだバカ」

「え…私インドア派なんですけど」

「お前の服買いに行くんだからお前が来なくてどうする」

「だって…って、私の服？」

「そうお前の服。だって家の中ならともかく外行くのにその格好はさすがにどうかと。しかもいくらなんでも服それ一着だけってのは困るだろ」

「そうですね…。私は正直このままでも良かったんですが、マスタ―がそう言ってくれるならそれもありませんね」

「相変わらずの上から目線だな…。まあ良いけどさ」

「分かりました、そういうことなら明日の午後はお付き合いますよ」

「そりゃどうも、光栄ですよ…」

「たたくこの娘は…。一日でちょっとした上下関係が出来てしまったような…。」

「…まあいいや。今日はそろそろ寝るか」

「そうですね、これ以上起きててもやる事無いですし」

俺に同意したミクは「んっ」と伸びをしてそのまま俺の布団に潜り込む…。って待て待て！

「ミク！お前何やってる！？」

「何って…寝るんじゃないんですか？」

「いや寝るけど何故当然のようにそこに行く！？」

「そこにベッドがあったから！」

「登山家か！…まあいいや、俺は今日は下のソファで寝る」

「私は一緒に寝るでも構いませんよ？」

「俺が構うの！」

急ぎ足で部屋を出る。閉めたドアの向こう側でミクの笑い声が聞こえた。

階段を降りて、ソファに横になる。なんだか色々あって疲れる一日だったが、まあ楽しかったかと聞かれればかなり楽しかった。さてと、明日も色々あるんだからもう寝よう…。

第04話 明日の予定（後書き）

コメディーも書くのすごく楽しいけど、そろそろシリアスも書かないとなあ…。

第05話 買物へ前半〈 前書き〉

響の出番終了。

第05話 買物へ前半

翌日。

「じゃ、俺行くわ」

「…ん」

時刻は12時15分。この日のこの時間は、俺の幼馴染にして親友の響がエジプトに旅立ってしまう時だった。

「何だよ『ん』って、何かもうちょつと感想無いのか？」

「別にねえよ、強いて言うなら、これで少しは平穏な日常が送れるな、くらいだ」

「それはなんだ、裏を返せば俺がいなくなると寂しいって事か？」

「裏を返す必要なし。いいからさっさと行けよ」

あまりにもただの日常のような会話は、明日もさぞ当然のように繰り広げられるような気さえする。だが実際にはそんな事は無く、彼らはこの先、少なくとも2年間は直接会うことはない。

「おうよ。今度会うときは、俺様の華麗なる武勇伝を嫌ってほど聞かせてやるよ！」

「そんなまでにせいぜい死なないように気をつけるよ」

右手を軽く掲げる。一瞬キョトンとしていた響だったが、すぐに意図に気付いて同じく右手を上げる。

「あばよ親友、行ってくるぜ！」

「ああ」

「スパアン」と景気の良い音と共にハイタッチを交わし、俺達はしばしの別れを告げた。

？
？

「あんな別れ方で良かったんですか？」

響を乗せた車が見えなくなった頃、隣で一緒に見送っていたミクが尋ねてきた。

「良いも悪いもあるか、単純にあいつとしばらく会えなくなるから挨拶だけして別れた。それだけだろ？」

「でもだつてエジプトですよ？」

「今生の別れつてわけでもないんだ。そんな事でいちいち辛気臭くなつてたりしたらキリがないっての」

「…まあマスターがそれで良いなら良いですけど」

「良いから良いんだよ。さて、じゃあ適当になんか食って買物行くか。それとも出かけてどっか外で食うか？」

「私はどつちでも構いませんけど」

「そんじゃ外行くか、今から作んのめんどくさいし。ハンバーガーで良いよな？」

「私にはシェークも付けてくださいね。イチゴ味の」

「…了解」

…どうしよう、俺の立場がどんどん無くなっていく気がする。何とか対策打たないとなあ…。

そんなわけでヤックでハンバーガーと…ストロベリーシェークで腹ごしらえをし、隣のモールへ向かう。

…その間、

「ねえ、あれって…」

「お、あれ旧型のボカロじゃね？」

「あ、懐かしい、ミクだ」

町中の視線を集める事になった。

「…なんか注目されてますね、私達」

「まあもう生産されてない固体らしいからな。おまけにそんな格好だし」

「そんな格好そんな格好言わないでくださいよあ。これって学生で言うなら制服みたいなものなんですから、それ否定されると何とも言えない気分になるんですけど…」

「いや、別に否定してるわけじゃないけどさ、さすがにその格好で歩き回られるのは俺も困るって言うか…」

「まあその辺の事情は分かってるつもりですけど…だからこうして服買いに行くわけですし」

「…そうだな。よし、とつとと行くぞ」

電車に乗り、5分間歩いてモールに到着する。店内に入った途端、周りが服だらけと言う空間が新鮮だったのかミクは凄い勢いで店の奥のほうまで走って行ってしまったので、慌てて追いかける。

店の奥ではしゃぐミクを見つけ、何となく邪魔するのは悪い気がして通路の端にあったベンチに座って物珍しそうに服を手取る彼女を見守っていると、

「あれ、カナじゃん。何やってんのこんなところぞ？」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。振り向くとそこには、

「…葵か。お前こそ何やってんだ？」

そこには俺のもう一人の幼馴染の葵の姿があった。

「何って、服買いに来ただけど？ってかそれ以外にお店に来る理由なんて無いでしょ？ってかあんたこそ何でこんなところにいるのよ、ここ女性用よ？」

「…」

「ちよつと、何で黙るのよ？…まさかそついう趣味が！？」

「あるか！」

「そうか、そつだったのか…。まあ『奏』なんて女の子みたいな名前してるからしょうがないのかな…？」

「だからねえよ！」

こいつには昔から何かとかわれる。その最たる例が、「奏」と言う名前が女つぽいからと言う理由で「カナ」と言うあだ名をつけられた。

「…で、結局何やってるのよ？」

「…あれの服買いに来たんだよ」

目線ではしゃいでいるミクを指す。葵は彼女に気付くと少し驚いたような素振りを見せた。

「あれって…初音ミクじゃない。何あれどうしたの？」

「昔響が福引で当てたのを使ってないからって昨日もらった」

「響が？…あそつか、そつえばアイツ今日からエジプト行くんだっけ」

「そ、んで持って昨日引越しの手伝いしてたら押入れの多くから出

てきて、捨てるのも勿体無いとか言っただけで俺にくれた」

「成程ねえ…そういうえばあんた音楽やってるくせに歌は全然ダメだもんね」

「そういうこと、まあ色々あつてアイツは今歌えないんだけどな」

「…ボーカロイドが歌えないって致命的なんじゃない？」

「まあな、最低でも2ヶ月は歌えない。でもその間に俺があいつの使い方覚えればまあ無駄にはならないだろ」

「いや無駄でしょ…。まあでも、あんた相当な変わり者ね」

「何が？」

「普通はボーカロイド用の服なんて買いに来ないわよ、ボーカロイドってのはあくまで歌を歌うためのロボットなんだから」

「ロボットじゃなくてアンドロイドだ」

「同じでしょ。まあでもボーカロイドに服買っつて言うのは…そうですね、パソコンに化粧品買っつてあげるようなもんよ」

「…」

パソコンに化粧品…という例はよく分からなかったが、何となく言いたい事は分かった。

要するに、無駄だと言いたいこと。猫に小判、豚に真珠。ボーカロイド、つまり機械に服なんか与えたところで意味なんか無いと言いたいのだろう。

…果たしてそうだろうか？確かにミクは機械だが、服を彼女に買っつてやるのが無駄とはとても思えない。

「カナ、ほらあの子呼んでるわよ？」

「え？あ、ああ。じゃあまたな」

「うん、また明日」

葵と別れてミクの元へ。

「どうした、決まったのか？」

「はい！試着してきても良いですか？」

「あいよ、行ってこい。俺はあの辺で待ってるから」

「だめです、マスターも来てください！感想聞きますから！」

「え、ちょ、待ってっ！おい、ミク！」

俺はテンション絶好調の彼女の手によって、試着室へと、正確には試着室前のベンチへと強制連行された。

…うん、やっぱり無駄なんかじゃない。こんなに喜んでくれてるんだから、絶対これは無駄ではないはずだ。

第05話 買物へ前半〈（後書き）

毎回サブタイトル考えるのめんどくさい…って言うか難しいです。
なかなか良い感じのが浮かばないんで、良いのが思いつかなかつた
らそのまんまのタイトルで行こうと思います。

第06話 買物〈後半〉（前書き）

申し訳ありません、今回いつもに増して短いです。（1400字く

らい）

これなら2パートに分ける必要なかったんじゃないか…

第06話 買物〈後半〉

「じゃあマスター、ちゃんと待っていてくださいね？逃げたら怒りますよ？」

「分かってるって、ここまで来たら観念するよ」

ベンチに座る俺に念を入れて、ミクは試着室の中へ、それこそ踊るような軽い足取りで入っていった。

「…ふう」

一息つく。ここまで注目されるわ葵に軽い質問攻めに合うわ、拳句の果てにミクにここまで引張ってこられるわ、なんだか忙しい午後だった。

一体いつまでこの一時の休息が続くか分からないが、とりあえず一休みしよう。

？ ？

そして待つこと20分。

「…遅い、気がする」

女の子の着替えがどれほどかかるのかはよく知らないのだが、20分は長い気がする。

ミクの5分後くらいに入っていた人だっちょつと前に行っ
たし、何かあったかな…？

そんな感じでちよつと心配になってきた頃、

「マスター、どうですかこれすごい可愛くないですか!？」

カーテンが勢い良く開いて、20分前とは違うミクが目の前に現れた。

ハートがプリントされた白いTシャツの上に白いフード付きの上着、そしてピンクのスカートに身を包んだ彼女は…うん、素直に言おう、可愛かった。

「…ちょっとマスター、ちゃんと聞いてますか？」

「え?あ、ゴメン、ちゃんと聞いてるよ。うん、良いんじゃないか?」

「ですよね!?!こんな服着たこと無かったから新鮮で面白いです!」
「それは分かったから少し落ち着けて」

ミクははしゃぎにはしゃいでいる。俺の前で一回転したかと思えば一度試着室に戻って鏡を見て自分の姿を見ていたり、落ち着き無く動き回っている。

「それにしても時間かかりすぎじゃないか?20分はかかってたぞ?」

「しょうがないじゃないですか。こんな服慣れてないし、この髪で着替えるの結構大変なんですから」

「ああ…」

そうか、服に慣れてないとかはともかくあの髪はなかなか邪魔だろうな…。

「マスターマスター、これ買ってきましょう!」

「分かった分かった、分かったからいい加減落ち着けて…。って言うか買ってくならまず脱げ」

「え〜!? せつかく苦労して着たのに…」

「しょうがないだろ、そういうルール。そこにも『試着』室って書いてあるだろ」

「それはそうですね〜…はあ」

ため息をつきつつ、試着室に戻っていく。

さすがに二回目です少しは慣れたのか、10分ほどで元の服に戻って出てきた。

「しっかし、人間服だけでこうも印象変わるもんなのかな…」

「人間じゃないですけどね」

「…そういえばそうだったな」

「いい加減覚えてくださいよ…」

…呆れられてしまった。

そういえばこいつ人間じゃないんだっただな、気を抜くと完全に忘れてしまうから困る。

って言うか別に悪い事じゃないから良いじゃないか。

何てことを考えつつレジで支払いをし、服が入った袋を持って店を出る。

「さてと、服も買ったしこれからどうするんです?」

「ん〜、何も考えてなかったけど。どっか行ってみたいところあるか?」

「私は特に無いですけど…」

「じゃあ今日はもう帰るか、宿題もやってないし」

「…そこはやってから来ましょーよ」

モールを出て駅へ向かう。そして切符を買…おうとした時、

「あっ
」

不意にミクが、何かを思い出したように声を上げた。

「どうした？」

「…パジャマ、買うの忘れてません？」

「…」

…モールに戻ることになった。

第06話 買物へ後半〈（後書き）〉

テニス部の活動が開始したので、2ヶ月くらい更新速度が若干落ちるかも、もしくは1話1話が短くなるかもです。ごめんなさい

第07話 千歳奏プロフィール(前書き)

意図したわけではないのですがタイトルのように奏のプロフィール説明のようになってしまった。まあそれはそれで良い…のか? ; ;

第07話 千歳奏プロフィール

モールに戻りパジャマを購入し、家に帰って飯も食って風呂にも入って、寝る準備万端の夜。

「ここをこうして…と」

俺は昨日と同じくパソコンをいじってボーカロイドの勉強をしたりする。

「どうですマスター、少しは分かってきましたか？」

パジャマに着替えたミクがベッドから立ち上がり、パソコンモニターが見える位置まで来る。

「理屈はな。これをいじると声がどうなるとか頭では理解できてきたけど、実際に歌わせて細かく調声出来るようになれないと感覚は掴めないな」

「えっと…ごめんなさい」

「え？あ、そっかゴメン、別にそういう意味じゃなかったんだけど」「いえ、わざとじゃないのは分かっているので大丈夫ですよ」

…しまったな、勉強に集中してて無神経な事言っちゃった…。少し重くなってしまった雰囲気や軽くしよう話題を模索している、と、

「そ、そっだマスター！」

「な、何だ!？」

ミクの方から声をかけてきた。同じく場を和ませようとしていたのか、若干声が上ずっていた気がする。ついでに俺も釣られて声が裏返ってしまったような気もする。

「い、今あんまり感覚掴めないなら、今のうちに曲だけ作っちゃったらどうです？」

「…あゝ、それも良いかもな」

確かに調声の仕方が分かってても作る曲がないんじゃない意味がない。だから今ミクが歌えないうちに曲を作っておくのは良いかもしれん。

「そうするかゝ、つつつても曲なんか作ったこと無いから勝手がイマイチ分からんが」

「あれ、曲作ってるから響さんに私を譲ってもらったんじゃないかなってんでしたっけ？」

「曲作ってるわけじゃないぞ、楽器色々やってるから曲ぐらい作れるだろって」

「色々…ですか？」

「まあそれなりに。えゝつと…ギター、ピアノ、バイオリン、あとは今ベース練習中」

「確かに色々やってますねえ。何気に全部弦楽器だし」

「ピアノって弦楽器だっけ？」

「実際は鍵盤楽器の一種ですけど、分類は打弦楽器なので弦楽器で良いんじゃないですか？」

「…ポーカロイドのくせに結構適当なんだな」

「別にポーカロイドとか関係ないでしょ、それに適当なわけじゃなくてピアノの分類そのものが中途半端なんですよ。あくまで私の意見ですけどね。というかそんな事より作曲の話しましょうよ」

「んなこと言われてもなあ…」

確かに楽器は色々やってるけど、それと作曲はまったく関係ない気がする、と言うか絶対関係ない。曲を演奏するのと曲を作るのは確実に勝手が違う。

「何でも良いんで漠然としたアイデアくらい無いんですか？バラードとかポップとかロックとか。個人的にはフワフワしたポップが歌いたいですけど」

「さり気なく自分の要求を入れてくる辺り抜かりないなお前。まあでも今はまだ分からないかな、どんなのが作りたいかは考えてはおくけど」

「え〜…はあ、まあしょうがないですかね。曲作ったこと無い人に急に曲作れって言うのは無理がありますし。良いですよ、じっくり考えてみてください」

「悪いな」

「いえいえ。それじゃあ、別の話題を。昨日から気になってたんですけど」

「何？心当たりはいくつかあるけど」

「マスターのご両親はどうしてるんですか？全然姿が見えないから」

「あの二人は…今は多分オーストラリアにいると思う」

「…何故そんなところに？」

「WWOって知ってる？」

「WWO？確かワールドワイドオーケストラの略、でしたっけ」

「そ、うちの親二人ともそのメンバーなんだよ。だから基本的に家にいないってわけ」

WWOって言うのは、その名の通り世界をまたに駆けて演奏をする楽団の事だ。

なかなかレベルが高いらしく、入るのはなかなか難しいらしい。

「もしかしてマスターが色々楽器やってるのってその影響なんです

か？」

「まあそうだな、バイオリンは父さんの、ピアノは母さんの影響で初めて、その後自主的にギターとベース始めた感じ」

「へえ、って事は相当上手なんですか？」

「知らね、他に比べる人なんていなかったし」

「あ、じゃあ今からやってみてくださいよ！私興味あります！」

「今からとかふざげんな、何時だと思つてやがる。近所迷惑も考えんさい」

「ええ、。じゃあ明日！」

「学校あるからそのあとな。帰ってきてからやってみよう」

「…分かりました、それで妥協しましょう」

「そりゃどうも。さて、んじゃ今日はもう寝るか」

「そうですね。おやすみなさい、マスター」

「ん」

パソコンの電源を切つて居間に下りる。

今日は響のミニ送別会とか買物とか色々あつて疲れたからすぐに寝られそうだ…。

第07話 千歳奏プロフィール（後書き）

なんだかどンドン状況説明が減って会話が多くなっていく気がする。
何とかせねば…

第08話 寂しがり屋のミクさん（前書き）

今回は前回の流れ的に奏の演奏会にする予定だったんですが、予定変更で奏君には学校に行ってもらいましたw

演奏会は次回と言う事で。とは言っても、作者がバイオリンしか出れないので細かい描写や用語などは全然期待しないでください；；

第08話 寂しがり屋のミクさん

「マスター、おかわりお願いします」

「…ロボ…アンドロイドのくせにホントよく食うな」

「育ち盛りですからね」

「…いやまあ設定年齢的にはそうだろうけどさ」

突き出された茶碗を受け取りご飯を盛りミクに返す。それを受け取った彼女は食事を再開した。

その食べ方は上品に見えるのだが…なんか速度が尋常じゃない。何であんなにチマチマ食べてるっばいのに30秒足らずで半分以上なくなってしまうのだろうか。

「…お前つてもしかして結構大食い？」

「いえ、そんな事無いと思いますよ？これ以上食べられませんし」

「ああそう、良かった…」

ホント良かった、これ以上食べられたら弁当の分がなくなるところだった。

俺が安堵している間にミクは手を合わせて「ご馳走様でした」と呟き食器をさげていた。ちなみに服は最初着たときにきていた制服（？）だ。

「マスター今日学校ですよね？」

「ん」

「私ご飯どうすれば良いんですか？って言うかマスターがいない間私何してれば良いんですか？」

「どうもしなくて良いだろ、テレビ見てたりゲームしてたり寝てたり好きな事してれば良い。昼飯は弁当のおかず多めに作って冷蔵庫

入れとくから、好きなタイミングで食べ」

「…好きな事してていい、って言うのが一番困るんですけど」

…そんな事を言われましても。

実際何もやってもらおうような事はない。掃除は先週の金曜日にやったばかりだし、洗物だって学校行く前に済ませるし、洗濯物も昨日の夜やってしまった。

…うん、だから退屈だろうけど、悪いが待っていてもらおうしかない。

「あ、じゃあマスターと一緒に学校に」「却下だ」

言い切る前に遮る。どうせそんなような事を言い出すだろうとは思っていたから対して動揺もしない。

「うう〜…でもそれじゃ私暇で死んじやいますよ…」

「我慢しろ、しょうがないだろ？」

「ううう〜…！」

唸ってはいはいるものの何の反論も帰ってこないのは、彼女自身仕方が無いと思っっているのだろう。でも暇になるのは確実なので納得できない、と言ったところか。

「分かりました、じゃあ交換条件です！」

「何故交換条件を突きつけられなきゃならんのかまったくもって理解できないが、まあ聞こう」

「今日放課後友達呼んできてください」

「じゃ、行ってきま〜す。昼飯は冷蔵庫の中な」

「ちよ、待つてくださいいよ！呼んできてくださいいね!？」

「めんどくさいから嫌だ、さらば」

「マスター！ちよっと！待つてくださいいってばああああ…！」

泣き叫ぶミクに背を向け家を出る。もうめんどくさくて付き合いきれないとかそう言うわけではなく、普通にそろそろでないかと遅刻する。ちよつと可哀想な気もするが、帰ってきてから謝ろう。

「カナ、おはよ。どしたの、今日はいつもより遅かったね」

外に出て少し歩くと、いつものように交差点のところで葵が待っていた。

幼馴染だからというわけではないが、昔から俺、葵、響の三人で登校していた。今は響がエジプト行ったから俺と葵の二人だけだけど。

「ミクに『暇だからなんか面白い事教えて』ってねだられた」

「あ、そつかそついえば貰ったんだったね。どう？」

「別にどうもこうも無い、家に住人が一人増えたただけだ」

「いや、話題に出来るネタが無いかなって」

「別にねえよ」

「なんだ、残念」

若干からかわれてるような気がしなくも無い会話をしつつ10分ほど歩き、学校に到着した。

「ギリギリセーフ…」

「まだ5分前だぞ、ギリギリって程でもないだろ」

そうは言いつつもう少し急ぎ足で教室へ。ちなみに葵とは同じクラスだったりする。

「あ、やっと来た。どうしたのさ、今日はいつもより遅かったじゃん。カナにしては珍しいよね」

教室に入ると茶髪で背が低めの男子生徒、海翔かいとが声をかけてくる。中学からの付き合いで、こいつの事は親友だと、少なくとも俺は思ってる。

「まあこいつもなんだかんだで葵と同じく俺のことを「カナ」と呼ぶのは未だに納得はいつてないが。」

「まあな、色々あつたんだよ」

「へえ、色々つて？」

「色々は色々。主にうちのボーカロイドさんがワガママで家から出るに出不れなかつただけだ」

「ふん…ってボーカロイド!？」

「そう、ボーカロイド。初音ミクって一番初期型の奴」

「あれ、ミクつてもう生産してないんじゃないっけ？」

「まあそうなんだけど…」

そこまで言ったところで担任が教室に入ってきたので、「昼休みにな」と海翔に告げて自分の席に付く。

??

昼休みに大まかな事情を海翔に説明し、時間は飛んで放課後。

「さつてと、ミクさんの機嫌がこれ以上悪くなる前に帰りますか…」

「あ、ねえねえカナ、今日カナんち行っても良い？」

「あ、僕も行きたい」

「ん？何で？」

「ミクちゃんと遊びたいから」

「同じく」

「…」

…ま、いつか。アイツもこいつら連れてったらそれはそれで喜ぶだろうし。

「分かったよ、好きにしる。ただし何も菓子はないからな」

「え〜…」

「僕は良いよ、無理言ってお邪魔させてもらうんだし」

うんうん、海翔は葵と違って物分りが良い、と言っか普通に良い奴だな。少しは見習え葵。

と言っわけで、友人二人が家に寄る事になった。

第08話 寂しがり屋のミクさん（後書き）

海翔君とKAITOさんはまったく関係ありません、名前だけお借りしました。

第09話 拘ねミクさん（前書き）

演奏会は次回に延期になりました。（ごめんなさい）

第09話 拗ねミクさん

「ただいま」

「おじゃまします」

「右に同じ」

挨拶ぐらいちゃんとしなさい。と、隣で挨拶を省略しやがった葵に心の中でツッコミを入れてみる。というかそもそもまったく略せていない気がする。

玄関で靴を脱ぎ、揃えてから家にかかる。

「カナは相変わらず中途半端に几帳面だね」

「几帳面と言うか細かいだけでしょ？」

「どうして葵ちゃんはそう意地悪言うのかなあ……」

二人の会話を華麗にスルーしつつ、少し急ぎ足で家の中へ。

…今朝半ば強引に放置したミクが拗ねてないかが気がかりだ。返事も無いし。

居間とキッチン、ダイニングにもいないことを確認し、二階に上がり俺の部屋へ。

「ミク？」

扉を開ける。中には、ミクがいた。…いるにはいたんだが。

「…」

部屋の隅で丸まっていて、言葉で形容しがたいオーラを放っている。何て言うかこう…近寄りがたい負のオーラが。もう拗ねてるのかそ

ういっレベルじゃないような…。

「えっと…ミクさん？」

思わず敬語になってしまふ。返事はない。その代わりに、規則正しい息遣いが耳に届く。…あれ？

「…寝てる？うん、寝てるなこれ」

その規則正しい息遣いが寝息だと気づき、同時に寝ていることに気付いた瞬間、さっきまで感じていた負のオーラがなくなった気がした。

「ミク？起きろ、お客さん来てるぞ」

近寄り肩を揺する。小さく「ううん…」と唸った後、ゆっくりと顔を上げて俺の顔を見る。…ほっぺに涙の跡があるように見えなくもな…

「マスター！！」

「うわあああ！！」

抱きつかれた。むしろ突進に近い気がした。何て冷静に解説してる場合か！

「マスターどこ行ってたんですかあ！寂しかったんですよ！？本当に寂しかったんですよ！？テレビもお昼は面白い番組なんて全然やってないしゲームにしたってマスターの趣味と私の趣味が必ずしも合ってるわけじゃないですし、と言つか合ってますでしたし、やる事無かったんですってこの部屋でうずくまって寝てたんですよ！

？なのに帰ってくるの遅すぎでしょ！」

「待て待て落ち着けとりあえず離れる！」

二人で床をゴロゴロと転がりまわりつつ、俺は彼女を引っぺがそうともがく。すると、

「カナ？なにやって…」

「カナ何やってんの？何かさわがし…」

このタイミングでなくてはいけなかったのかどうかは知らないが、とにかく葵と海翔が部屋に入ってきた。

…時間が止まった気がした。

「…お邪魔だったみたいね、ゴメン。下行ってるわね」

「あ、えっと…カナ、ミクちゃん、ごゆっくり…」

「待て待て待て待て！！誤解してる、絶対誤解してる！と言っか助けてくれ！」

その後、非情な親友と幼馴染はしばらくもがく俺を（楽しそうに）觀賞した後、とりあえず救出された。

？
？

「…まったく、取り乱しすぎだ…」

「…、ごめんなさい…」

10分後。

消耗しきった俺、落ち着いたミク、ニヤニヤ笑う葵、そしてちよつと居心地の悪そうな海翔の四人でテーブルを囲んで座っている。

「お、お恥ずかしいところをお見せしました…」

「いやいや、面白かったし可愛かったよ？」

「もう許してください…」

うん、確かに可愛かった。…って何を言ってるか俺は。

「それでマスター、友達を連れてくるのは『めんどくさいから嫌』なんじゃなかったんですか？」

嫌味っぽく言ってくる。…やっぱり朝の根に持ってんのかな？

「悪かったって、そんな拗ねんなって」

「拗ねてなんかないです」

そう言っただ頬を膨らませてそっぽを向くミク。ああもう可愛いなチクシヨウ！

…なんかさっきのドタバタで正常な思考回路を失っている気がしなくも無いが、まあこの際気にしない。

「はいはい、拗ねてないのは分かったから。とりあえずそのちっこいのが葵、もう一人のちっこいのが海翔」

「…そんな説明失礼ですよ。って言うか全然紹介になってないですよ、名前しか分からないじゃないですか」

「そもそもまずちっこい言うな、女の子は背低いほうが可愛いもんなのよ。と言うわけでよろしくミクちゃん、あたし葵」

「僕だって170あるんだから別にちっこくないよ、カナが185もあるからちっこく見えるだけだって。ミクちゃん、僕海翔。よろしくね」

「あ、はい。二人ともよろしくお願いします」

それぞれが俺の紹介に不満を言いつつミックに自分で自己紹介する。
それが終わると、

「じゃあマスター、昨日の約束守ってくださいね」

話の矛先がまったく予想外の方向に向いた。

「待て待て、そこでどうしてそういう話になる？お待ちかねの友達
が来てるんだから友達と遊べよ」

「それも良いですけど、私としてはマスターの楽器の腕を知る事が
第一優先です」

「カナ、何の話？」

「歌わせられないから先に曲作ろうってことになって、それで昨日
ミックが俺の演奏聴いてみたいって言うから今日学校から帰ってきた
ら演奏する予定だったんだよ」

「へえ、じゃあ今からやれば良いじゃん。僕も久々にカナの演奏
聴きたいよ？」

「あたしも聴いてやっても良いわよ」

何故に上から目線？まあもう慣れたっちゃ慣れたから別に良いけど
さ。

というわけで、…いやどういうわけだ？まあとにかく今から演奏会
を始める事になった。…どうしてこうなった？

第09話 拘ねミクさん（後書き）

葵「女の子は背低いほうが可愛いもんなのよ」

まったくもってその通りだと思います。

あ、それから今更ですが、誤字・脱字等ありましたら、ご指摘いただければ速攻で修正しますので、お知らせお願いします。

第10話 ミニ演奏会（前書き）

お待たせしました、演奏会…と呼んで良いのか果てしなく微妙ですが、とりあえず奏さんの演奏会です。

第10話 ミニ演奏会

「さてと、こんなもんか？」

居間に楽器を集める。とは言っても、ピアノはそもそも居間にあるので実質持つてくるのはバイオリンとギターだけだったりするのだが。

ちなみに、今回ベースはパス。いや、だってアンプに繋いだり色々めんどくさいじゃん、演奏できるまで。アンプ部屋のクローゼットの奥のほうにしまっただけあるし、引っ張り出すのも面倒だし。

「そういえばマスター、ギターってアコースティックとエレキどっちなんですか？」

「ん？どっちも行けるけど今回はエレキはパス。ベースと同じ理由で演奏できるまでがめんどくさい」

「…大した手間じゃないような気もするんですけど」

「大した手間なの」

「…」

ミクの白い視線を華麗に受け流しつつ、楽器の準備をする。

「まずどれから行つとく？」

観客（ミク・葵・海翔の三人）にリクエストがあるかどうかを聞いてみた。

「じゃあギターで」

「ピアノ」

「バイオリン」

…ものの見事に分かれたな。

「じゃあギターで」

「やたっ！」

「何でミックちゃん優先なのよ、あたしと言う幼馴染の意見は？」

「そもそも最初に演奏会をしてくれと頼んできたのはミックなんだからミックの意見を優先するのは当然だろ」

「…まあ良いけどさ」

葵はグチグチ良いながらも渋々了承した感じ。対して海翔は「まあそれが妥当だよな」なんて感じて快く了解してくれた。やっぱ良い奴だ。

と言うわけで、まずはギター（アコースティック）。特に何を弾くとかは考えてなかったので、適当に「世界に一つだけの花」とか弾いてみた。

「…うん、やっぱうまいわよね」

「そうだね。まあ比べる人がいないから実際どれくらいの腕前なのかは分からないけど」

「…」

葵と海翔がそれぞれの感想を述べている横で、ミックは静かに俺の演奏に聴き入ってるようだった。

…なんかそんな真剣に聴かれるとちょっと緊張する、と言うか気恥ずかしい気がする。

弾き終える。三人の拍手を受けて、とりあえず一礼してみたりしてみた。

「マスター、上手じゃないですか！」

ミクは開口一番そう言った。

「そうかね？さっきその二人も言ってたみたいに比べる奴がいな
いから自分の実力なんて全然どんなもんか知らないけど」

「かなりうまいと思いますよ？」

ふん…。まあ音楽が本職の彼女が言うのならうまいのかもしれない。
い。

「次は？バイオリンとピアノどっちが良い？」

「そうですね…。じゃあバイオリンで」

「了解」

ギターを置き、バイオリンを手に取る。

やっぱり何を演奏するなんて考えてなかったの、とりあえずカ
ンでも弾いてみる。

楽譜はなかったが、親父に習った初めての曲だったので頭と指が覚
えている。まあ最初にカノンを教えるのもどうかと思うんだが…。
演奏終了。

「バイオリンの腕のほうがギターより上っぽいですね、お父様から
習ってたんですか？」

「そ、最初に習い始めた楽器でもあるしな」

「そうなんですか。よく楽譜無しで弾けますね」

「最初に習った曲だったからな、楽譜なくても体が覚えてるんだよ」

「…最初に習った曲がカノンって無謀な気が…」

「だよなあ…」

ミクと二人だけで会話を続ける。葵と海翔の二人は二人で先ほどの

感想を述べ合っているようだった。

ラスト、ピアノ。適当にエンターテイナーとかを弾いてみた。ちなみにエンターテイナーは楽譜無しでは弾けないので、ちゃんと楽譜も持ってきた。

「…ちょっと気になったんですけど」

「何？予想以上にヘタクソだったか？」

「いえ、凄く上手だったですよ。ただ、選曲についてちょっと物申したい事が」

「エンターテイナー良いじゃんか、名曲だぞ？」

「曲がどうってわけじゃなくてですね…」

「じゃあ何だよ？」

「…どうしてボーカロイドの私の前なのに一曲もボーカロイドのオリジナル曲を弾かないんですか？」

「…いや、だって俺ボーカロイドの曲なんて知らないし」

…沈黙。

…あれ、何だろこの空気。何かあんまよろしくない事を言ったような気がする。

「…え、じゃあ何ですか、マスター。私の活躍全然知らないんですか？」

「お前の活躍ではないだろ、あくまでお前の仲間の活躍であって」

「今は些細な問題です。まあとにかく…良く分かりました」

「な、何だよ？」

…何故だろう、なんだか凄く嫌な予感がするんだが。

「どうやらマスターには、私の使い方とか曲の作り方とかそういうこと以前に色々知ってもらわなきゃいけないことがあるみたいだす

ね

「は、はあ……」

怖いですよミクさん、何か凄い笑顔だけど物凄く怖いですよミクさん。

…まあとにかく、楽器の腕は認めてもらえたっばいからとりあえずまあいいか。

第10話 ミニ演奏会（後書き）

少しずつ色々な方に読んでいただいているみたいで、本当に嬉しい限りです、ありがとうございます。>> これからも細々とやっていくので、よろしければどうぞお付き合ってください。^^

第11話 彼女の活躍（前書き）

今回実際にある初音ミクのオリジナル曲の題名や作曲者さんの名前を数多く使っております。問題があるのかどうか分からないのですが、もし問題があるのなら速攻直しますので、そういうの詳しいかたどうか教えてください！<>

第11話 彼女の活躍

演奏会の後、しばらく4人で適当にだべって5時半頃に解散した後、飯の準備開始。今日は葵やら海翔やらが来て疲れたので適当にカレ
ー。

その後適当にグダグダしつつ、風呂に入って現在9時ちよい前。俺が日課になりつつある調声勉強に励んでいると、風呂上りのミクが部屋に入ってきた。

「マスター、どうですか勉強のほうは？」

「相変わらず何とも言えない。理屈は頭に入ってくるけど、実際にどんな感じかは分からないからな」

「そうですね。でも知識として頭に入れるのも重要だと思うので、退屈かも知れませんが頑張ってください」

「分かってるさ」

うん、分かってる。分かってるけどさ、やっぱり知識を得ているのに実践できないというのはなかなかにもどかしいわけで、イライラ…までは行かないけど、まあ確かに退屈ではある。

一つ小さくため息をついて、モニターの電源を切る。椅子を引いて立ち上がり、部屋を出ようとドアのほうに向かう。が、

「ちょっと、どこ行く気ですかマスター」

それはミクによって阻止された。

「…どこも何も、疲れたからテレビでもみてゴロゴロしようかと」

「それさっきしたじゃないですか」

「…じゃあ本でも読むか。お前が来る前に買ってまだ読んでないラ

ノベとか小説あるし」
「そうじゃなくて！」

突然怒鳴られた。…いや、まったく納得いかないんだが。

「何だよ、俺なんかやんなきゃいけないことあったっけ？宿題も今日はないし…」

「…マスター、私が演奏会の時に言ったこと忘れたんですか？」
「演奏会の時？」

…そう言われてみれば何かとてつもなく嫌な予感がしてたような気がしないことも無い。

「…とにかく、パソコンの前に戻ってください」

「…わ、分かった」

何か有無を言わさぬ雰囲気を全身から醸し出してるもんだから、思わず弱気になって頷いてしまう。

正直言つて今はホントにパソコンやるの疲れてたから勘弁して欲しいんだが、頷いてしまった以上仕方が無い。俺は言われたとおりパソコンの前に再び座り、モニターの電源を入れる。

ついさっきまで起動していたので数秒と待たずにスクリーンが映し出される。画面にはボーカロイドの調声技術をまとめたサイトが映っていた。

「新しいタブを開いて、『ニコニコ動画』って言うサイトにアクセスしてみてください」

「あゝ、聞いたことあるなそのサイト。何か動画見るのか？」

「はい」

…なんかミクさんが冷たい気がする。

とりあえず言われたとおり検索エンジンで「ニコニコ動画」を検索し、一番上に出てきたサイトをクリック。

「そういえば動画見るならyoutubeとかじゃダメなのか？」

「ダメではないですけど、ここに一番色々あります」

「ふ〜ん…」

…え、あるって何が？

「…なあミク、俺達は今から何を見るんだ？」

「決まってるでしょう、世界での私の活躍です」

…ああ、そういう話ですか。

要するに今行われているこれは、さっき俺が言った「ボーカロイドの曲なんて知らないし」と言う発言が癪に障ったか何なのか、とにかく俺に自分のことを知ってもらおうという企画らしい。

「まずとりあえずメジャー、と言うかこれは絶対に知っておいてもらわなきゃいけない曲から行きましょう。じゃあ手始めに…」

そう言っただけで色々と彼女が歌う曲を教えてもらった。最初に教えてもらった「メルト」「ワールドイズマイン」「恋は戦争」ってタイトルの3曲は全部同じ「superceiler」ってグループが発表した作品で、プロデビューしたらしい。その後の数曲も同じ「superceiler」の作品で、なるほど確かに評価される理由も分かる、と言うか評価されて当然って感じのクオリティだ。

「…やっぱスゲエ人はスゲエんだな」

「何感心してるんですか、マスターもこれくらいを目指して頑張っ

てください」

…どうやらうちのお姫様（当然ミクさんの事）の目標は相当高いらしい。俺にプロになれと申すか、無茶言うな。

その後も色々と曲を教えてもらった。テクノポップ系の作曲が得意な「Live tune」ってグループの「Packaged」、
「Last Night, Good Night」とか、ボーカ
イドならではの感じの「初音ミクの消失（LONG VER
SION）」に「ローリングール」とか、色々教えてもらった。

うん、どうやら彼女は本当に色々と活躍しているらしい。ちょっと見直した。見直したからそろそろ寝かしてくれ、気付いたらもう1時じゃねえか。

「そうですね、今日はこれくらいで良いでしょう。少しは私の事も分かってくれたみたいですし」

「そりゃどうも…」

ミクの許しを得てモニターの電源を落とし、部屋を出る。

まったく、確かに面白かったけど疲れた…。一日目から飛ばしすぎだ、もうちょっと俺の体を労わってくれ。

何て愚痴を頭の中でブツブツと呟いていると、

「おやすみなさい、マスター。お疲れ様でした」

扉越しにミクのそんな声が聞こえた。

俺も「ああ、おやすみ」と返事を返し、リビングに降りる。何故だか、さっきの様に愚痴を言う気分にはならなかった。さて、今日は疲れた…ゆっくり休むとしよう…。

第11話 彼女の活躍（後書き）

小説とはまったく関係ないんですが、ちょっと実生活で面白かった話を。

テニス部のコーチが右耳にブルートウースのマイク付きヘッドセットを着けていて、友達と「おお、何かカッキー」「あれで電話とか出るんだろぅな」とか言ってる盛りがってました。

そしたら実にタイミングよく電話がかかってきて、「お、ヘッドセット使う!？」って思ったら電話を取り出して、まさかの左耳に当たって通話してました。

友達と二人で「ええええええ!？」って最初すっごい驚いて、その直後大爆笑してました。

…どうでも良いですねすみませんでした。ではでは、次回にご期待(?)です。

第12話 世界で一番お姫様（前書き）

ボーカロイドってキャラクターはたくさんある曲の中でそれぞれ性格が違ったりするから、色々妄想できて楽しいですよ。

第12話 世界で一番お姫様

「…ター、マ…ター…！」

…何だろう、誰かの声が聞こえる。

「…スター、起き…ださい！マスター！」

この口調は…ミク？

「早く起きてくださいってば、遅刻しますよ!？」

…なるほど、どうやらミクは寝ている俺を起こしに来てくれたらしい。でも、ぶつちゃけまだ眠いからまだ寝てよう、遅刻したって別にどうでも良いし…。

「マスター？マスター!？…ああもう！いい加減起きなさいって言うてんでしょおっ！」

「うわあああ!？」

突然脇腹辺りに激痛が走ったかと思うと、一瞬の浮遊感の直後に背中を鈍痛が襲う。

「いっつつつ…。な、何が…？」

混乱して慌てて状況を把握しようと思いと辺りを見回す。

場所はいつもの居間。隣にはソファがある。…まあ普通に考えたらソファで気持ちよく寝てたところを叩き起こされたんだろっな、ソファから落とすって言う荒業で。

じゃあ次の質問は、一体誰が？…つつつても、この家にいるのは俺の他に一人しかいないので自ずと答えは見えてくるのだが…彼女がこんな事をするだろうか？

「…何しやがる」

俺は目尻に涙を浮かばせながら俺をなかなかの力技で叩き起こした犯人と思われるミクを睨みつける。普段の彼女ならすかさず謝罪の言葉を並べるところだが、

「何しやがるじゃない！」

…その日の彼女は、何かいつもと違った。

「…え？」

「『え？』じゃないわよ！まったくもう、せつかくあたしが直々に起こしてあげてるってのに起きないなんて、信じられない！」

「…えつと…お前誰だ？」

目の前にいるピンク色のパジャマに身を包んだこの娘は、確かにミクだ。…見た目は。

何か口調やら態度やらが昨日までと全然違うような気がするんですが…？

「はあ？何言ってるの、まだ寝ぼけてる？」

「…いや、そんな事は、ない、と、思う、けど…」

いかん、何か混乱しすぎて返答がたどたどしくなってる気がする。…
って言うか実際なってる。

「…まあこの際どうでも良いわ、とりあえず奏、朝ごはん作ってよか、奏!？」

「…なによ、あんたの名前呼んだだけでしょ？」

「あ、あんた!？」

「…ああもう、いちいち変な反応してる暇があったらさっさとご飯作って!昨日の夕飯だってカレーなんて適当なのだったんだから、朝ごはんくらい良いもの作ってよね？」

…おかしい。絶対におかしい。

昨日まであんなに他人行儀とまで思えるほど頑なに敬語やら「マスター」やらを使っていたのに、急に命令口調やら「奏」やら使うようになりやがって…。

「…バグか？」

ありえない話ではないと思う。何ていったって、CDの損傷のせいでボーカロイドにとって最も重要な歌を歌う機能を失っているのだ。多少性格に問題が起こったってなんら不思議ではない…？

「…いや、不思議だろ。何だって急にそんな事になるんだよ」

昨日ネット繋いだ時になんかウイルスにでも感染したか?…いや、ネットに繋いだのはパソコンだけだから感染するとしたらパソコンだけのはずだ。

じゃあなんだ、昨日なんか悪いもんでも食ったのか?カレーアレルギーとかだったりして…なわけあるか、って言うかそもそもカレーアレルギーなんてあるのか?

「…ダメだ、欠片も心当たりがない」

…とりあえず飯作るか、あいつの機嫌がこれ以上悪くなる前に。

??

「…うん、まあおいしいじゃない」

「…そりゃどうも」

素っ気無い口調を保ちながらも時折料理の味に顔を綻ばせるミクを観察しながら、俺も朝飯を口に運ぶ。

…こういうところは昨日までと同じなんだよな。まあ素っ気無い感じは昨日とは違うけど、料理を食べるたびに幸せそうに笑うこの感じは昨日と変わらない。

ふと、パツと顔を上げたミクと目が合う。

「…何よ、物珍しいもの見るような顔して。人のことばっか見てないで自分の食べなさいよ」

「あ、ああ…。って言うかさ」

「何よ？」

「さっきお前俺に『遅刻しますよ！』とか言っただけだったか？まだ1時間以上余裕があるんだが…」

ついさつき時計を確認した時、時刻はまだ6時ちょっとすぎだった。学校始まるのが8時で、家から学校まで歩きで15分なのでまだまだ全然余裕だ。

「言ったわよ？そうすればあんたが起きると思って適当に焦りそうな事言ってみたの」

「…そりゃまたどうして？」

「早く朝ごはん食べたかったから。まあ最終的には全然起きなかったからソファァーから蹴り落としたんだけどね」

「…左様でございますか」

…自分が腹減ったからって他人を嘘までついて朝早くから叩き起こそうとするだろうか？どうやらこのミクさんは根っからのお姫様体質らしい。

彼女の豹変ぶりに参りつつ朝食を平らげると、いつもより早く起きた、と言うか強制的に起こされたせいで寝足りないのか、急激に眠気が襲ってきた。

「…悪いミク、ちょっと寝るから30分くらいしたら起こしてくれ」

「え〜…まったく、しょうがないわね。ホントに奏はあたしがいないとダメね」

「…」

何か言い返そうとしたのだが、それ以上の眠気に負けておとなしく眠りに付く。

意識が途切れる直前、優しく微笑むミクの顔が見えた気がした。

…そんなワケ無いが、今の彼女は、横暴、なんだ、か…。

???

「…ター、マスター！起きてください、遅刻しますよ！？」

「…うん？」

体を揺すられる感覚がして、目が覚める。こんな光景をさっきも見たような気がするが、今度は脇腹に痛みがない。

「マスター、起きてくださいってば！」

「…ミク、おはよう」

「あ、はい、おはようございます…じゃなくて！急いで準備してく

「ださい、もう遅刻しますよ!?!」

「…今何時?」

「7時半5分前です、あと5分で学校始まりますって!」

「…学校は8時からだぞ」

「…え?ウソ?あ、えと、その…!」

一瞬キョトンとしたかと思うと、急に顔を真っ赤にしてあたふたと始める。その様子が可笑しくて、「ぷっ」と嘔き出してしまった。

「わ、笑いましたね!?元はと言えばマスターが時間通りに起きないからいけないんですよ!?!」

「俺はいつもこの時間に起きてるだろ」

「い、いいえ!昨日はあと10分は早く起きてました!」

「大差無いじゃん…!」

…よかった、この妙に敬語とか敬称とか使ってくせになんとか全然敬われてる感じがしないこの感じは、いつものミクだ。

…ってことはさっきの何だったんだ?

「なあミク、さっきのは何だったんだ?」

「…はい?」

「いや、だからさっきの妙に高飛車な態度とか命令口調とか『あんな』とか」

「…何の話をしてるんですか?」

…あれ?…事は何か、さっきのは…夢?

まあでも本人が覚えてないなら、多分そうなんだろうなあ…。

「…マスター?なんか変ですよ、大丈夫ですか?」

「え?ああ、大丈夫だよ。ちよっと変な夢見てただけだ」

「変な夢…ですか？」

「ああ、なんかお前が妙に高飛車な態度取ったりお姫様体質だったり、とにかく変な夢だ」

「…それってもしかして、」

「ん？」

「昨日私が教えた歌に思いっきり影響されてるんじゃないですか？」

「…」

確かに、言われてみればそんな感じの内容の歌があったような無かったような…。何だっけ、「ワールドイズマイン」だっけか？

…まあでも新鮮で面白かったから、ぶっちゃけどうでも良いや。

ただ、あれはあれで可愛いような気がした。さすがにずっとあれだと疲れるような気もするが、たまにならあんなミクもいい…かな？

第12話 世界で一番お姫様（後書き）

一番最初に可愛いと思った曲は「ワールドイズマイン」でした。今でもiTuneのプレイリストに入っていて、再生数は現在約1800です。

第13話 ハッピーバレンタイン（前書き）

またやってしまった…時差のせいで日本は一日早くバレンタインが来るの忘れて一日送れちゃいました、ごめんなさい！<> ;
何度間違えれば覚えるやら… ; ; ;

第13話 ハッピーバレンタイン

さてさて、今日も今日とて何の変哲もない一日を過ごして、辺りはすっかり紅く染まっている。

そんな中、俺と葵は二人並んで歩く。海翔は残念ながら帰り道が俺たちと正反対、響はご存知の通りエジプトに行ってしまったので、必然的にこういう組み合わせになってしまふのだった。

「あ、そうだから」

「ん？」

不意に何かを思い出したように葵が鞆の中に手をつ込む。そして、なにやら小さなラッピングされた箱を取り出して俺に渡す。

「はいこれ」

「…いや、はいつて言われても。何だこれ？」

「何って…チョコよ、バレンタインチョコ。まさか今日が2月14日だっけと忘れてたの？」

…そう言われてみれば、確かに今日は2月14日、つまりバレンタインだった。確かにクラスで妙にプレゼント的な何かを渡してる女子がたくさんいるとは思ってたが、そういうことだったのか。…しかし。

「…どういふ心境の変化だ？」

葵が俺にチョコを渡す理由がいまいち思いつかない。去年までは頼んでもくれなかったような…。

「気まぐれよ、気まぐれ。たまたまあまったチョコがあつたからそれをラッピングしただけよ。あ、言つとくけど当然義理だからね？」
「…あつそ」

「いや、まあ分かつてはいたけどさ。でもそこまではつきり何の躊躇もなく言われると、さすがにちよつとへこみたくなる。」

「それとも何、本命がよかつた？」

「…本命がいつて言つたら本命くれるつてののか？」
「考えてあげてもいいかもね」

ヒラヒラと手を振りながら適當っぽく答える葵。その姿や動作からは、こいつがどこまで本気なのか読み取ることができなかった。そんなことを一人で考えているうちに、いつの間にか葵の家の前についていた。

「じゃあねカナ、また明日」

「ん、またな」

軽く手を振り、俺も3軒隣にある自宅の玄関を開けた。すると、

「マスターマスターマスター！」

ミクがものすごい勢いで出迎えてくれた。…や、「おかえり」も言つてもらえてないから果たして出迎えてもらったという表現が適切なのかどうかはいささか疑問だが。

「…ずいぶんテンション高いな。なんかあつたか？」

「台所使つてもいいですか!？」

…さつきからなにやら凄い剣幕だ。怒られてるわけでもないのに、なぜか気圧されてしまう。

「べ、別にかまわないけど…」

「ありがとうございます！」

俺の許可を得たミクは「ブンツ」と音が鳴りそうなほど素早くお辞儀をし、キッチンの方へと走り去った。

「…な、なんだったんだ？」

静かになった玄関に俺の間抜けな声が響く。しかし、当然ながら答えが返ってくることはない。

渦巻く疑問の中、俺はただ呆然と玄関に立ち尽くしたまましばらく動くことができなかった。

？
？

その後、とりあえず部屋に戻って着替えを済ませた俺はさつきの疑問の答えを見つくれるべくキッチンへ向かった。…そこにいたのは、

「…何やってんだ、お前？」

「あ、マスター。何って…料理ですけど」

エプロン姿のミクだった。髪の毛は邪魔にならないようにしているのか、いつものツインテールではなくポニーテールになっている。

…いや、そんな観察はどうでもよくてだな。何でこいつがこんなところで料理してるのかと。

いやいや、ここはキッチンなんだから別に誰が料理してしようと不思議ではないのだが。問題は、なぜボーカロイドであるはずのミク

が、今日になって急に、料理を作り始めたのかということである。

「…何やってんだ、お前？」

もう一度同じ言葉で問いかける。

彼女はさっきと同じように「料理です」と答えてから、ようやく俺の質問の意味を悟ったのか調理する手を止めてこちらに振り返る。

「マスター今日が何の日か知ってますか？」

「何の日、って…バレンタイン？」

「そうです。だから今日くらいは私がお夕飯を作ってあげようと思
って」

「…いや待て何でそうなる？バレンタインは普通チョコ送るんじゃないか？」

「まあそうですけど、今からチョコ作るなんて現実的に無理ありませんし、そもそも私チョコの作り方なんて知りませんし」

…俺としては普通の料理でも作れることが驚きなただけだな。歌えないけど料理ができるボーカロイドって…もうボーカロイドじゃなくね？

「…というかそもそもお前料理できるのか？」

「む、失敬ですね。料理くらい私だって出来ます、バカにしないでください」

「いやだってお前料理本職じゃないだろ」

「大丈夫ですってば、良いからマスターは黙ってくつろいでてもらって大丈夫ですよ？」

「…まあそこまで言うなら任せるけど。あ、ちなみに言っとくけどネギは無いからな」

「またそれですか…、じゃあ良いですよ、レバニラにします」

そう言つて「フフン」と胸を張るミク。…いやいやいや、意味分かんないから。ネギの代わりにニラを使ったからって何がどうなるわけでもないだろ。つて言うかそんなしょうもない事で誇らしげになるな、リアクションに困るだろうが。

「…それは結構だが、レバーなんて無いと思うぞ」

「…はっ、それは盲点でした！どうしよう、他にニラ使う料理…」

…うん、今まで自信がなかったけど、今日のこの様子を見て実感した。やっぱりこの子はアホな娘らしい。普段はそうでもないのだが、こういうちょっとしたところが抜けてるつて言うかなんて言うか、可愛いんだよな。

その日、結局料理は何の変哲も無いオムライスになった。どうしてレバニラからニラを使う料理になって、そこからオムライスになったのかは欠片も理解できないが、味はかなりおいしかった。…ケチヤップでハート書いてあったのにはまいったけど。何であんな事に？バレンタインだからか？…恐るべし、バレンタイン…！

第13話 ハッピーバレンタイン(後書き)

激しく今更ですが、作中の日付は実際の日付と同じとと思ってください。
(曜日は除く)。

第14話 歓迎会計画始動（前書き）

次回辺りに挿絵機能を使う予定です。期待しないで待っていてください
いw

第14話 歓迎会計画始動

「そついえばカナさ」

昼休み。いつも通り俺、葵、海翔の三人が机をくつつけて飯にありついていると、海翔が俺に何かを聞くために顔を上げた。

「何？」

「ミクちゃんの歓迎会ってやったの？」

「歓迎会？」

歓迎会か…。そういわれてみれば、確かにミクが来た事を祝うよう何かをやっていない気がする。まあ必要ないといえば必要ないんだが、やればあいつもそれなりに喜ぶだろうし俺たちもなんだかんだで楽しめるだろうし…。うん、やってもいいかな。

「いや、やってない。やるって言うなら俺は賛成だけど」

「あたしも～。でも歓迎会って言っても何するの？」

「何でもいいんじゃない？適当に飾り付けして料理食べながらわいわい騒いでればそれっぽくなると思うけど。料理は一人の負担にならないように一人二、三品ずつ持ってきてみんなで分けるようにすればいいかな」

海翔はこういう時結構役に立つ、というか何が必要でどういうやり方が一番効率良く物事を進行させられるかを考えるのが凄くうまいのだ。だから何かしらイベントがある時は基本的にこいつがリーダーになる。

「場所は当然カナのとこだよね？」

「それでいいんじゃないかな？あ、でも僕の所で準備してサプライズパーティー風にすることもできると思うけど、どうする？」

「いや、俺んちでいいよ。そんなことより時間決めなきゃだろ」

「場所は『そんなこと』じゃないわよ、重要なことですよ」

「うん、でももうカナの家でやるのは決まったから、確かに今は時間決めるべきかもね。僕は基本的にいつでもいいけど、二人はどう？…って、聞くまでもないかな」

「ご存知のとおり、帰宅部の俺は毎日ダラダラ過ごしてますよ」

「あたしも問題ないわよ」

この中の誰一人として部活には入っていない。だってめんどくさいし拘束されるし、そんなもんに入って頑張るよりこいつらとダラダラ遊んでるほうが何倍も面白いと思うし。…まあ二人がどういう理由で部活に入っていないのかは知らないけど。

「やるなら週末とかがいいかもね。比較的早い時間から集まることもできるし」

「学校サボるって手もあるけどな」

「いやいやないから」

「今日は水曜日か…。『善は急げ』って言うし、今週の日曜日とかはどう？」

「あたしはもちろん賛成、好きなおかずは一番最初に食べる派だからね」

「日曜日か…」

「うん、どうかな。場所がカナの家な以上、最終決定権はカナにあるけど」

海翔に言われ、予定があつたかどうかを思い出す。が、特にない様な気がする。

「大丈夫、問題ないはず。じゃあ日曜日の昼過ぎくらいに家に集合な」

「オツケー」

「よし、決まりだね。楽しみだな」

そんな感じでスムーズに歓迎会の大きかな予定が決まった後はいつものようにどうでも良いことを駄弁りつつ弁当を平らげ、授業を聞き流しつつ放課後まで過ごし、いつものように葵と一緒に帰路に付いた。

？ ？

「つーわけで、日曜日葵と海翔が来るから」

帰ってからとりあえず今決まってる事をミクに話す。最初は嬉しそうに顔を綻ばせていたが、次第に何だか暗くなってきてしまった。

「その…良いんでしょうか、私なんかのためにそんなものを開いてもらっちゃって」

「お祝いつて言うより、ぶっちゃけバカ騒ぎしたいだけだろうから遠慮すんな。お前もそれに乗じて楽しめば良いんだよ」

「…分かりました、それじゃあお言葉に甘えさせていただきますね」「そうしとけそうしとけ」

「…あの、マスター。ありがとうございます」

「礼は当日企画した海翔に言ってやれ。あとついでに当然のように賛成した葵にも」

「ふふっ、分かりました。さて、それじゃあ私はご飯作りますね」

「え？いや、俺作るけど」

「いいんですよ、と言うかやらせてください。ささやかなお礼と言う事で、今日は私が何か作りますから」

…そう言われたら任せるしかない気がする。と言つか逆にわざわざ断る理由が見つからない。

そんなわけで俺は夕飯はミクに任せ、とつととシャワーを浴びる事にした。

ボーカロイドがどんどんただの家政婦っぽくなってるのがしなくてもないが…まあいつか。歌えるようになるまではこんな感じでたまに家事をしてもらうのも悪くないかもしれない。

第14話 歓迎会計画始動（後書き）

更新が少し遅れてしまい申しわけありません。言い訳をさせてもら
うと、現在風邪をひいてしまい書く元気があまりないんです。たい
した風邪じゃないんですが、あまり風邪というものをひいた事がな
いので良い感じに気力がそがれてしまっているわけです。

「バカは風邪をひかない」って言いますが、そういうわけでもない
んですかねえ…。いやいやポジティブに考えましょう、風邪をひい
たんだから、自分はバカじゃないってことです！w

…バカな事言っでないで、早く治すべく寝ることにします…；

第15話 歓迎会準備（ほぼ）完了（前書き）

お、遅くなってしまい申し訳ありません…；；；

風邪がなかなか完全に治らなくて、執筆する気になりませんでした；
；症状は全然大したことなかったんですが、体がだるくて何となく
書く気がしなかったんですね…

と言うわけで、ご迷惑おかけしました！個人的な理由でしばらく休
んでしまい申し訳ありません！今はもう全快したので、これから
もう少し早く更新していけるかな、と思いますwご心配していた
だいた方々（もしいれば、の話ですが；）、ご心配かけて申し訳あ
りませんでした、ありがとうございます！

第15話 歓迎会準備（ほぼ）完了

日曜日。時刻は10時半、歓迎会開始の2時間くらい前である。俺はとりあえず俺とミクの分の朝食を準備するためキッチンに30分前から立っていたのだが、どうもミクが部屋から降りてこない。昨日はアイツ妙に張り切っていて、「朝7時には起きてマスターが準備するの手伝います!」とか何とか言っていたのだが、10時半現在まったくそんな様子はない。

「…まあいつか、とりあえず準備進めちまおう」

そう呟いて俺は部屋の隅においてあったパーティーグッズが売っている店のロゴが入ったかなり大き目のビニール袋の中から「誕生日おめでとう!」と書いてある垂れ幕のつばい布を探り出す。「誕生日」部分をはさみで切り落とし、壁に画鋏でつける。次にでっかい箱に入ったヘリウムガスのタンク（一辺50センチくらい）を取り出し、一緒に入ってた風船にガスを入れて膨らましてく。口を結んで紐も取り付け、椅子にくくりつける。色は俺、葵、海翔の席には適当な色、ミクの席には緑と黒の風船をつける。何となくアイツのイメージカラーって言われるとその二色な気がしたからだ。ついでに女の子だからと言う理由でピンクの風船も後から付け足してみた。わざわざヘリウムガスのタンク買ってまで風船つける必要あったのかと思わなくも無いが、まあたいした値段でもなかったし雰囲気出るからまあ良いだろ、と言う事で購入してみたのだが、なかなか良い仕事をしてくれたと思う。風船が付いたただけなのに何となくめだたい雰囲気になったような気がする。

最後にツイスターみたいな七色の水玉模様をしたテーブルクロスを敷き、お揃いの紙コップと紙皿とナプキン、さらにその横に白いプラスチックのスプーンとフォークを並べて、ダイニングの準備は完

了。

となると残りは料理なのだが、こっちの準備はもう昨日のうちにほとんど終わってる。昨日寝る前に餃子を40〜50個ほど包んでおいたし、焼く前のグラタンも冷蔵庫に入ってる。あとはグラタンをオーブンで、餃子をフライパンで焼けば出来立てホヤホヤの美味しい料理が振舞えるという寸法ですよ。フツ、完璧だね。

「ーわけで、特にやる事もないまま時刻は11時。微妙に時間が残ってしまった。どうしたもんかね…。」

「…つと、そういえば」

ミクがまだ起きてない事に気付いた。いや、まあまだ寝てるのかどうかは知らないが、とりあえずまだ下に降りてきてないって事はまだ寝てるのではないだろうか。さすがにそろそろ起きないと身嗜みみだしなを整える暇もないだろうから、起こしたほうが良いよなあ…。

というわけで二階に上がる。一応部屋の前に立って2、3度ノックしてみたが返事がない。…やはり寝てるのだろうか、はたまたなか別の俺には考え付かない理由で返事ができないのかどっちなかだ。

…まあ間違いなく前者だろうけど。

「ミク、開けるぞ？」

一応一言だけ断って扉を開ける。…自分の部屋に断って入らなきゃいけないってのもなんか変な気分だな、今更ながら。ベッドの上を見ると…まあ案の定と言うか何と言うか、ピンクのパジャマを着たミクが寝ていた。

言っちゃ悪いが、彼女の寝相は悪い。実際に寝相が悪いところを目撃したわけではないが、時々起こしに来ると大体掛け布団がベッドからずり落ちてるし、パジャマもはだけていたりする。…目のやり場に困るからかなり「やめてほしい」と言うのが本音だったりする。

そんな彼女だが今日は比較的マシだった。…いやまあ相変わらず掛け布団はベッドから落ちていたが、パジャマはそれほどはだけていない。俺はホツと胸を撫で下ろしつつベッドの横まで移動して、ミクの肩を揺する。

「ミク、起きろって。もう１１時だぞ、あと１時間くらいで皆来るぞ、歓迎会始まるぞ」

「…ん…んう…」

しばらく声をかけつつ肩を揺すり続けると、ミクは身をよじりながら体を起こした。小さく伸びと欠伸をした後、半開きの目を擦る。起き上がる時に少しだけ左肩部分のパジャマがずり落ちたが、すぐに止まった。

> i 1 8 8 3 5 — 2 3 <

「…あ、マスター…」

「起きろ、もう１１時だ。そろそろ準備しないと間に合わねえぞ」
「…?…っ! 11時!？」

俺の言った事が理解できたのか、ミクはガバツと起き上がった。…が、

「はわあっ!！」

素っ頓狂な声を上げてまたベッドに背中側から倒れこんだ。…どうやら立ち上がった際に自分の長い髪の毛を踏んづけてしまったようだ。

「だ、大丈夫か…?」

「だ、大丈夫、です…。あ、だ、大丈夫だ、問題ない？」

「言い直す必要ないし疑問系で言うな。大丈夫ならとっと起きて準備して来い」

「そ、そうだ！って言うかどうしてもっと早く起こしてくれなかったんですかあ！？」

「いや、昨日あんな気合入ってたから起きてくるだろうなあって思っで、準備してるうちに忘れちゃった」

「忘れたんですか！？って事はやっぱりマスターが悪いじゃないですか！」

「そもそもお前が起きないのが悪い。何なんだよ、昨日ワクワクしすぎて寝れなかった、とか言うオチじゃないだろうな」

「にゃ、そ、そんなワケ無いじゃないですか！何を言ってるんですか！？」

「『にゃ』ってなんだ『にゃ』って」
「な、何でも良いじゃないですか！」

ミクはそういって、反応をみるに凶星かな。「にゃ」ってのはまあ多分「な」を噛んだんだろうなあ…。…にしても「にゃ」って。

「と、とにかく早く支度しなきゃ！」

「そうしろそうしろ。もう歓迎会の準備は出来てるから自分の支度に専念しろ」

「わ、分かりました、ありがとうございます！」

ミクはそう言うと慌しく部屋を出て行った。俺も一つため息を付いて、彼女の後を追って一階に降りた。

第15話 歓迎会準備（ほぼ）完了（後書き）

今回初の試みということでイラスト付けてみました。超絶ヘタクソな上に背景もほとんど無し、しかも色塗りも影とか無くって凄く適当ですが、何も無いよりは良いかな、と思いついて描いてみました。もしご要望があれば、みてみんなのほうに影つきをアップロードしたりするかもです。

第16話 歓迎会開始（前書き）

日本が今大変なことになっているのを何も出来ずに見ていることしか出来ないのが歯がゆくて、ほんの少しでも皆様に元気を与えられたらと願いを込めて書き上げました。震災の影響で皆様ご多忙だと思いますので、その中での気晴らしに、お暇なときに読んでもらえれば幸いです。

第16話 歓迎会開始

「こんにちは」

「カナ」…。早く開けて、料理が重いんだって…」

寝坊したミクが慌てて支度を済ませてから10分ほどして、葵と海翔が我が家の呼び鈴を鳴らした。二人を招き入れそれぞれから料理を受け取り、全員が俺が先ほど準備したパーティー会場に集まってから、二人がクラッカーを鳴らしつつ歓迎の言葉を口にした。

パパアンツ！

「ようこそミクちゃん！これからよろしく」！

「ミクちゃんお誕生日おめでと」！これからよろしくね」！

…どうやら今回のパーティーの趣旨をまったく理解してないバカがいるらしい。バカこと葵は、俺達3人の白い目を見ても頭に？マークを浮かべて首をかしげている。そうしてから自分が何かおかしいことを言ったという事に気付いたのか、居心地が悪そうに苦笑いを浮かべる。

「…えっと、あれ？今日のこれって誕生日パーティーじゃなかったっけ？」

「…葵は一体水曜日に何を聞いてたの？」

「…ちなみに言っておくと、私の誕生日は8月31日です」

再び重々苦しい沈黙がリビングを支配する。…何で楽しいはずの歓迎パーティーがいきなりこんなテンションで始まってんだよ。

「と、とにかく！何でも良いのよ、祝う気持ちがあれば！」！

「言い訳できないと踏んで強引に誤魔化そうとしてるね、全然成功してないけど」

「黙れその海翔!」

その慌てふためく葵を見て、俺は思わず吹き出してしまった。それを見たミクもつられて笑い出し、さらにそれを見て海翔も、さらにさらに葵も「もうなんでもいいや」とか何とか呟いてから盛大に笑い出した。

そんな感じで白けた様な妙な空気は消え去り、あつという間にいつもの面白おかしな空間が戻ってきた。こんなに簡単に変な空気を無くせるのは、まあそれなりに良いことなんじゃないかと思う。

「さて、それじゃあさつさと始めましょうか!」

「うん。じゃあカナ、音頭とつてよ」

「…何故俺が」

「ミクちゃんのマスターだからに決まってるじゃん」

「なんだか微妙に理由になってない様な気もするが…まあいいか」

…ここはある意味主催者のお前が音頭とつてもいいんじゃないのか、なんて反論しようとも思ったりしたのだが、そもそも俺やミクのために企画してくれた事を思い出して思い直した。

ため息を一つついてから横にいるミクの方を向く。それに気付いたミクもこちらに向き直る。

…いかん、何か気の利いた事を言おうと思ったのだがとっさには何も思いつかん。…まいつか。

「…ようこそ、俺んちへ」

一瞬キョトンとしたミクだったが、すぐに満面の笑みを浮かべ、

「…はい。お邪魔します、マスター」

なんともいまさら感が拭えない可笑しな挨拶だったが、何故だかしくくりくる気がした。

? ?

その後は…まあ正直特筆するようなことも無い。だってぶっちゃけ「歓迎会」ってのは三人集まって遊ぶための口実みたいなもんだっただし。もちろんミクを歓迎しようって意味もあるが、歓迎会って言っても何すりゃいいのかもよく分からんし、こういうのは開くってだけで意味があるもんなんだよ。たぶん。

「そうだ、あたしプレゼント持ってきたんだっただ」

「プレゼント?」

「うん、ミクちゃんに」

「え、私にですか?」

「あそつか、葵は今日が誕生日パーティーだと思ってたんだっけ」

「ゲ、ゲフンゲフンッ!と、とにかくはいこれ!」

半ば強引に葵がミクに綺麗にラッピングされた箱を渡す。…包装紙にでかでかと「HAPPY BIRTHDAY!!」って書いてあるのは…まあかわいそうだからスルーしてやるか。

「見事に『HAPPY BIRTHDAY!!』って書いてあるけどね」

「うっさいわ!はいはい私が悪かったです、ごめんなさいでしたー!これでいいかコノヤロー!」

「だ、大丈夫ですよ、すごく嬉しいですから!だから泣かないてください!」

…と思つたら海翔が許さなかつたらしい。あいつは言葉遣いとか見た目とかとは裏腹に結構DSなのかも知れない、最近気づいたんだけど。もしくは自分が提案した企画のことを完全に勘違いされて腹が立ったかのどつちかだろう。

「ま、実を言うと僕も一応プレゼント持ってきてただけだね。はい、どうぞ」

そう言つて海翔が取り出したのは、葵のでっかいのとは対照的な小さな紙袋だった。ピンク色の小さな紙袋で、ところどころに白いハートマークが書いてある。

「ふ、二人ともありがとうございます！開けてみてもいいですか？」

「もちろん、どうぞ」

「あんまり期待しないでね、大した物じゃないから」

そんな葵の言葉は聞こえていないのか、ミクは目をキラキラと輝かせながらまずは葵に貰つたプレゼントの包装紙を丁寧に剥がしていく。その中に入っていたのは、一着のワンピースだった。

「わぁ…！」

それを見たミクは感嘆の声を上げていた。俺はというと、ちょっとした違和感を感じていた。いや、違和感というよりは…既視感って言ったほうがしっくりくるかも。

「あれ？カナ、どうしたの？」

そんな俺のボーっとした様子に気づいた海翔が心配するように俺に

聞く。

「ん、いや…。あのワンピースどっかで見たとあるような気がするんだけど、どこで見たのかいまいち思い出せないんだよ」

俺の言葉を聞いて、「そういえば…」とミクもうなり始めた。どっかで…しかも結構最近見たことがある気が…。

「あっ！思い出した！」

「え、どこですか？」

「ほら、お前にこないだ見せてもらった『ワールドイズマイン』って曲のPVあつたる？あれの中でお前が着てたワンピースにそっくりなんだよ」

そう。葵がミクに渡したワンピースは、前に「私のことを勉強してもらいます」とか何とか言って半ば強制的にボーカロイド関連のものをいろいろ見させられた時に見たワールドイズマインのPVの中でミクが着てた服にそっくりだったんだ。

「あ、確かに。言われてみれば似てますね」

「気に入ってもらえたかしら？」

「はい、すごい素敵です！ありがとうございます！」

ミクは葵にお礼を言って丁寧にワンピースを畳むと、今度は海翔から渡された袋を手を取った。先ほども言ったように小さくピンクで白いハートが水玉模様のように散りばめられている感じの可愛らしい袋だ。ミクがさつきと同じように丁寧に袋をとじているテープをはがし、中身を取り出した。

「あっ…！」

「お、それは見覚えあるな」

プレゼントを見た瞬間またちよつとしたデジャブを感じたが、今度のはすぐにわかった。ミクの手の上に載っているのは「お花の髪飾り」、さっきのワンピースと同じく、こないだの勉強会（？）でミクが俺に聞かせた「メルト」の歌詞に出てきた物だった。

「うん、まあ『ミクちゃんにプレゼント』って考えたときに一番最初に出てきたのがこれだね。『歌詞から抜粋』、なんて安直だとは思うけど、一度思いついちゃったらこれ以外思いつかなくなっちゃって…」

「安直だなんてとんでもないです、私のことちゃんと知ってくれてるみたいですよっごくうれいす！どこかのだれかさんとは大違いですね」

そう言ってジトーっとした目でこっちをちらりと見るミク。…なんだよ、まだ根に持ってるのか。

「そう？それならよかった、喜んでもらえたみたいで何よりだよ」
「そうね、こんなに喜んでもらえるならプレゼントした方もうれいわ」

「はい、ありがとうございます！大事にします！マスターマスター！着替えてきていいですか？」

「後にしろ後に。今はお前の歓迎会なんだから、面白おかしく歓迎されてろ」

「うーん…そうですね、着るのはいつでもできますもんね。わかりました、今は歓迎されます。というわけでマスターの餃子もらい！」
「あつ！お前こっから盗むな！まだ山ほどあんだから皿から自分の分取って食べ！」

「知らないんですか？人から盗とった物ほど美味しく感じるんですよ

「？」

「ならないから！迷信だから！」

その後も歓迎会は賑やかに続き、日が落ちて辺りが暗くなるまで4人で騒ぎまくった。

・その夜。

「ミク、風呂あいたぞ」

リビングに下りて、そこでテレビを見ているはずの人物の名前を呼ぶ。…が、返事がない。

「ミク？…って、あいつ…」

ソファで横になって寝ているミクを発見。…ま、あんなだけはしゃげば疲れるわな。

ゆっくりと近づいて、鮮やかな緑色の髪をそつとなでる。くすぐったかったのか、触れた瞬間彼女が少しだけ身じろぎをした。

「…楽しかったか？」

返事を期待していったわけじゃない。だから…

「ええ、楽しかったですよ」

「んなつ！？」

返事が返ってきたときは、死ぬほどビツクリした。

「えへへ、おはようございます、マスター」

「お、おお、お前、起きてた、のか？」

「寝てましたよ？マスターが私の頭なでてくれるまでは」

そう言っつてミクは自分の右手でさっきまで俺の手があった所をそつと触る。…何故かわからんが妙に恥ずかしかった。多分、今俺の顔は結構赤くなつてゐるだろう。

「それじゃ、私はお風呂入ってきますね」

「あ、ああ。俺は先に寝てるから」

「わかりました、おやすみなさい、マスター」

静かに挨拶をして去つていくミクの後ろ姿から、俺は何故か目を離すことが出来なかった。

第16話 歓迎会開始（後書き）

さて、こんなに更新が遅れてしまった件ですが、少しだけ言い訳をさせてください……

実はつい先日こっち版大学受験テストのようなものがありまして、その勉強に専念していたので遅れてしまいました。本当は前回でもお知らせできればよかったのですが、すっかり失念してまして……

本当に申し訳ありませんでした！次からはペース上げていきたいと思えます！

第17話 ホワイトデー（前書き）

随分遅れてしまいましたが、ホワイトデーのお話です。忘れていたわけじゃないんですが、前回歓迎会の話を書かなきゃいけなかったんで遅れてしまいました、ごめんなさい<>

第17話 ホワイトデー

「…あ、そういえば」

「ん？カナ、どうかした？」

本日の日付、3月14日。つまり、ホワイトデー。その事実気づいた時に発した声に反応して、少し前を歩いていた葵がこっちを怪訝そうな顔をして振り向く。

…しまったな、何も用意してなかった。

「んや、なんでもない」

「そう？ならいいけど」

…いや、待てよ？咄嗟に「なんでもない」とか言っちゃったけど、よく考えたら俺こいつにもチヨコレートもらったか。

「葵、お前今日暇か？」

「え？ああ、まあ特に用はないかな。何で？」

「ん、ちよつとな。5時半過ぎくらいにうちに来てくれるか？」

「…なんでそんな中途半端な時間なの？」

「…企業秘密だ」

…まあ帰ってからホワイトデーのお返しを用意するとは言えないわな。

というわけで、その日の授業中は「どうやってミクを出かせせるか」と「何を渡せばいいか」を考えるためだけに使った。おかげで授業内容は1割も頭に入っていない。

そんなわけで時間は飛んで、あっという間に放課後に。葵と時間を確認をして別れ、やや急ぎ足で家に帰る。

玄関の前に立ち、ミクを外に出す口実を復習してから家に入る。

「ただいま」

「あ、マスター。おかえりなさい」

いつものように、ミクがパタパタと階段を降りて出迎えてくれる。ただし、今日は何故か私服、というかいつもの「制服」じゃなかった。ちなみに着てるのはこないだ葵にもらった白いワンピース。よく見ると海翔の髪飾りも付けてる。

「なあミク、お前今から外に…」

「マスター、ちょっと出かけてきたいのでお金貸してくれませんか？」

俺が早速授業中に思いついた口実その1を言おうとした矢先にミク自ら外出すると申し出た。…好都合っちゃ好都合だが、この俺の、その、なんともいえない感じをどうしてくれる。自分でも何言ってるかよく分からんが、何かとつもなく損した気分になるだろうがそれなりに悩んでいた俺の授業時間を返せ。…いや、やっぱり嘘です返さなくて良いです授業時間なんて。むしろ全部くれてやるわ。とにかく、自分の方から家を開けてくれるのはありがたい。俺は素直に彼女の要求に応じることにした。

「別に良いけど。何買いに行くんだ？」

「ふ、服ですよ。こ、この前開いていたいただいた歓迎会の時に葵さんがくれたお洋服が凄く素敵だったので、ちょっと服を色々見に行きたくなっただんです」

「ふ〜ん。分かった、ほれ」

ちよっと顔が赤かったり慌てたように早口だったのが気になったが、

今はとにかく早く作業が出来る環境が欲しかったので突っ込まずに3万円を渡してやる。多すぎるかとも思ったのだが、お金がなくなつて帰ってきてもらつては困るので念のため多めに渡しておいた。うちは両親がかなり稼いでいるので意外と余裕があったりするのだ。戸棚から予備の財布を見つけ出し、それもミクに渡してやる。

「はいよ、5時半ごろに帰つてくれるか？」

「5時半ですか？わかりました、努力します。もし遅れそうだったら連絡したほうが良いですか？」

「あ、そうだな。じゃあ携帯渡ししとくから。番号分かるか？」

「はい、ありがとうございます。それじゃあ行つてきますね。」

彼女はそう言つてたつた今受け取つたお金を財布にきちんとしまつて、歌でも歌いそうな勢いで家から飛び出した。：歌が歌える状態だったなら歌つていつてたんだらうなあ。

？
？

何はともあれ、これでようやく作業を開始できる。

まあ作業といつても、別に手の込んだことをするわけじゃない。そんな準備も無いし時間も無い。一応授業時間全部使つて色々考えたんだが、ほぼ全部時間が全然足りなかつたからボツになつてしまつた。というわけで、なんの捻りもなくいささかつまらない気がするが、無難にクッキーで。もう少し時間があれば少しは面白いことが出来たと思うんだが、いかんせん気付いたのが今朝なのでどうにもならない。そればかりは完全に俺が悪い、二人ともごめん。

二人に心の中で詫びつつ、パソコンでレシピを検索してその通りに材料を混ぜ、型で形を作りオーブンホワイトデーなのでハートマークに入れる。

「…ふう、これであとは時間になつたら取り出すだけか」

時計を見る。午後3時15分。

「…ギリギリだな」

クッキーなんて普段作らないから勝手が分からなくて悪戦苦闘してしまい、予想以上に時間が掛かってしまった。オーブンの温度を少しだけ上げて、タイマーの時間を短くする。失敗しないか少し不安だが、間に合わないよりはいい。

? ?

数分後、焼きあがったクッキーをオーブンから取り出して、冷めるのも待たないで袋に放り込む。昔お袋がまだ家にいた頃、俺にバレンタインチョコをくれる時に使ってた袋のあまりだ。リボンで口を閉めて、準備完了。時計を見ると、ちょうど5時半になったところだった。二人はまだ来ていない。…ギリギリセーフ。額の汗を手の甲でぬぐう。額の汗なんてないけど。

ピンポーン

…なんか狙い済ましたようなタイミングだな。俺が玄関を開くと、まあそこには予想通りの2人が立っていた。

「マスター、ただいま戻りました」

「やほ、さっきミクちゃんと会ったから一緒に来たよ」

「ん、お帰りミク、いらっさい葵」

いつまでも立ち話するのもなんかおかしい気がするので、とりあえず二人と一緒にリビングに移動する。時折二人がキョロキョロと何

かを探すように辺りを見回しているのが気になった。

「で、今日は何の用であたしを呼んだわけ？」

「今教えるよ。ミクもそこにいろ、すぐに戻ってくるから」

「わかりました」

二人を待たせてキッチンへ。そこに放置してあったクッキーの袋を持って二人の元へ戻ると、何故か二人とも立っただま待っていた。

「…座れば？何で立ってんだお前ら、揃いも揃って」

「いや、だってすぐ戻ってくるって言ったし、待ってるって言うから」

「同じくです」

「…まあいいや。とりあえず、二人とも」

…いかん、何かいざ渡すとなるとちょっと緊張する。ただ渡すだけなんだから大した事じゃないはずなんだが…。

「ほいこれ、バレンタインチョコ美味かった。サンキューな」

少し早口になるのを自覚しつつ一気にまくし立て、二人にビニール袋を差し出す。少し顔が赤いかもしれないが、どうにかなるわけでもないので諦める。

そしてクッキーを渡された二人はというと、差し出された物を受け取るでもなく拒絶するでもなく、揃ってポカーンとしていた。…なんか俺へんな事したのだろうか？しばらく固まっていた二人だが、やがて、

「あ、ありがと…」

「あ、ありがと…」

とそれぞれ礼を言い、俺の手からクッキーを受け取る。だからなんでそんな呆然としてるんだ？

「あ、開けても良いんですか？」

「別に良いけど……」

「そ、それじゃあ……」

ミクも葵も恐る恐るといった感じで袋を開く。そして中身がクッキーであることを確認すると、俺に食べても良いかと許可を求めてきた。…何故いちいち俺に許可を求める？

二人がクッキーを口に含む。すると二人揃って少しビックリしたような表情になったと思ったら、急にニヤニヤと笑い出した。さっきから意味が分からん、何だこいつら？

クッキーを飲み込んだ二人がジト…とした目で俺を見つめる。そして、

「カナ、このクッキーあたし達が来る前に慌てて作ったでしょ？」

「ぶっ!?!」

全てお見通し、見たいな口調で葵に凶星を突かれた。な、ななな何故ばれた!?!

「な、ななな何で…?」

「このクッキーまだあったかいです」

俺が疑問を全て口にする前に、ミクが答えた。…そういえば冷ましてなかった。俺は自分のうかつさに責めつつうなだれた。…でもさ、よくよく考えたら冷ます時間なんてなかったよね、焼きあがったらもう来たんだから。

「おかしいと思ったんだよね、ミクちゃんに聞いてもカナお返し何も用意してないって言ってたからってつきり忘れてるんだと思った」
「私もです、まさか帰ってきたら準備してあるなんて夢にも思ってもませんでした」

落胆する俺をよそに二人は勝手に話を進めている。俺にはいまいち二人が言ってる意味が分からなかった。

「…何の話だ、それ？」

「要するに、マスターがホワイトデーのことを忘れてるみたいだったから、今日何か貰えるなんて思ってなかったってことですよ」

「そう。で、今来てみたらあんたがちゃんと準備しててビックリしたけど、今日慌てて用意したんだってわかって面白かったって話」

…要するに何か、そもそも俺が何も準備してなかったのはバレバレだったってことですか？

呆然とする俺を無視して、女子二人組みはキャツキャツキャツとはしゃいでいる。取り残された俺は、「ホワイトデーのお返しは忘れてはいけない」ということを学習していた。

「あ、でもクッキーは普通においしいわよね、ミクちゃん？」

「はい、凄くおいしいです！マスター、ありがとうございます」

(…まあ、喜んでくれたなら良いか)

ため息をつきガツクリと肩を落としてはいたが、心の中ではそんなことを思っていた。

第17話 ホワイトデー（後書き）

さて、次回がどんな話になるかはまだ全然決まっております。これから考える予定です。

そこで、もしも「こんな話が読みたい」みたいリクエストがありましたら、感想やメッセージ等でお知らせください。ご希望に添えるかどうかはわかりませんが、精一杯頑張りますので是非どうぞ、別にネタが無くなってきてるわけじゃないんだからねっ！

第18話 ゲーセンパニック(前書き)

本当は今回は違う話にする予定だったんですが、挿絵を挿もつと思
い予定を変更して今回はお届けします。挿絵つきのはいつになるか
わかりませんが、もう少し待っていただければ幸いです^^

第18話 ゲーセンパニック

「ゲーセンに行きましょう!」

「…まずは『おかえりなさい』を言おうか」

「それもそうですね。マスター、お帰りなさいゲーセン行きましよう!」

「どれほど行きたいんだよ…」

学校から帰ってきたマスターにこんな仕打ちをするボーカロイドは世界広しと言えどもこいつだけなのでは? いやまあ他のボーカロイドを見たことがないから知らないけどさ。

「とりあえず何で急にゲーセン? 何かやりたいゲームでもあんのか?」

「私が出演してるアーケードゲームがあるんですよ!」

「…格ゲー?」

「何で!? 失礼にも程があるでしょ、今どついう連想したんですか!?」

「勘」

「なお悪いです!」

「…まあなんでもいいや、とにかくゲーセン連れてけば良いわけね? さて、んじゃそうと決まったらとつとと行くか」

「やった、マスター大好き!」

「だったら週末に行くとかさあ…。ま、いつか」

文句の一つや二つ言ってやるうかと思っただが、ピョンピョン飛び跳ねて喜んでいるミクを見たらそんな気も失せてしまった。…可愛いってのはこういつ時にずるいと思っ。

？
？

というわけで、最寄のゲーセンに来た。そういえばミクが来てからこいつの面倒見なきゃだったり色々忙しくて来たことなかったな。ま、だから何だって話だけど。

「ええと…どこにあるのかな…」

ミクが辺りをキョロキョロと見回している。最寄のとはいえそれなりに広いので、パツと見ただけではどこに何があるかはわかり辛いのだ。

「音ゲーならあっちの方に集中してるぞ」

「え！？」

俺がゲーセンの右奥を指差して教えてやると、ミクは驚愕したような表情で俺のほうを見た。…あれ、そんな驚かれることか？

「…何そんなに驚いてんだよ？」

考えてもわからなかったので素直に聞いてみる。

「え、あ、ああ、ごめんなさい。ただ、何で私が探してるのが音ゲーだってわかったのかなって…」

「いや、なんでも何も、ボーカロイドのゲームなんて音ゲーくらいしかないだろ。逆に音ゲーじゃなかったら何なんだよ」

「…じゃあさつき『格ゲー？』とか言ってたのは…」

「…お前あれ真に受けてたのか？冗談に決まってるだろ」

歌歌つためのアンドロイドが格ゲーに出てると思うバカはいくらな

んでもいるわけなかるうに。というか俺がそんなバカに見られたと
いうことが極めて心外だ。お前俺のことどんな目で見てるわけ？

「…あ、あつた！」

俺は俺で適当に新しいのが入ってないか見ていると、店内を散策し
ていたミクが不意に歓喜の声を上げた。振り向いてミクが見ている
筐体に目をやる。そこには「初音ミク Project DIVA
Arcade」と書いてあり、でかかかと3Dのミクが印刷され
ていた。

「へへ、これが。なあ、DIVAってどんな意味だっけ？」

「花形女性歌手、プリマドンナ、歌姫とかそんな感じですよ。私は歌
姫が一番好きですけどね」

「ふん。じゃ、早速やってみるか？」

「はい！」

ミクが元気よく返事をして筐体の前に立つ。100円玉を渡してや
る。

「ありがとうございます。では、いざ！」

少し勇ましい声を上げてコインを投入。曲を選んで難易度を…つて。

「いきなりエクストリームですか」

「まあ難易度自体は高くないですよ。一つや二つ理不尽に難しい
のがあったりしますが、基本的にそれなりにできる人はこれくら
いでちょうどいいんですよ」

…なぜこの娘さんはこのゲームをやったこともないのに「それなり

にできる」と断言しているのでしょうか？って言うか今難易度9くらいあった気がするんですが…？

そんな俺の心配をよそに、ミクがうきうきとした表情でロードを待っている。そして、開始。

「…お」

なるほど、自信満々だったただけあって出だしはかなりいい感じだ。結構速い曲だけどまあそこまで難しくないかな？

…あれ、でもこの曲って確か…。

ふとそんな、なんと言うか、いやな予感みたいなのが頭をよぎった瞬間、ミクが悲鳴を上げた。画面を見ると、大量の丸が落ちてきているところだった。どうやら連打をする場面らしいのだが、ミクの手はぜんぜん追いついていない。

「あ、ちょ、た、タイムタイム！」

「アーケードにタイムがあるか」、と突っ込む暇もなく一気にゲージがなくなり、曲が強制終了される。

「…そういえばこの曲って途中からめっちゃ早くなるんだよね…」

画面を見つめて呆然としているミクの頭をポンポンと撫でてやりつつ、画面に表示されている曲名を見つめる。そこには、

「初音ミクの消失」

と、まあ曲を知っていれば相当な難易度なのだろうことは容易に伺える曲名が書いてあった。最初からこの曲を選ぶとは、なかなか命知らずなやつである。

「…はあ、残念。行けると思ったんですけどね…」

「あの連打は初見じゃきついな…。でも一回見たらできるだろ」

「いやいやいや、一回見ただけでできるわけないじゃないですか。少なくとも20回くらい練習しないと…」

「とりあえず俺にもやらして、見てたらやりたくなってきた」

「あ、はい、どうぞ」

ミクが筐体の前からどいて、俺に譲る。俺はさっきのミクと同じように筐体の前に立ち、同じ曲、同じ難易度を選択する。

「ちょ、マスターさっき何も見てなかったんですか？いきなりそれはあんまりお勧めしませんけど…」

「まあ見てなって。一発クリアしてやる」

「ふふん」と不適に笑って視線を筐体に戻す。ちょうどロードが終わったところだったので、プレイ開始。

出だしは極めて順調。落ち着いて対応するボタンを曲に合わせて押していく。さっきミクがあえなく撃沈したところまではノーミスで到達。

そこからは、集中して焦らず、音楽に合わせてボタンを連打していく。画面に表示されているコンボ数が見る見る上昇していく。

横で「嘘っ!？」と驚愕の声を上げていくミクもとりあえず今は無視し、最後まで気を抜かずにプレイを続ける。そして、最後まで華麗に決めて曲が終了した。結果は…

「うっし、パーフェクツ！」

「…なんで複数形？」

「いやまあなんとなく」

「そうですか…じゃなくて！納得いきません！」

急にミクが妙な気迫をまとって詰め寄ってくる。…まあこつなるかなあ、とは思ってたからあんま驚きはしないけど。

「何で！？何でそんな軽くこなしちゃうんですか!？」

「軽くねえよ、結構集中したから疲れた」

「それだとしてもほぼ初見でパーフェクトはないでしょ、謝ってください！」

「…誰に？」

「私に！」

「意味がわからないが、とりあえずごめん」

素直に謝ると、少し冷静になったのかミクが俺から離れる。しかし、まだ睨まれている。

「納得いきません、説明してください」

「説明も何も…。ちよつと自慢っぽくなるけど、俺色々楽器やってるし親も音楽家だからリズム感はそれなりにあるんだよ。音ゲーも結構やってるから慣れてるっていうかさ」

どつちも事実だと思う。誰に言われたわけでもないけどリズム感はいいほうだと思うし、ゲーセンに来れば最低一回は音ゲーやってるし。

「…」

「どつする？まだやるか？」

「…当然ですよ、パーフェクト取るまでやり続けます」

「…それは勘弁してほしいところなのですが」

結局その日はゲーセンで3000円ほど消費することになってしまった。最終的にパーフェクトが取れたミクはご機嫌だったが、取るまでずっと機嫌が悪かったミクを宥めるのは骨が折れた。案外こいつは負けず嫌いなのかもしれぬ。

今度からは、あっさりクリアしないよう気をつけるとしよう。

第18話 ゲーセンパニック（後書き）

書き終わってから、DIVAをやってるミクって相当シユールなんじゃないだろうかと思いました。どんな気持ちでやってたんでしょう？格ゲーで声優さんが自分が演じたキャラクターを使っているときの心情と似てるんでしょうかね？

第19話 April Fools! (前書き)

遅くなりました、更新的にもイベント的にも。申し訳ありません……
代わりにとっては何ですが、今回少し長めです。お楽しみください
い

第19話 April Fools!

ピロリンッ

「うん…ん…?」

休日の朝、ダラダラとベッドの上で過ごしていた俺を妨害したのは携帯の着信音だった。

正直、「面倒だから後で確認すれば良いや」と思ったりもしたが、幸か不幸か携帯は枕の真横においてあった。俺は観念して少し顔を起こし、携帯を手に取りメールを確認した。

「…葵か、こんな朝っぱらから何だよ…?」

言った直後に脳内で「もう10時過ぎですけどね」と誰かのツッコミが聞こえた気がしたが無視。とりあえずメールを開いて、内容を読んしてみた。

『たすけて』

思考が止まった。全身に嫌な汗が流れる。

なんだか凄くいやな予感がして、慌てて電話をかける。

異様に長いように感じた、実際には3度ほどしか鳴ってないであろうコールの後、電話が繋がった。

『…う、カ、ナ…?』

「葵!?おい、どうした!葵!」

『…』

「おい、葵!返事しろって!」

『…プツ!』

「葵!？」

『あっははははは! やった大成功!』

「…は？」

…絶句してしまった。

いや、だって考えてもみる？ 幼馴染から深刻そうなメールが来て心配してメールしたら爆笑されたらどうするよ？ どんなりアクションしろと？

「…おい」

『あはは、ごめんごめん! でも面白かったよ、カクナ』

「カクナ」 『じゃねえよ! 笑えない冗談言いやがって! 何だっただよ!？』

『あれ、わかんない?』

「わかるわけあるか!」

『あゝ、さては今起きたわね。まったく、いくら休日だとは言え起きるの遅すぎない?』

「俺の質問に答えろって!」

『じゃあヒント。今日の日付を考えて見なさい、じゃあね』

「あ、ちよ、待て! …切りやがった」

なんだっただんだ? 何の嫌がらせでこんな手の込んだ嫌がらせを? 今日の日付って…。

「4月1日…あ」

…なるほどね、エイプリルフルか。…それにしても、夕子の悪い嘘だな。

「笑えないな、つたく…」

目も完全に覚めてしまったので、二度寝も諦めて素直に起きる。ここ最近でもダントツで気分の悪い朝だった。

？ ？

「あ、マスター。おはようございます…って、どうしたんですか？ 酷い顔してますよ？」

「んや、ちよつとな。おはよう。何か食ったか？」

「いいえ、マスターが起きてくれないから何も」

ミクが少し拗ねたように口を尖らせて言う。少し申し訳ないことをしたと思いつつ、会話を続ける。

「自分で作ればいいじゃんか、お前料理だって出来るんだろ？」

「そりゃ出来ますけど、マスターの許可なしに勝手に冷蔵庫の食材使うわけにもいかないじゃないですか」

「使えばいいじゃんか」

「そういうわけにもいかないですよ」

「めんどくさ…じゃあ良いよ、次から俺が起きなかつたら勝手に何でも使え」

「わかりました、じゃあ次からは勝手に色々作りますね」

「そうしてくれ」

とりあえずこの話題はひと段落した。そう判断してコップを水に入れて飲む。

「そついえばマスター」

と思つたらミクがさらに別の話題に入ろうと声を掛けてくる。俺は水を飲んだまま「ん？」と返事をする。

「私のえっちい格好つて興味あります？」

「ぶふっ」

思いつきり吹いた。

「ゲホツ、ゴホツ！！」

「だ、大丈夫ですかマスター！？」

「だ、誰のせいだ！」

「だ、誰のせいって…私のせいですか！？」

「何驚いてんだ！当たり前だろ！？」

「そんな…理不尽です！」

「理不尽か！？って言うかなんだよえっちい格好つて！？」

「そんなに慌てなくても…ま、マスターどんなの想像してるんですか？」

「ど、どんなのって…こ、こう、エロい感じ？」

「…全然伝わってこない上になんかイヤです」

ダメ出しされた。しょ、しょうがないじゃん、そんなの考えたこともないんだからさ…。

「つていうか、な、何でそんな話に？」

「いえ、マスターにもし興味があるならそういう格好をしても良いかな、と思ひまして」

「な、何で急に？」

「理由ですか？こないだマスターのニコニコのマイリスト見たときに、私のちよつとえっちい格好のイラスト付きの動画が多いような気がしたので、もしかしてそういうのが好みなのかなあと…」

「いや、別にそういうのを選んでたわけじゃなくて単純に曲を聞いて入れてただけだ…」

「マスターがそういうの好きなら私は来ても良いですよ？嘘ですけど」

「いや、あの…って嘘かよ!？」

「ホントにして欲しいならしないこともないですけど、今それを望んではいないでしょう?」

「あ、当たり前だろ!？」

「…焦る辺り少し怪しいですけど、まあ良いです。とにかく、私の勝ちですね」

「…勝ちって何だよ?」

「え、だって今日はエイプリルフルじゃないですか。先に相手を騙したほうが勝ちなんですよね?」

「…」

何か色々間違ってる気がしたが、寝起きから夕子の悪い嘘を二連続で喰らった俺にはそこまで突っ込む余裕はなかった。俺は一つため息を突いて、机に突っ伏した。そんな俺をミクが首を傾^{かし}げて見ている。

? ?

昼過ぎ頃、ポケットに突っ込んであった携帯電話が着信音と共に振動する。取り出して表示を見ると、電話を掛けてきたのは海翔だった。

「…もしもし?」

『あ、カナ?おはよう、って言うのは時間的に正しくないね。こんにちは、かな?』

「ん、こんにちは。で、どうした?」

『うん、ボクの秘密を伝えようと思って』
「…何だよ？」

もう騙されんよ。流石にあんなことが二回あった後だからな、警戒もするさ。これは嘘のパターンだ。

『実はボクね…女の子なんだ』

「…は？」

『それで、もう随分前から、会った時からカナのことが好きで…だからお願いだよカナ、ボクと付き合って！』

「嘘をつけええええ！！！」

いくら俺でも流石にそれは嘘だとわかるわ！って言うかなんだその嘘、バカしか騙されねえよ！って事はそれは何か、俺はバカだからこんな嘘でも騙されるだろ、とかそういうことかこの野郎！？

『あはは、流石にばれちゃうか』

「お前どれほど俺を甘く見てるんだよ…」

『ごめんごめん、ボク嘘つくの苦手だからさ、こんなのみか思いつかなかったんだよ』

「…まあいいや。で、用はそれだけか？」

『ううん、用はもう一つあるよ。ジャンプは今週だけ土曜発売だから忘れないようにね』

「あれ、そうだった？わかった、サンキュ」

『どう致しまして、じゃあまた学校でね』

「おう、んじやな」

携帯の電源を切り、ミクに出かけると声を掛けてから家を出る。自転車で乗って最寄の本屋まで走る。そして途中で、気付く。

「…って、ジャンプ今週も買ったじゃん！」

やられた！海翔の野郎、何が「ボク嘘つきの苦手」だよ、超狡猾じやねえか！最初にバレバレの嘘ついて警戒心を薄れさせてから本命のちよつとホントっぽい嘘で騙すとは…策士だ、あいつ策士だ！そんなわけですっかり意気消沈して家に戻る。ただいまも言わずに家上がり、フラフラと自室に向かってドアを開ける。

「え？」

「…え？」

部屋の中に、半裸の、ミクがいた。

「な、な、なな…！？」

「え、な…なっ！？」

俺もミクも、互いに固まってしまった。あまりにも予想外だったせいで、頭が全然働かない。

「き、きゃあああああ…！」

ミクの悲鳴で我に戻った。ハッとして、

「う、ごめんっ…！」

と謝って勢い良くドアを閉める。

…なんだっただ今なの、って言うか何であいつこんな時間に着替えてんだ！？今1時半だぞ、着替える理由皆無じゃん！意味わかんねえよ！

って、そんな言い訳してる場合じゃなくて、とにかくただいまも言

わずかに帰ってきたりノックもせずにはドアを開けたりとこつちに非が多い。ここは素直に謝らなきゃ。…許してくれるかはわからんけど。

「み、ミク？その、ご、ゴメン。ちょっと、上の空で、ボーっとしてた」

ドア越しに謝る、が、返事がない。…やっぱり怒った、よな。そう思っただけでガツカリしていると、

「だ、大丈夫、です。マスターになら、その別に…」

やっぱりドア越しにだけど、中からミクの声が聞こえた。…良かった、とりあえずそこまで怒ってないみたいだ…って、ん？何か気になるキーワードが…。

「…ま、『マスターになら』、って…」

「え！？あ、いえ、その…こ、言葉のアヤです！て、言うか、やっぱりえっちなんですね、マスターって！」

「な！？ち、違うぞ！こ、これはその、事故であって、意図して見ようとしたわけではなくて、あぁいや別に見たくなかったとか言うわけじゃなくて、むしろ見れて嬉しいというかなんというか、というか何を言ってるんだ俺！？」

ああ、なんか何言ってるかわからなくなってきた、って言うか俺なんかどさくさにまぎれてとんでもない事言っていないか！？

そんな感じで俺がテンパっていると、中から「クスクスッ」と笑い声が聞こえた気がした。

「み、ミク？」

不意に目の前のドアが開いて、ミクが微笑を浮かべて立っていた。もちろん、服はちゃんと着ている。

「冗談ですよ。別に怒ってませんし、仮にマスターがそういうの好きでも嫌いになったりしませんから。心配しないでください」

そういつて、彼女は優しい笑顔を俺に向けてくれた。それで俺にも少し余裕が生まれ、少し反論してみる。

「そ、そもそもお前は何でこんな中途半端な時間に着替えてたんだよ？」

「うえ！？そ、それは、その…そ、そんなことより、目的のものは買えたんですか！？」

誤魔化された、というのは流石に気付いたが、全面的にこっちが悪いので強く反論するわけにも行かない。おとなしく誤魔化されるしかなかった。

「いや、買えなかった。というかそもそも騙されてた」

「…マスターいくらなんでも騙されすぎじゃないですか？」

「…素直なんだよ」

「いや自分で言わないでください」

そんなわけで、全然良いことがなかったエイプリルフルでしたとさ。

…ああ、まあ最終的には思わぬ嬉し恥ずかしなハプニングはあったけど。

第19話 April Fools! (後書き)

次回かその次辺りでリクエストして頂いたエピソードでも書こうかと思つてます。更新できるのがいつになるかはちょっとわからないですが、気長に待つていただければ幸いです。

それから先日、この作品のPVアクセス数が一万を突破しました！読者の皆様、ありがとうございます！これからもどうぞよろしくお願ひします！

第20話 お弁当パニック！（前書き）

今回の話にはよほづさんからリクエストしていただきました。に
よほづさん、ありがとうございます！

第20話 お弁当パニック！

「マスター、早くしないと遅刻しますよ！」
「わかってるよ、急いでるだろ!？」

上の会話を見ただけで何が起こっているか理解してもらえらと思う。
うん、ごめんなさい寝坊しました。

「教科書とかちゃんと入れました!？」

「大丈夫!昨日ちゃんとやっとないた!」

「朝ごはんは!？」

「食べてる時間無い!いつてきます!」

着替えを終えて、靴も適当に履いて家を飛び出す。途中転びかけたが、何とか体勢を立て直して走り続ける。

時計を見る。…よし、まだ大丈夫。歩ける余裕はないが、全力疾走しなきゃ間に合わない時間じゃない。

俺は多少安堵して走る速度を緩める。そしてジョギング程度のスピードで走り続けること10分、3分ほど余裕を残して学校に到着。クラスメイトに多少からかわれつつ席に着き、

「…あ」

そこで気付いた。

「…カナ、どうしたの?何か凄い声出たよ?」

「…弁当忘れた…」

脱力して机に突っ伏す。隣の海翔が同情するような笑顔を向けてい

る。

「ボクのお弁当でよければ半分あげるからさ、元気出しながら」

「…ん、悪いな。サンキュ、海翔」

「どうぞ致しまして」

やっぱりこいつはいい奴だ。エイプリルフルで酷い目に合わされたけど、なんだかんだでやっぱりいい奴だ。

はあ、朝からいい事ねえ…。まあ結果オーライか、忘れてきた弁当はミクが適当に食うだろ。

？ ？

「…」

どうも皆さん初めまして、ボーカロイドの初音ミクです。

別に全然初めましてじゃないんですが、初めて私視点なのでまあ気分的に言ってみました。

さて、それはさておき、現在私はある一つの問題に直面しています。現況は、今私の目の前にある箱。

マスターがお弁当箱を忘れて行っちゃいました。

「…ん…」

どうしましょう？これは届けるべきでしょうか？それとも今日は学食が何かで済ませてもらうことにして、このお弁当は食べるか冷蔵庫にしまっておくかしておくべきでしょうか？

「…よし」

やっぱりここは届けるべきでしょう。このまま家にいたって面白くないし、マスターが通ってる学校に行く正当な理由が出来たわけですから、これを有効活用しない手はありませんよね！
というわけで、早速ゴー！…と思ったんですが。

「…そういえば私マスターの学校の名前も場所も知らないじゃん」
肝心なことに気付き、いきなり出鼻をくじかれて撃沈。…まだ始まつてすらいらないのに。

「…いや、こんなところで諦めちゃダメ！」

項垂れていた自分に活を入れて再び気合を入れなおす。とりあえず二階に上がってマスターのパソコンを起動し、インターネットでこの家周辺の地図を出す。マスターは自転車通学でも電車通学でもないはずなので、この辺りにある学校に通ってるはず。だからこの家の一番近くにある学校にマスターが通ってる可能性は十分にある、という結論に至って、今こうして地図を開いているわけです。

「…ここかな？」

地図上で家に一番近い高校の場所を覚えて、制服から私服に着替える。私は別に制服のままでも良いんですが、マスターが「外に出るときはなるべく買った服を着て欲しい」と言っていたので素直に着替えます。マスターの言うことには従わなきゃいけないですね。というわけで素早く身だしなみを整え、今度こそゴー！私は家を飛び出して、さっき見た地図を思い出しつつ道を歩いていく。

？
？

「い、いない!？」

到着した学校の職員室を訪ねてマスターの教室を教えてもらおうとした私でしたが、返ってきた答えを聞いて悲鳴に近い声を上げてしまいました。

「ええ、この学校には『千歳奏』って生徒はいないわね。ホントにこの学校にいるの?」

私の対応をしてくれた女性の先生が視線をパソコンのモニターから私に移し、尋ねてくる。

「い、いえ、実はどの学校に行ってるか知らないんです。で、家から一番近いこの学校にいるんじゃないかな、と思って…」
「なるほど、じゃあ…」

そう言っ先生は再びパソコンに向き合い、地図を開いて私に見せてくれた。そこには別の高校の場所とルートが記してあった。

「その学校に行ってみなさい。この近くにある学校はことそこだけだから、ここにいないならそこにいるはずよ」

「ほ、ホントですか!？ありがとうございます!」

「どう致しまして、じゃあ気をつけてね」

「はい、ありがとうございます!」

私は先生に深々と礼をして、職員室を出た。そのやり取りが私が学校に通ってるみたいで、少し楽しくて笑ってしまったのは内緒です。

?
?

そんなわけで、今度はさっきの学校で教えてもらった学校の職員室でマスターがいるかどうかをたずねてみました。

「ああ、千歳ならあたしのクラスにいるよ。2年D組」

「ホントですか!？」

「ホント。そつか、あいつ今日何か妙に元気がなかったからどうしたのかと思ったけど、そんなしょうもない理由だったんだ。届けるなら今行ってきた良いよ、今自習中だから」

「わかりました、ありがとうございます!」

私はさっきと同じように深々と礼をして職員室を小走りで飛び出した。「廊下は走らないようにね」と出る直前に注意されたので、慌ててスピードを緩めて歩き出す。マスターは確か2年生だったから、多分教室は2階にあるはずだと判断して階段を上がり、先ほど先生に教えてもらった2年D組の教室を探す。

「…あつた、ここだ!」

2年D組と書かれた看板を見つけてその教室の前に立ち、勢い良くドアを開けた。

「マスター、お届け物ですよ」

? ?

「マスター、お届け物ですよ」

まじめに自習している生徒など3人いるかいないかといった状況の教室のドアが急に勢いよく開いたかと思うと、そんな明るい声が教

室中に響いた。

全員ドアのほうを見て呆然としている。俺も同じように呆然とドアを開けた人物を見ることしか出来なかった。そこにいたのは…

「…ミク、お前なんでここに？」

「だから、忘れ物を届けに来たんですってば」

さも当然のように答えるミク。その声は間違いなく、いつも家で聞いている彼女の声だった。

教室中がポカンとしているに気付いているのかいないのかはわからんが、ミクは教室を横切り一直線に俺の前までやってくる。そしてその手に持った風呂敷を静かに机の上に置いた。

「はい、どうぞ」

「…あ、ああ。ありが…」

「どう致しまして、へへ、ここがマスターの教室ですか…」

ミクが珍しいものを見るように教室を見回しながら歩いている。時折足を止めて何かを観察したり撫でたりしている。それを数分間続けた後、

「じゃあマスター、私はもう帰りますね。勉強頑張ってください」

妙に高いテンションのまま、教室を出て行った。

教室内が沈黙する。と思っただら次の瞬間、

『何だったんだ今の！？』『何だったの今の！？』

俺、葵、海翔の三人を除いたクラス全員が揃って叫んだ。そしてそのままの勢いで俺に詰め寄ってくる。

「千歳、今の何だ！？いや、何かはわかってるけどどういうことだ！？」

「千歳君、今の凄く可愛い子誰！？彼女なの！？しかも『マスター』って…！？」

「何でボーカロイドがお弁当届けてくれるんだよ！？」

「もしかして一緒に住んでるの！？不潔だわ！」

「なにぃ！？なんて羨ま…けしからん！」

クラス全員の耐えることのない質問攻めに戸惑いつつも、俺は何とか事情を説明した。それによって皆事情は理解してくれたようだが、なぜか納得はしてくれなかった。何でも、

「あんな可愛い子と同棲なんて羨ましすぎる」

とか、

「歌うためのロボットにあんなことまでさせるのはどうなの？」

とか。…別に俺が頼んだわけじゃなくてあいつが自主的にやってくれたことなんだが。あと『同棲』とか言うな！何か生々しくてイヤだわ！

？
？

さて、そんな出来事の翌日。

「おはよ」

俺は教室に入ってからクラスに挨拶する。するとクラス全員が俺の

ほづを見て、

『おはよう、ロボコン』

と声を揃えて言ってきた。…なんだこの一体感、というか「ロボコン」ってなんだ？

「おはよう、カナ」

とそんなことを疑問に思っていると、いつものように海翔が声を掛けてきた。

「おう、おはよ。なあ、クラスが俺のことを『ロボコン』と呼ぶんだが何か知らないか？」

俺がそう聞くと、海翔は苦笑いを浮かべた。その隣の葵が海翔を代弁するかのように、俺の疑問に答えてくれた。

「『ロボット・コンプレックス』」

「…は？」

思わず聞き返してしまった。葵は少し意地の悪い笑みを浮かべて繰り返す。

「『ロボット・コンプレックス』」

「…」

「つまり、ロリコンのロボットバージョンね」

「…そんなんいやじゃあああああー！」

俺の絶叫が、朝の教室を木霊こだました。

第20話 お弁当パニック！（後書き）

ホントは今回は2500字くらいになると予想していたんですが、大幅に上回って3500字以上いってしまいました。嬉しい誤算、ということにしておきましょう。

次回は挿絵がつくかもしれない。もしかしたら少し遅れてしまうかもしれませんが、ご了承いただければ幸いです；

第21話 妹？（前書き）

お待たせしました、挿絵つきです。ちょっと話のほろが適當になつてしまった感が…。まあ挿絵を載せるために書いた話ということでは勘弁していただければ！（え

第21話 妹？

「ただいま」

「おかえりなさい」

帰って挨拶をすると、二階の方からミクの声が聞こえてきた。何をやってるのかは知らないが、どうやら二階にいるらしい。

今日は学校が終わってから特に何をするでもなく家に帰った。葵や海翔とかと適当に駄弁りながらどっかで遊んでつても良かったのだが、なんとなく今日はそんな気も起きずにそのまま帰ってきてしまった。

「さ〜と、何しようかね…。家にある本は全部読んじまったし…特にやりたいゲームも無いし…」

…むう、困ったぞ。やることがない。何か適当に楽器でも弾こうかとも思ったが、なんとなく今はやる気しない。ん〜…ニコニコ行って新しい曲でも探すかね。

なんとなく方針が決まったところで二階へ。自室の前に立ち、「コンコンツ」と二回ほど軽くノックをする。「どうぞ」と声が返ってくるのを確認してから部屋に入ると、ベッドに寝そべって漫画を読んでいるミクがいた。

…あのエイプリルフールの事件後、俺とミクは互いに「部屋に入るときは必ずノックをする」という約束をした。俺は正直自室に入るのにノックをしなきゃいけないというのは納得いかなかったが、あんな事件を起こしてしまった後だったので強く言うことができず、結局やや強引に約束をさせられた。

「マスター、お帰りなさい」

「ん、ただいま」

二度目の挨拶を済ませ、パソコンの前へ。モニターの電源をいれ、ニコニコ動画を開く。すると、こちらを見ていたミクが少し意外そうにこつちを見た。

「珍しいですね、マスターがニコニコ見てるなんて」

「今日は何かやることなくて暇だからな。たまには新しい曲を聴いて回るのも良いかと思って」

「ああ、そういえばエイプリルフル盛りから全然パソコンに触ってませんでしたよね」

「そういうことだ」
「なるほど」

そう一言だけ返事をして、ミクは再び漫画に目を落とした。俺は俺でパパツと「VOCALOID」のセクションに移動し、新曲探しを始めた。

「あ、そうだマスター」

探し始めてから数分後、何かを思い出したようにミクが俺のことを呼んだ。

「ん？」

「…えっちいのは程々にしてくださいね」

…そういえば前にそんなことを仰ってましたね。とは言われたものの…

「あのさ、俺別にそんなんで選んでないぞ？」

「別にそうは言ってませんよ」

「そう言ってるようなもんじゃん…」と心の中で呟きつつため息をつく。何か睨まれてるような気もするけど、無視して新曲探しを再開する。しばらくそれを続けていると、

「…そんなに」

「んあ？何か言ったか？」

「…そんなに…見たい、ですか？」

「…な、何を？」

「…」

「…」

…な、何この空気？いや、いくら俺でもミクが何を言ってるのかわかってる。けど、何で急にそんな？

「…」

重苦しい沈黙の中、嘆息と共にミクはベッドから体を起こし部屋を出て行った。

「…しまった、何か怒らせちゃったみたいだ」

慌てて俺も立ち上がり後を追おうとしたが、携帯の着信音を聞いて動きを止めた。

「何でこのタイミングで…」と舌打ちをしつつ多少のイライラを抱えディスプレイに表示された名前を見た瞬間、一瞬でイライラも何も吹き飛んだ。

「…親父」

普段俺の両親は多忙で電話なんてしてこない。してくるときといえ
ば何か緊急の時、もしくは重要な知らせがある時だけだった。だか
ら、俺は慌てて通話ボタンを押し電話を耳に当てた。

「親父、どうした？」

『久しぶりだな、奏。元気にやってるか？』

「まあ、それなりに。それでどうした、電話かけてくるなんて珍
しいじゃねえか」

『なあに、たいしたことじゃない。ちょっとしたサプライズだ』

「サプライズ？」

『驚け奏、お前に妹が出来るぞ！』

「…」

…は？

「…親父、あんたもお袋ももう若くないんだからさあ…」

『違うわ！何か誤解してないかお前！？』

いや、だって急に「お前に妹が出来る」とか言われたら普通…なあ？

『養子だ養子。俺たちのオーケストラのメンバー夫妻が交通事故に
あって亡くなっちゃってな、娘が一人だけ残されちゃったんだ。だ
から、家で引き取ることにした』

「…随分軽く言いやがる」

『軽くないっての、美弦と一晩中話し合っただめたんだ。適当なこ
とやうなバカタレ』

「悪かった、謝るよ。それで？」

『うちで引き取る。でも世界を連れて回るわけにもいかん？だ
から今度一度日本に帰る。その時に一緒に連れてくから、一緒に面

倒見てやってくれ』

「…急な話だな」

『そんなことわかってる。ま、素直に喜んでけ。妹が出来るのは嬉しいだろ?』

「別に妹とかは関係ないが…まあ家族が増えるのは大歓迎だ」

『サンキュ。じゃあそろそろ切るぞ、忙しいんだ』

「ん、頑張れよ」

『おうよ、んじゃあな』

ブツツ、とノイズのような音がしてから電話が切れる。色々と考えなきゃいけないことが出来たが、とにかく今はミクだ。慌ててドアを開けて一階に降りる。そしてキッチンを覗き込み、一番最初に目に飛び込んできたのは…。

> i 2 1 9 9 4 — 2 1 8 6 <

何か…どっかで見たとある格好で、頬を染めて、セクシーポーズらしきものをしているミクだった。

「…」

俺は…なんていうか、まさに「開いた口がふさがらない」って感じだった。この光景は…ちょっと予想外すぎた。

「ど…どうですか、マスター?」

「…ど、どう、って?」

「み、見覚えがない、ですか?マスターのマイリストに入ってた曲の服に、似せてみたんですけど…」

「そ、それはわかった。でも、な、なんで…?」

「…マスター、あのPV繰り返し見てたから、こっというのが好きな

のかと思って」

…確かに見てたけど。繰り返し見てたけど。しょうがないじゃん、可愛いと思ったんだから…。

「え、えと…あ、ありがとう?」

どう反応していいのかわからず、とりあえずお礼を言ってしまった。ミクはクスリと笑って「どういたしまして」と返してくれた。

く後日談(?)く

「そっいえばミク、あんな服いつの間に用意したんだ?」

「え? ああ、ホワイトデーの時服買いに行ったじゃないですか。あの時買ってきました」

「…つまりあの段階でこんな事しようと企んでたわけね」

第21話 妹？（後書き）

そういえば前回は記念すべき20話目でしたね、今この瞬間まで全然気付きませんでした。読者の皆様、ありがとうございます！

ちなみに今回物語りに出てきたPVというのは八王子Pさんの「Sweet Devil」です。今まで使ってきた「メルト」とかみたいな「誰でも知っているボーカロイドの超名曲」というほどではないんですが、個人的に大好きな曲なので今回使わせていただきました。聞いた事がない方は是非この機会に聴いてみてください

第22話 私の兄妹（前書き）

ぶっちゃん、今回の話はボーカロイドを良く知ってる方にとってはあんまり面白くないかも……

第22話 私の兄妹

「マスター、今何かやってます？」

俺が特に何をするでもなく自室のベッドの上でゴロゴロしているよ、急にドアが開いてミクが入ってきた。∴ノックするってルールどこといった。

「いや、別に何も」

「そうですね、良かったです」

「何が？」

「マスター、曲作りましょう」

「∴」

また突拍子もなく何を言い出すのでしょうかこの娘は。∴って、そういうえばこいつボーカロイドだったな。っーことはまあそれほど不自然じゃないんだろうな。

とはいえ、今はそんな気分じゃない。せつかくの日曜日、ゴロゴロしないともつたないだろ？

「今日はパス、何にもやる気しねえ」

「まゝたそんな事言って∴。マスターホントに曲作る気あるんですか？」

「今はない」

「∴ううゝ」

「そのうーうー言つのをやめなさい」

「やめなかつたらビンタですか？」

「∴それはさすがに出来ないからほっぺつねる」

「どの道痛そうなのでうーうーはもうやめます」

ミクにこのネタが通じたことに少し驚きつつ、少し考えてみる。

（「曲作る気あるんですか」、か…）

もちろん作りたいたいとは思ってるさ、もともとそのために関の奴から譲ってもらったわけだし。でも何かテーマか何かないと曲なんて正直言っても作れないし、逆に何のテーマもなく作った曲なんてどうせロクな曲じゃない。だからゆっくりテーマを探してるつもりなんだけど…ミクからしてみればめんどくさくて何もやってないようにはか見えないかもな。

「…悪いな」

「はい？」

「…いや、なんでもないよ。それよりさ、何かオススメの曲とかないか？」

「オススメ、ですか？もちろんありますよ。パソコンの前座ってください、教えてあげますから」

「りょーかい」

俺はベッドから起き上がり、言われたとおりパソコンの前に座った。パソコンの電源を入れ、パパッとニコニコにアクセスする。ミクが家に来てから何度もやったことなので、もうすっかり慣れてしまった。

「うーん、今日は何を紹介しましょう…。マスターって私以外のボーカロイド知ってます？」

「お前以外のボーカロイド？」

「その反応は知りませんか？ボーカロイドって私以外にも色んな種類があるんですよ。私と同じクリプトン製ので代表的なのは鏡音レ

ン君とリンちゃん、巡音ルカさん、MEIKO姉さんにKAITO兄さんなんかがいいますね」

「海翔？つて言うか兄さんに姉さん？」

「海翔さんじゃなくてKAITOさんです。同じ会社で開発されたから皆兄妹みたいなものですし、KAITO兄さんやMEIKO姉さんは私より前に開発されたので私は兄さん、姉さんって呼んでるんです」

「ふ〜ん…」

「まあそれはともかく、今日はそんな私の兄妹達の有名な曲を少し紹介しますね」

というわけで今日もミクに色々と教えてもらった。

まずは鏡音レンにリン。二人は双子だということで、似た曲が多いらしい。例えば「悪ノ娘」と「悪ノ召使」や、同じタイトルだがレン版とリン版とでは微妙にアレンジが違う「右肩の蝶」なんかがそうらしい。

次に巡音ルカ。初めての英語が喋れるボーカロイドということになり注目されたらしい（ちなみにミクの英語は凄く見事な日本語英語だった）。代表曲は「ダブルリアット」、「RIP=RELEASE」など。

最後にKAITOとMEIKO。この二人は結構共演することが多いらしく、かなり初期に発売されたボーカロイドなのにもかかわらず根強い人気を誇るんだとか。代表曲は「つがいこがらし番風」、「千年の独奏歌（KAITO）」、「Change Me（MEIKO）」など。

さて、そんなわけで色々新しいボーカロイドを教えてもらったわけだが、一気に色々教えられたせいで正直頭が混乱している。

そんな俺の状態を知ってか知らずか、ミクが追い討ちをかけるかのようにさらに説明を続行する。

「MEIKO姉さんとKAITO兄さんは年齢も上ですし、開発されたのも私より前なので普通に私の姉さんと兄さんです。逆に、レオン君とりんちゃんも年齢的にも開発順的にも私の弟に妹です。ただルカさんの場合は少しややこしくて、年齢的には彼女の方が年上なんです。開発されたのは私の方が先なんです。だから正直私が姉なのか彼女が姉なのかわからないんですよ…」

「な、なるほど…?」

「マスターはどう思います?」

「な、何が?」

「だから、ルカさんが私のお姉さんか妹か」

「あ、ああ。そうだな…」

ここで少し巡音ルカの外見を説明しておく、真っ白な肌にピンク色の長い髪、少し吊り気味の気の強そうな青い目に長身、おまけに巨乳で…まあ要するにクールビューティーって感じた。

「まあルカが姉だろうなあ」

「ですよ〜、たいていの人はそう思うと思います」

「ちなみにお前自身はどう思うんだ?」

「私ですか?そうですね…ルカさんはカッコいいお姉さんだけど、ボーカロイドとしては私が先輩って感じですかね」

「…どの道お前が妹か」

「まあ…私があの人のお姉さんって言い張るのはさすがに無理がある気がしますし」

ミクが苦笑と共に言う。俺も苦笑いを返し、「まあ機会があったら他のボーカロイドを買ってみるのもいいかもな」なんて言いつつ再びパソコンに向き直る。するとミクの表情が急に凍りつき、うつむいて黙り込んでしまった。

「…ミク？」

「…メです…」

「え？」

「…ほ、他の子は、買っちゃダメ、です…。わ、私が満足させてあげますからっ、だから、その…わ、私だけじゃなきゃ、ダメ…」

「…」

最後の方はほとんど聞き取れないような小さな声だったが、確かに聞こえた。正直ミクがどうしてそんなことを言うのかはよくわからなかった。ただ彼女のその弦きを聞いた瞬間、何故かミクが物凄く可愛く見えた。

第22話 私の兄妹（後書き）

パソコンを新調したので少し更新が滞ってしまいました。もう落ち着いたので次回からもう少しサクサクと更新できればなと思います。

第23話 氷上の歌姫（笑）〈前編〉（前書き）

お待たせしました、丸々一週間ほど更新できずにすみません<>
その上で申し訳ないんですが、今月末と来月は期末やら何やらと色々テストが多いので、更新が滞ってしまう可能性があります<>、どうかご了承ください

第23話 氷上の歌姫（笑）〈前編〉

「あ、そうだ海翔。あとカナも」

「ん？何？」

「俺はついで見たいに言いやがって…」

俺は文句を言いつつ、寝そべっていた体を起こして葵の言葉に耳を傾ける。海翔も同様に読んでいた漫画を閉じて葵の方を見ている。ちなみに今は土曜日の放課後、時刻は1時半。葵が「何もすることないからカナン家に行きましょう」とか何とか言いつて海翔と一緒に押しかけてきた。まあ特に予定があつたわけでもないし全然かまわないんだが。

「学校の近くにモールあるじゃない？」

「あるね。ひよっとして先週オープンしたアイススケートリンクの話？」

「あれ、何だ知ってたの？」

「それなりに話題になつてたし、僕自身も興味あつたからね。で、葵が言いたいのは僕たち4人で行かないかってことでしょ？」

「さすが、飲み込みが早くて助かるわ」

「…」

…え〜と、何か葵と海翔の二人でどんどん会話が成立しているが、正直俺には何がなんだかさっぱりわからないんだが。いや、なんとなくわかるからいいけどさ。要するにアイススケートに行かないかって話しだろ？

「もちろん僕は賛成だよ」

「そうこなくっちゃ！ミクとカナは？」

「行くのは当然賛成だけど、いつだ？」

「今から」

「急だな」

「いいじゃない、どうせこの後やることなんて別にないんだから」

「まあな。俺はいいぜ、海翔は？」

「僕も大丈夫。まあアイススケートに行くならそれなりに寒くない格好に着替えてから再集合、ってことになるだろうけどね」

「決まりね、じゃあ学校前に2時集合でいい？」

「了解」

というわけで今日はアイススケートに行くことになった。ちなみにミクは冬服を持っていないので葵に借りるらしい。俺は素早く適当な服を引っ張り出して着替え家を出た。

？ ？

「ふわぁ…」

ダウンジャケットにミニスカートという、防寒したいのかしたくないのか良くわからない服装をしたミクがリンクを見て感嘆の声を上げた。俺、葵、海翔の三人も同じく唾然としている。

というのもこのアイススケートリンク、大きさが尋常じゃない。よくテレビで見るとなリンクの軽く3倍はありそうなほど大きく、人が結構いるのに全然スペースに余裕がある。

「マスター！早く行きましょう！」

「わかったわかった、そんなはしゃぐなって」

目をキラキラと輝かせながら俺をリンクに引きずって連れて行くこととするミクに苦笑しつつ、カウンターに行って人数分の靴を借りる。

ミクにも渡してやると、何故かキョトンとした表情で見られた。

「…マスター、この靴なんか普通の靴と違うんですけど。何でこんな武器みたいなのついてるんですか？」

「…まあスケート靴だからな」

「…」

「…」

…あゝ、何かいやな予感がする。色々めんどくさい事になりそうな、そんな予感。

「ミク、お前アイススケート知らないだろ？」

「…ソ、ソynaコトナイデスヨ？」

「凶星か…。ったく、先に言えつての」

「だ、だってやってみたかったから…」

「…はあ、まあいいや。滑れるのか？」

「た、たぶん…」

「…葵、海翔」

心の中でため息をつき、隣で靴を履き替えている二人に声をかける。すると二人とも俺の言わんとしたことを察したのか、特にこちらを見ることもなく、

「うん、僕たちは僕たちで勝手に楽しんでるから」

「なるべく早く合流するようにね」

とそれぞれ言い残し、スタスタとリンクへ歩いていってしまった。

「…だとき。というわけで、練習だな」

「…ごめんなさい、マスター」

「なあに、迷惑かけられるのはこれが初めてじゃないし、もう慣れたさ」

「…ありがとうございます」

「礼を言われるようなことでもない、俺が勝手に言い出したことだしな。さてと、そんじゃあ早速始めるか」

俺は最後に靴紐をぎゅっと結び、スクッと立ち上がる

「…わわっ!」

ミクも同じように立ち上がるうとしたようだが、どうやら慣れていないせいかバランスを保てずに転びそうになっている。…氷の上にいないときは結構バランス取るのは簡単なはずなんだがなあ…。

前途多難になりそうな予感を感じ、俺はひとつ嘆息して、ミクを支えるために彼女に近づいた。

第23話 氷上の歌姫（笑）〈前編〉（後書き）

久々な上にちょっと短くてごめんなさい……
後編はなるべく早く更新できるよう努力します

第24話 氷上の歌姫（笑）〈後編〉（前書き）

お待たせしました！前回から引き続き、アイススケートのお話です。

第24話 氷上の歌姫（笑）〈後編〉

「じゃあとりあえず立つ練習からだな。たってみ」

「わ、わかりました。い、行きますよ…」

ゆっくりと立ち上がり、若干フラフラしながらも何とかバランスを保って立ち上がる。…が、

「わ、わわっ！」

3秒もたずにバランスを崩し倒れかけるミクを慌てて支える。…最近気づいたんだが、こいつは結構不器用なんじゃないだろうか？

「い、ごめんなさい、ありがとうございます…」

「…言いたかないけど前途多難だな」

「…すみません」

「まあ気にすんな、初めてなんだからこんなもんだろ。まずは掴まって立つ所から始めないとか。俺の肩とかに掴まってみ」

「わ、わかりました…」

そう言ってミクが手を伸ばし俺の肩に掴ま…ろうとしたのだが。

「…マスター、背高すぎです」

「…お前が小さすぎるんだ」

俺の身長は大体185、ミクのは…測ったことないけど、160くらいか？というわけで相当な身長差があるわけで、そりゃそんな高い手すりに掴まったところで安定するわけもない。

「じゃあ手でもいいや、とりあえず掴まって立つ練習」

「えっ!？」

「…なんだよ？」

「え、あ、いえ、なんでもないです…」

というわけで今度は手を繋いで体を安定させて立つ練習。最初は何故か知らんが顔真っ赤にしてフラフラしてたが、しばらくすると30秒くらいはそれなりにバランスを保つことが出来るくらいには上達した。その後すぐにバランスを崩して倒れそうになったが、さっきの3秒に比べたら大きな進歩だろう。

それからしばらくの間同じ方法で練習を繰り返すうちに、立つのはマスターしたらしく、俺が手を離しても結構危なげなく立てるようにはなった。が、ここにくるまでに1時間以上かかってしまった。もう滑り方なんて教えてる時間はないので、とりあえず氷の上に移動する。

「ま、マスターちょっと待って!滑る、滑るっ!!!」

「当たり前だろ氷の上なんだから」

「そうじゃなくて!いやそうですけどそういう問題じゃなくて!」

実際にスケートをやったことがある人にはわかると思うが、氷の上ってのはかなり普通の地面とは違って物凄く滑る。始めてやる人は大抵その違いに驚いてちゃんと滑れないんだよなあ…俺もそうだったからよくわかる。

「落ち着けて、さっきと同じでバランスキープしながら立てばいいんだよ」

「お、落ち着いて…バランスキープ…」

呟きながら必死にバランスキープをしようとするが…

「はわわっ!？」

物凄い勢いで引っくり返りそうになるのを慌てて支える。…なんか今日はこればかりだ。

「ご、ごめんなさい…」

「いや、まあいいけどさ。って言うか何でお前そんなおっかなびっくり掴まってるんだよ?もっとしっぴかり掴まれ」

「へ!?あ、いや、それはその…。お、恐れ多いというか…」

「恐れ多いって…何を馬鹿なことを言ってるんだ」

「あ、あう…」

「…まあ何でもいいけど、掴まってないで転ぶと一番困るのは多分お前だぞ?」

「え?」

「お前今日ミニスカだろ?転んで引っくり返ったらパンツ見えるぞ」

「!?!?たわ!」

言われて気づいたのかミクは慌ててスカートを押さえにかかり、それによりまたバランスを崩し、それを俺が支える。…もうすっかりパターンになっただな、この流れ。

「…たく、何でお前はスケートにミニスカなんてはいて来るかね…」

「だ、だってスケートって何か知らなかったんでもん!」

「そりやまあそうかもしれないけどさあ…」

とにかく言い争ってても埒が明かん。観念したのかミクは俺の手に力強くしがみ付き、懸命にバランスを保とうとしている。

しばらくするとコツを掴んだのか、バランスを崩す回数が心なしが少なくなってきた気がする。

「慣れてきたか？」

「な、慣れてきたかどうかはわかりませんが…少しやり方はわかってきた気がします」

「そっか」

…じゃあ少しくらい手を離しても大丈夫だよな？

ちよっとしたイタズラが頭に浮かんだ。…いや、イタズラつつつてもちよっと手を離すだけだけど。

と言うわけで、実行。

パツ。

「あ、ちょ、マスター!？」

「少し一人で頑張れ。慣れてきたから大丈夫だ」

「ま、待って！無理、無理無理無理!!」

俺の手が離れた事でちよっとしたパニックに陥ったミクが手をバタバタさせながら必死で転ぶまいと頑張っている。さっきコツを掴んだ為か、予想通りすぐに転ぶようなことはなかった。というか、それどころか予想以上に耐えている。

「おお、結構頑張るね」

「呑気な事言っただけで助け…きゃあ!？」

「あ」

本当は転ぶ直前で助けてやろうと思ったんだが、思ったたよりも持ちこたえてたから油断した。感心してるうちに引っくり返ってしまった。

「う、ううう…。痛いです…」

「悪い悪い、大丈夫か？」

「…何で助けしてくれなかったんですか」

尻餅をついたミクが睨むように俺を見上げてきた。心なしか若干涙目になってる気がする。

「いやあ、まあちょっとしたイタズラ心がな」

「…見ました？」

「見えなかったよ」

「…ホントに？」

「ホントホント、白と緑の縞々なんて見てないよ」

「マスターなんて大ッ嫌いです！！」

ミクの怒鳴り声が広いアイススケートリンクに木霊した。…ちょっとからかい過ぎたか、あとでちゃんと謝っとなきゃな。

第24話 氷上の歌姫（笑）〈後編〉（後書き）

さて、前回の後書きにも書きましたが、結構大きなテストが来週月曜日にあるのでしばらく更新できない可能性があります。申し訳ありません！<>

次回はどんな話にしようかなあ…。

第25話 最悪のシスター・ミーツ・ブラザー（前書き）

大変長らくお待たせいたしました！テスト終わった後も色々あって更新遅れてしまっ>て申し訳ありません<；
とにかく、まずは本編をどうぞ！

第25話 最悪のシスター・ミーツ・ブラザー

今朝、朝起きたら親父からメールが届いてた。忙しい中急いで送ったのか、一行しかないメールだった。

『今日の昼頃、お前の妹がそっちに着くはずだ』

…どうやら俺は今日から正式に、「兄」になるらしい。

? ?

「ミク」

「…」

「ミク、聞いてんのか?」

「…」

「…縞パン」

「っ!」

ソファーに座ったミクが凄い勢いでクツションを投げてきた。これくらいの事はまあ予想してたので特に驚くことなくキャッチする。

「…何か御用ですか?」

「まずはその睨むのをやめて欲しいんだが」

「…ご用件は?」

ミクの今までに見た事の無いほど敵意のこもった態度に、思わずため息をついてしまった。

こないだのスカートでちょっとしたイタズラ心でミクを転ばしてしまっただけ以来、こいつはいつもこんな感じで敵意をむき出しにしてく

る。もちろん謝ったのだが、どうやら俺が思った以上に怒らせてしまっていたらしい。

「とりあえずまずは機嫌直そうか」

「何の事ですか？私には別に機嫌悪くなんてないですよ」

「じゃあその睨むのをやめてくれ」

「…」

「…どうしたら許してくれる？」

「…本当に悪いと思ってますか？」

「思ってるよ、ここまで怒るとは思わなかった。ゴメン」

俺は素直に頭を下げた。あの後俺だって俺なりに反省して、ちゃんと悪いとは思ってる。

「…」

「…」

「…わかりました、許してあげます」

「…サンキュ」

しばしの沈黙の後、嘆息まじりにだったが、ミクが俺の謝罪を受け入れてくれた。俺は顔を上げて、今日初めての笑顔を見せた。

すると何故かミクが急に顔を赤くしてそっぽを向いてしまった。…

あれ、許してくれた…んだよね？

「た、ただし！今度やったらホントに許しませんからね！」

「わかってるって」

…さて、話が一段落ついたところで、新しい家族の事でも話すとしてようか。

「話は変わるがミク」

「はい、何です?」

「今日から妹がうちに来るらしいから」

「…へ?」

ミクがキョトンとした顔でこっちを振り向いた。

…あれ、なにこの「妹って何の事?」みたいな反応。俺ちゃんといつに義妹の話…って待って待て。

俺、ミクに義妹が来るって話したっけ?

…そういえば話してない気がする。あの時なんだかんたあってバタバタしてたし、終わった後もすっかり忘れてた気がする。ということとは…。

「マスター、妹って何の話ですか?マスターに妹なんていたんですか?」

「あゝ、いや、そういうわけじゃないんだが…」

…うん、完全に俺のミスだなこれ。まあいいか、今から説明すれば済む話だし。

「悪い、言うの忘れてたみたいだ。お前が居間でコスプレしてた時の事覚えてるか?」

「…そ、そういえばそんな事もありましたね」

その時の事を思い出したのか、ミクの頬が若干紅潮していた。…多分今俺もつられて赤くなってると思う。

「じ、実はあの時俺が居間に降りてくる前に親父から電話があったな」

「マスターのお父様から？」

「…お父様って。まあそれはともかく、その時教えてもらったんだが、どうやら親父たちの友達が運悪く交通事故で亡くなっちゃったみたいだな」

「え!?!」

「それでその夫婦の娘さんが一人だけ残されちゃって、仲良かったうちの両親がうちで引き取る事にしたらしい」

「そ、そうなんですか…。…来る事に関しては特に文句は無いんですが、そういう大事な事はもう少し事前に教えてくれませんか？それ以外の情報ですか…」

「悪い、それは完全に俺が悪かった。素直に謝る」

「まあいいですけど。それで、何時ごろとかわかるんですか？」

「昼頃だったさ」

「…あと1時間くらいでお昼なんですけど」

「そうだな」

「…」

「…」

「…いやいやいや。『そうだな』じゃなくて、色々やることあるでしょう!?!」

「それもそうだな。よし、じゃあ早速歓迎会の準備だ!」

「無理ですよ!1時間で歓迎会の準備とか無理ですから!」

「む、じゃあせめてピフテキでも作るか」

「どこにそんな豪華なものを作る食材があるんですか!もう少しラック下げましょうよ!」

「じゃあおかゆ」

「下げすぎです!」

「イタリア料理のフルコースとかかどうだ?」

「だからレベル高すぎですってば！何でそんな両極端なんですか！？」

「中途半端はダメかと思って」

「今からイタリア料理のフルコース作ったほうが中途半端ですよ！」

「…はいはい、わかりましたよ。無難にチャーハンとかにすればいいんだろ」

「…なんか激しく納得いかない態度ですけど、とりあえずそういう方向でお願いします」

「任せろ、完璧なふかひれチャーハンを作ってるぜ」

「何でふかひれ！？普通にエビチャーハンとかにしてください！」

「りょうか〜い」

暇つぶしにちよつとからかってみた。うん、思ったとおりもツッコミが冴えてるなアイツ。これから定期的にからかつてやる事にしよう。

新たな発見をしたところで、俺はエプロンを身に着けつつ台所へ向かう。ミクはミクで居間の掃除やらをしてくれていた。

さて、さすがにふかひれチャーハンとまでは行かないが、ちよつと気合入れて作ってみるとしますか。

??

ピンポン

チャーハンを盛り終えた瞬間に家のチャイムが鳴った。

「お、来たかな？」

「じゃすとおんたいむですね」

見事な日本語英語でミクが言う。英語をしゃべれるのは彼女の姉であり妹であり後輩であるルカさんであり、それより前に発売されたミクは英語が苦手らしい。

と、そんな情報はおいという、とつとと迎えてやるとしよう。

俺はエプロンをはずしつつ玄関に向かう。ミクは俺の後ろをトテトテとついて来た。

…正直若干緊張している。っていつか今日から新しい家族が増えるってんだから、緊張するのも当たり前だ。

一度大きく深呼吸をして、ドアを開けた。

「…あ」

そこには。

「…えと、こ、こんにちは。…あ、あなたが、千歳奏さん、ですか？」

小さなトランクを持った、黒いセーラー服を身に纏った少女が、俺を見上げていた。

「…そうだよ、はじめまして。千歳奏です」

俺は出来る限りの優しい笑顔でうなずいた。

色々と驚きはした。ああ、もちろん驚いたさ。想像以上の美少女だったし、黒髪なのに目が翠色^{みどり}っていうなんか特殊な感じだし。

でもまあ何か：今日からこの子が俺の妹になるんだと思うと普通に嬉しくて、だから思ったよりも普通の反応をする事が出来た。

「あ、は、はい、はじめまして！わ、私は里香って言います！その、わ、私っ！」

「落ち着きなつて、ほら深呼吸深呼吸」

あわだた
慌しい妹の里香ちゃんの様子に苦笑しつつ、彼女と一緒にひとつ深呼吸をする。そうする事によって少し落ち着いたのか、さっきよりもはつきりと。

「えっと、奏さんの家の養子になりました。ちゆ、中学三年生なので、妹としてこの家で生活させてください」

「もちろん、いらっしやい」

「はい！絶対にご迷惑をおかけしますが、よろしくお願いします！
「絶対迷惑かけるんだ!？」

しまった！思わずツッコんじゃった!…いや、でもこれはしょうがなくはない？最初の挨拶が「絶対にご迷惑をおかけします」だったらツッコまざるをえなくない？不可抗力じゃない？

とかそんな感じで誰に対してもなく弁明をしていると、里香ちゃんは里香ちゃんデビツクリしたように「はわわっ!？」とか奇声を上げていた。

「ご、ごめんなさい！やつぱり迷惑ですよ私なんていないほうがいいですよね帰ったほうがいいですよねすみませんでした!」

「ま、待って！そうじゃないから！ビツクリしたただけだから!」

「うつろう、ごめんなさい、ごめんなさい…。あうう…私ってやつぱり、人を不幸にしちゃうんだ…。お父さんとお母さんもいなくなっちゃうし、奏さんにも迷惑かけちゃうし…」

俺の言葉が微妙に聞こえているのか聞こえていないのか、泣きながら走り去る事は無かったがえらく落ち込んでしまった。…やばい、どうしていいかわからない。

> i 2 4 2 3 2 | 2 1 8 6 <

…これが、俺と義妹いもつとの…まあ認めたくはないが、かなり最悪の部類に分類されるであろう出会いだった。

第25話 最悪のシスター・ミーツ・ブラザー（後書き）

さて、色々あって更新遅くなりました。色々というのは要するにテスト終わって気が抜けたんですね、何もやる気が起こりませんでした。たほんとにごめんなさい；；

昨日ぐらいに「さすがにまずい」と思い、急いでイラスト描いてマツハで執筆しました。おかげで絵は雑だわ小説はグダグダだわ散々です。：あれ、何かいつもと変わらん（ry

少しの間休載している間に、色々とめでたい事が起こりました。まず、この小説のPVアクセスが2万アクセス、ユニークアクセスが2000アクセスを突破しました！さらにさらに、お気に入り件数が30件を突破しました！自分の拙い小説を色んな方に読んでいただいているようで、本当にもう感謝感激です！ありがとうございます！これからもゆったりとやっていくので、もしよければお付き合ってください 評価や感想なども心待ちにしておりますよ！

さて、長くなつてしまいました。ここらで失礼しようと思えます。また次回もお楽しみに！

第26話 ネガティブ里香さん（前書き）

サブタイトルが若干ネタバレになってる気がしないでもないですが気にしない。っていうか多分なってるから大丈夫、多分ね。

第26話 ネガティブ里香さん

今日、うちに新しい家族が増えた。そいつはものすごい美少女で、すっかりしてそいで、とにかくすごい奴だった。

そんな奴が義妹になったんだから、これから毎日が相当楽しくなるだろうな。…そう思っていた時期が俺にもありました。

「…」

「…」

「…」

…あれ、なにこの重っ苦しい空気。何でこんな黙々とチャールズをモソモソ食わなきゃならんのだ？あれ、今日って結構めでたい日じやなかったっけ？新しい家族が増えためでたい日じやなかったっけ？あれ？

何でこんな事になってんだ？だって状況だけ見たら相当珍しい…っ
て言うか楽しげな状況だぞ？義妹とボーカロイドとはいえ美少女二人と一つ屋根の下生活するんだから、刺激があつて楽しそうじゃん。
なのになんでこんな過ごしにくい空間が完成してしまった？

…ダメだ、何かちょっと混乱してきた。ちょっと状況を整理しよう…。

？
？

「はい！絶対にご迷惑をおかけしますが、よろしくお願いします！」
「絶対迷惑かけるんだ!？」

しまった！思わずツッコんじゃった!…いや、でもこれはしょうがなくはない？最初の挨拶が「絶対にご迷惑をおかけします」だったら

ツッコまざるをえくない？不可抗力じゃない？

とかそんな感じで誰に対してでもなく弁明をしていると、里香ちゃんも里香ちゃんまでビックリしたように「はわわっ！？」とか奇声を上げていた。

「ご、ごめんなさい！やつぱり迷惑ですよ私なんでもないほうがいいですよね帰ったほうがいいですよねすみませんでした！」

「ま、待って！そうじゃないから！ビックリしただけだから！」

「うううう、ごめんなさい、ごめんなさい…。あうう…。私ってやつぱり、人を不幸にしちゃうんだ…。お父さんとお母さんもいなくなっちゃうし、奏さんにも迷惑かけちゃうし…」

俺の言葉が微妙に聞こえているのか聞こえていないのか、泣きながら走り去る事は無かったがえらく落ち込んでしまった。…やばい、どうしていいかわからない。

「え、えーと、はじめまして、初音ミクです！マスター、つまりあなたのお兄さんの専属のボーカロイドとしてこの家に住ませてもらってます！よろしくお願いしますね、里香さん！」

助け舟を出そうとしてくれたのか、ミクが少し元気すぎるくらいのテンションで里香ちゃんに挨拶してくれた。すると幸運な事に、少しびっくりしたのか何なのか里香ちゃんが反応を示してくれた。

「…ボーカロイド？」

「あれ、ボーカロイド知らないですか？」

「外国だとまだマイナーなのかも知れないな」

「…よし、マスター。私たちの目標は世界進出にしましょう」

「無茶言うな、英語も喋れないくせに」

「…マスターだって、曲作れないくせに」

「作れないんじゃない、作らないんだ」

「なお悪いですよ!」

「なはは…。…あ」

そんな感じですっかりミクとの会話に熱くなってしまったせいで里香ちゃんへの対応をすっかり忘れてしまっていた。慌てて里香ちゃんの方を見ると…。

「…ほ、本当にごめんなさいミクさん。知ってなきやおかしいですよ、そうですね、嫌な思いをさせてしまいましたよね?ごめんなさい、やっぱり私はダメな子なんです、世間知らずなダメな子なんです…」

…目じりに涙を浮かべながらブツブツとミクに謝っていた。しまった、今はミクなんかにかまってる場合じゃなかった。

「り、里香ちゃん!大丈夫、大丈夫だから!外国ではミクはまだそんな有名じゃないから知らなくても問題ないって!」

「いいんです奏さん、そんな励ましはいいんです。私がダメなのはわかってますから…」

「いや、励まして言うか…。と、とにかく!いつまでもこんなところで立ち話もなんだし、あがって!昼飯にチャーハンも作ってるから!」

「チャーハン?...えっと、それって奏さんが作ったんですか?」

「え?あ、まあそうだけど」

「…奏さんでも作れるのに私ときたら…。やっぱり私はダメな子なんです…」

…「奏さんでも」ってなんだよ、何かさりげなく失礼なこと言われてない?そして里香ちゃん料理できないんだ。っていうか今の会話

にそこまで落ち込まなきゃいけない要素あった？別に料理が作れないことなんてそんな落胆する事でもないような…。

やばい、本格的にこの子の扱いがわからない。だってなに言っても落ち込むんだものこの子。下手な事言えないからコミュニケーションが取れないんだが。

…とりあえず、まずは何とか昼飯食ってもらうか…。

？
？

…そうだ、なに言っても状況がいい方向に行かないから全員黙々と食ってるんだった。うゝん…この状況は何とかしないとだな…。

第26話 ネガティブ里香さん（後書き）

次回は昼食が終わった後の話になる予定です。

第27話 焦らずゆっくり(前書き)

今回笑い分が大幅に不足しております。笑いを期待していた方々、申し訳ありません。

第27話 焦らずゆっくり

「…ふう」

食器を洗い終え、ダイニングの椅子に座って小さくため息をつく。女性陣二人は部屋の準備をしているので、現在居間とキッチンほとんど音が無い。…特に見たい番組があったわけでもないのだが、テレビをつけてBGM代わりにしてみる。さ、寂しかったわけじゃないんだからねっ！

…疲れた。食器洗うのはいつもの事だから別にたいした事じゃない。問題は…まあ言うまでもなく、我が義妹のことである。

まず第一に、ネガティブすぎる。多少ネガティブなくらいなら別に文句も何も無いのだが、あいつの場合はちよつと尋常じゃないというか…。とにかくもう少し前向きになれるようサポートしてやりたい。

第二。何か妹って気がしない。いや、まあ来たばかりだからしょうがないっちゃしょうがないんだけど…。でもさ、もうちよつと親しみを持ってくれた方が正直嬉しいんだよなあ。何かすごい他人行儀だし、敬語だし、俺の事もさん付けだし。…って言うか何でうちの住人は基本俺に敬語なんだ？一緒に住んでんだから普通にタメ口でいいじゃん。…別にいいけどさ。

「…何か飲む」

色々考え出したらちよつと鬱になったので気分を変えようとキッチンにある冷蔵庫からジュースを出して、コップに注ぐ。…その間も、やっぱり里香ちゃんの事が気になった。

…うん、やっぱりこのままは良くないよな。よし、多少強引にでも兄妹の関係に持っていくか！…ジュース飲みながら決心する事ではな

いけどな。

とまあそんなわけで決心をしつつ居間に戻ると、部屋の準備が終わったのか里香ちゃんがソファに座ってテレビを見てた。チャンネルはさつき見てたのとは違うらしく、俺の記憶が正しければ毎週この時間にやっているバラエティだったはずだ。

里香ちゃんはどうやら見入ってるらしく、俺がダイニングに戻ってきた事に気付いてないらしい。特に邪魔する理由も無いので静かに椅子に座ったのだが、座ったときの音に気付いたのか里香ちゃんが少し驚いたように慌てて振り向いた。

「あ、か、奏さんっ!?!」

「ゴメン、邪魔するつもりじゃなかったんだけど」

「い、いえ、こちらこそごめんなさい!何か無視しちゃったみたいで...」

「気にしないでいいよ。それより結構見入ってたみたいだけど、毎週見てるの?確かそれって毎週この時間からやってるよね?」

「え!?!あ、いえ、そ、そういうわけじゃないんですけど...。というか奏さん、もしかして何か見てたんですか?」

「え?」

「だ、だって私が来たときは別のチャンネルが移ってたから...。でも誰もいなかったからいいかなくて...ご、ごめんなさい!わ、私はいいですから、奏さん好きな番組見てくださいっ!」

「いやいやいや、ちよつと落ち着いて!大丈夫だって、何も見てなかったから!」

「いいんです、気を使う必要なんて無いですから!私は本当にいいものと思ってください!じゃないと本当に迷惑かけちゃいますから!」

... 今のはちよつとカチンと来た。

「いないものと思ってください!」?馬鹿なこと言っな、そんな事出

来るわけがない。俺は今朝、里香ちゃんの「よろしくお願いします」に「よろしく」って返したぞ？それに妹としてこの家に住んでもらうことをちゃんと了承したし、むしろ嬉しいと思ってる。

それなのに、本人が「いないものと思ってる」なんて言っちゃダメだ。何かこう…うまく説明は出来ないけど、とにかくダメだろ！

これはあれなのか？この子が発揮してるあの超絶ネガティブ思考が原因なのだろうか？だったら…やっぱ改善できるよう手伝ってやりたいよな。よし！

「里香ちゃん！…じゃなくて、里香！」

「ふえ！？あ、は、はいっ！？」

「お前はどの番組見たいのか？」

「え？あ、いや…。…そ、そんな事、ないですよ？」

「正直に言わんと明日朝飯抜きにするぞ」

「ふえええええ！？えと、その…み、みたいです…。」「ごめんなさいっ！」

「そのすぐ謝るのも直さないとな…。とにかく、お前は語の番組が見たいんだな？」

「…は、はい…」

「うん、じゃあ見ればいい」

「え？」

「まあ正直俺はテレビ見てたわけじゃないし、別に見てていいよ」「き、気なんか使わないでください！わ、私は本当にいいですから！」

「いいからいいから、妹のわがママを聞くのは兄の義務だしな」

「ぎ、義務って…」

「とにかく、この家では遠慮しない事。それから、敬語もなし。呼び方も『奏さん』じゃなくて家族的な呼び方な。『お兄ちゃん』、

『兄貴』、『奏』とかその辺な」

「何か要求多くないですか！？」

「ほらそこ敬語」

「あう…。な、何か要求多く…ない？」

「まあそうだけど。でもなんかお前が他人行儀なのが気になったから」

「だ、だって事実他人なんだし…」

「それ以上言ったらちよつと本気で怒るぞ」

「え…？」

今まではかなりヘラヘラと笑いながらやってたのだが、今の聞いてさつきみたいにまた頭に来た。

「か、奏、さん…？」

「その呼び方はしないでくれって言っただろ？」

「で、でも…」

「…いいか里香。俺はお前を他人だなんて思っていない。お前がうちで俺の妹として生活する以上、お前は俺の妹で家族だ。それを否定するような事は、言ってほしくない」

「あ…」

自分の事をどうでもいいみたいに言うのもそうだが、何より俺の事を華族と認めてくれていないみたいですし、ぐいやだった。俺の言いたい事を少しは理解してくれたのか、里香が静かにうつむいて何かを迷うように黙り込んでしまった。

そのまま沈黙が続く事約…何分だろう、数えてなかったからよくわからない。とにかくしばらく後、里香が静かに口を開いた。

「…わかりま…じゃなくて、わかった」

一度敬語で言いそうになったのを直してくれた。…たったそれだけの事なのに、何故かすごく嬉しく感じる事が出来た。

「うまく出来るかわからないけど…私、ちゃんとお兄ちゃんの妹になれるように頑張りま…頑張るから、だから…」

「ん…」

「…こ、これから、よろしくお願ひしますっ！」

最後には結局敬語に戻ってしまったし、ドタバタと逃げるように階段を駆け上って行ってしまったが…今は、それで十分だと思った。

「…これからずっと一緒に住むんだし、焦る必要は無いさ。ゆっくり、気長に頑張れよ」

今はもうここにはいない義妹に向けて、俺は一言励ましの言葉を呟いた。

第27話 焦らずゆっくり（後書き）

千歳 里香

日本人とロシア人のクォーター（日本3：ロシア1）。そのため髪の色は黒だが、瞳は緑色という珍しい外見をしている。親の仕事（オーケストラのメンバー）で、世界中を転々としていたため、さまざまな国の言葉のある程度理解できる。両親を亡くした事故がトラウマになり、以降物事を悪い方向、悪い方向へと考えるようになってしまう。

ちなみに千歳家を訪れた時に来ていたセーラー服は、日本で通う事になっている中学校の制服である。

というのが、簡単な彼女のプロフィールです。作中のどこかで書こうと思ってたんですが、無理に組み込む必要もないかと思ったので後書きで書かせていただきました。

第28話 似たもの同士？（前書き）

今回ちょっと暴走気味です。作者が。

第28話 似たもの同士？

「ふあゝあ…。…ねむい」

フラフラとした足取りで、誰にもなく呟きつつ顔を洗うために洗面所に向かう。

現在時刻は午前6時15分ちょっと過ぎ。昨日は色々あって疲れたからぐっすり眠ってしまったらしく、いつもより30分ほど起きるのが遅れてしまった。おまけに眠気が普通に残ってる。

このままでは満足に弁当を作る事も出来ない…わけじゃないが何かさっぱりしないので、とりあえず顔を洗おうと洗面所に行く事にして、現在に至る。

本日何度目になるかわからない欠伸をしたところで洗面所に到達、ノブを回して中に入る。

「ふあれ？」

「…んあ？」

予想外にも誰かの声がしたので俯いていた顔を上げると、つい昨日俺の義妹としてうちに来た少女、千歳里香が歯を磨いていた。

「あ、ふあなふえさ…んぐっ！？けほっ、えほっ！」

「ちょ、大丈夫か！？とりあえず歯磨いてから喋れ！」

…なんか挨拶をしようとしてむせていた。相変わらず落ち着きない子だなあ…。

くくしばしの歯磨きブレイクくく

というわけで歯磨きを終え、場所は変わってキッチン。俺は朝飯兼弁当の用意をしつつ、里香はそんな俺の事を観察しつつ、それぞれ今日一日に備えて準備をする。…いや、観察してるだけの里香はボクとしてるだけなだけだよ。

「奏さんは毎日こんな朝早くからご飯の準備してるんですか？」

「まあなく、つつつても今日は遅いほうだけど」

「え、この時間で遅いんですか？」

「いつもは今日の30分くらい前には起きてるよ、早起きは三文の徳って言うし」

「…え、それだけの理由で？」

「そういうわけじゃないけどさ、昔からそうだったから習慣になってるんだよ」

「そうなんですか…。あれ、でもじゃあ何で今日はこんな時間に？」

「ん？多分昨日色々あって疲れたんだろうな」

「あ…」

「たまたまだ」って言うてごまかすことも出来たが、俺は里香が少し落ち込むであろう事を理解していながらあえて昨日の事を話題に上げた。というのはもちろん意地悪とかではなく、ちゃんと理由がある。

「…え、えつと、奏さ…じゃなくて、お兄、ちゃん…」

「ん？」

「そ、その…ごめんなさい、忘れてまし…忘れてた」

そう、里香の奴、昨日の「敬語無し」「さん付け」無し」のルールを完全に忘れていた。さっき洗面所で会ってからついさっきまでずっと敬語で喋ってたから、それとなく思い出させたということである。とはいえ、別にそんなに怒ってるわけじゃない。さすがにそんなすぐに覚えられるとは思ってないしな。

「別にいいよ、焦なくていいって言ったろ？」

「うう…でもかな…お兄ちゃん、今わざと昨日の事話題にしたでしょ？」

「ナンノコトヤラー」

「それ何かの呪文？」

「召還魔法」

「何か召還するの!？」

「ナン」

「パンを召還ってどういうこと!？」

「いや、今日の昼飯はインドカレーにしようと思って」

「何でインドカレー!?!お昼ご飯にインドカレーってどんなチョイスですか!」

「たまたま棚に『バーモン カレー』のパックがあったから」

「カレーじゃないですか!いや、元々カレーでしたけど、インドカレーじゃないじゃないですか!」

「わかったよ、じゃあ『とるカレー』にすればいいんだろ?」
「根本的にそういう問題じゃないです!」

…うん、こいつもミクと同類っぽいな。弄られキャラ的な意味で。って言うか里香、途中から敬語に戻ってる。…敬語の弄られキャラって作者書き分けられな【一自主規制一】

「んむう…マスター、おふあよつごいまぶ…」

と、噂をすれば何とやら。ミクが目を擦りながら階段を降りてきた。

「あ、ミクさん、おはようございます」

「ん、おはよ…う…?」

と、そこまで言ったところでなにやら怪訝そうな顔をして、ミクが里香を見た。…というか睨んだ。

「…またあなたですか…」

「ふえ?」

「前回あんなに見事に私の出番を取っておいて」

「…あの、そういう発言はちょっと…」

「里香さん!」

「ひ、ひゃい!?!」

「この際だからはっきり言わせてもらいます!私の出番をとらない
てください!」

「え、ええええ!?!いや、あの…」

「そもそもキャラ被ってるんですよ、被りすぎなんですよ!敬語で、
年下で、可愛くて、可憐で、おとなしくて!」

「誰が可憐でおとなしいって?」

「…今マスターは言っではならない事を言いましたね…」

…なんかミクさんが非常にご立腹だ。何でこんな機嫌悪いの、寝起
きだから?

「いいですねーマスターは。こんなに可愛い子が義妹になってくれ
て」

「ん、まあ良かったけどさ」

「そうですね、昨日からデレデレイチャイチャしちゃって」

「お前にはあれがデレデレイチャイチャに見えたのか…」

「いいんじゃないですか？マスターは里香ちゃんとずっとイチヤイ
チャしてれば！」

…素晴らしい残してミクは今しがた降りてきた階段をドストスと音を
立てて階段を昇って行ってしまった。残された俺と里香は…まあ言
うまでもなく、呆然としていた。

「…な、なんだったんでしよう？」

「…さあな」

とにかく時間も時間だったので、俺はとっとと準備を終わらせて里
香に家の中の主な設備を説明した。というのも、まだ里香は編入手
続きが済んでいないらしく、しばらくは家で留守番していてもら
うのだ。

「…とまあこれくらいだな。じゃあ俺はもう行くから。困った事が
あったら電話してきてくれていいからな」

「…正直ミクさんと喧嘩にならないかがすごく不安なんです…」

「…だ、大丈夫だろ。あいつも悪い奴じゃないし…」

…とは言ったものの、なんだろうこの嫌な予感。不安だ…。

第28話 似たもの同士？（後書き）

明日から4日間ほどイベントに出席する予定なので、更新がしばらく滞るかもです。ごめんなさい！<>・

第29話 ミク&mp・里香サイド(前書き)

遅くなつてしまつてごめんなさい！期末があつて勉強してたのでなかなか執筆できず…。文字数も少し少ないですが、どうかご了承下さい…。

第29話 ミク&mp・里香サイド

…どーも皆さん、皆のアイドル初音ミクです。

…。

……。

……。

…その困ったような目するのやめてもらえませんか？私だって困るんですけど。

…って言うか今私皆さんにかまってる暇ないんですよ！状況説明してる暇もなければ皆さんが暇しないようにトークする余裕もないんですよ！今ちよつとした…いえ、深刻な緊急事態なんだから少し黙ってて下さい！黙った上で部屋の隅っこで邪魔にならないように丸まって下さい！！

…あ、し、失礼しましたっ！えと、あの、別に皆さんが嫌いになつたとかそういうわけじゃなくてですね？その、今ホントに深刻な事態なので、ホントに余裕ないんですよ。早く何らかの解決策を考えないと…。

マスターが寝取られます！

…って違うでしょ！？なに言ってるの私！？落ち着いて、まずは落ち着いて！深呼吸、深呼吸。素数を数えて…1、2、3、5…って1は素数じゃない！落ち着いて、ホントに落ち着いて私っ！

…し、失礼しました。ダメだ、私ホントにダメです今日。とりあえず順を追って説明しましょうか。と思いましたが、ここまで読んで

くださった皆さんなら大体の経緯いきみじは把握してますよね。じゃあさくつと結論から。

新キャラ（里香さん）に出番を盗られました。

というわけで余裕ないんですよ！さつきより多少は落ち着きましたけどやっぱり余裕ないんですよ！それにしばらく一緒にいて気付いたんですが、キャラまで被ってるんですよあの子！敬語だし年下だし！小説では敬語キャラ二人の書き分けはむずかしいって事がわからないんですかっ！？

とまあそんなわけで、現在私は非常に機嫌が悪いです。何とかして里香さんから出番を取り返さないと…！

？ ？

…あ、えっと、皆さん初めまして！先日この家に引き取られた里香と申します！ふ、不束者ふつつかものですが、よろしくお願いします！

…うん、何も考えずに挨拶しちゃいましたけど、かな…じゃない、お兄ちゃんと約束したから敬語は使わないほうがいいのかな…？でも家族でもない人たちにいきなりタメ口はダメだよ…。でもお兄ちゃんは敬語はやめろって言うてたし…。うう…ジレンマだあ

…。

…。

…よし、決めたっ！今日は私タメ口で行きます！こういうコツコツとした、何気ないところでの努力が大事ですよ！というわけで、タメ口が嫌な人もいるかもしれませんが私のため、お兄ちゃんのためにも我慢して下さい！お願いします！

…って、早速出来てないじゃん！敬語で敬語使わない宣言とか矛盾しかないじゃん！ダメ、これじゃダメよ里香！…やっぱり私はダメな子なんだね…。って、これもダメ！ネガティブになるのはもう終

わり！これからはどんどんポジティブに、明るくならなきゃ！お兄ちゃんも遠慮するなって言ってたし、卑屈になるのはもうやめよう！…極力。

とまあそれはともかく、今は別の問題を解決しないと。皆もう気付いてると思っけど、

どうもミクさんが私の事を敵視してるっばいんだよね…。

何でだろう？私確かにネガティブだったり卑屈だったりしたかもだけど、特にミクさんの気に障るような事してないと思うんだけど…。いや、でももしかして何かすごい嫌な事しちゃったのかも…。そうだよ、私だもんね、ダメな子ですもんね…。って！またマイナス思考になってるじゃん！口調も戻ってる！ダメダメ、気をしっかり持つのよ里香！

…さて、活を入れなおしたところで。うん…全然わからない。私ホントに何したんだろう？…ここは素直に聞いてみるしかないかなあ…。

よし、今日お兄ちゃんが帰ってくる前に一回ちゃんとお話してみよう！それでお兄ちゃんに迷惑かける前に私が解決するんだ！…ちょっと怖いけど、頑張る！

第29話 ミク&mp・里香サイド（後書き）

こ、今回暴走したのは主にミクさんであって私ではないんですよ？；
；

そつえば会話が一回もない話を書いたのは初めてかもしれません。

第30話 里香さんの調理風景（前書き）

一週間以上間を空けてしまつてごめんなさい！特に理由はなくて、単に夏休みに入ったので気が抜けてついだらけてしまつて……；；；お詫びと言つては何ですが、今回は挿絵付きです。ちょっと力入れてみました。

第30話 里香さんの調理風景

昼休み。

「……う……」

「ちよつとカナ、どうしたのよ？何か今日ずっとそんな感じじゃない」

昼休みになつたにもかかわらず、弁当も開かないでうなつている俺を見て心配そうに声をかけてくる葵。…そういえば葵が俺を心配してくれたのなんて随分久しぶりな気がする。そんなにまいってるように見えたのか、それともただ単純に今日は機嫌がいいのか。いつもは真つ先に事を感じする海翔が特に何も言っていないって事は単にこいつの機嫌が良かったのか。

「別に何でもねえよ、悩みの種が増えただけだ」

「悩みの種？何があつたのさ？」

購買で買ったパンを頬張りながら海翔も会話に参加してきた。

「義妹が出来た」

「そうなんだ、大変だね」

「そつか、義妹かー。いいんじゃない、楽しそうで」

「他人事だと思いやがって…。そんな楽なもんでもないっての」

「あはは、まあそうだよ。なんたって義妹だもんね」

「そうよね、義妹…」

「…って義妹ーっ!?!?」

二人そろっていまさら驚いた。…うん、まあ妙に冷静だったから時間差で驚くだろうなあとは思ったけどさ。

「ちよつとカナ、どういう事！？何よ義妹って、何でそんな面白そ…そんな事になってんの！？」

面白そうって言ったる今。目もなんか心なしかキラキラ輝いてるし。

「何か最近、千歳家が妙に賑やかになってきてるね…」

海翔は苦笑とともにそんな事を呟いた。確かに今まで一人暮らししてた頃に比べれば賑やかと呼べない事もないけど、正直今みたいなピリピリした雰囲気はゴメン蒙くらりたいです…。

「海外に住んでただけで、事故で両親亡くなっちゃった子を親父とお袋が引き取ったんだと」

「え、じゃあその人って外人さん？」

「四分の一は外人。日本人とロシア人のクォーターだってさ。髪は黒いけど瞳が緑色」

「へえ〜。でもさ、何でカナのご両親が引き取ったの？」

「その子の両親がたまたま俺の親と同じオーケストラの一員で…」

そんな感じでしばらく里香の事を説明した後、今の我が家の状況を簡単に説明した。

「…それはまあ…」

「…なんていうか…」

俺の説明を聞き終えた二人は、お互いに顔を見合わせてから、

「…大変だね」「…大変ね」

初めて俺に同情的な視線を送った。

…しかし、あいつらホントに大丈夫か？ケンカとかしてなきやいいんだけど…。

？ ？

…どーも皆さん、皆のアイドル初音ミクです。

…。

…。

…。

…あれ、なんですかこのデジャブ。あれ、少し前にもこんな事ありませんでしたっけ？あれ？

…ま、まあそれはさておき時刻は12時ちょっと過ぎ、つまりお昼ご飯の時間なのですが、私はポーカロイド、つまりお昼ご飯は必要ありません。というわけで、いつものように暇を持て余してマスターの部屋でネットサーフィンをしているんですが里香さんは…。

ガチャンツ！パリンツ！

「ふあああつ！ま、またやっちゃったっ！」

「…」

とまあこんな感じで、さつきから下で昼食の準備という名の食器破壊を繰り返しているわけです。…思ったよりも不器用な子だったん

ですね。

「えっと、お兄ちゃん油どこにあるって言ってたっけ…？ここ？」

ゴインツ！

「あうあ！？お鍋が落ちてきた！？いたた…普通お鍋って下の方に収納しないかな…？」

…苦戦してるみたいですね、手伝ってあげた方が…って、そ、そんな必要ないです！私の出番をあんなに横取りしたんだから、少しくらい苦労するのがちょうどいいんです！…でもちよっとかわいそうですかね？い、いいえ、そんな事は決してないです！多分！

そんな風に自問自答を繰り返していると、机の上に置いてあるヘッドホンから着信音が流れ出しました。実は私のヘッドホンには簡単な電話機能も搭載しているのです。…自分から掛ける事は出来ないという電話として致命的な欠点は抱えています。慌ててヘッドホンを装着し、右側の赤いボタンを押す。

「…もしもし、マスター？何の用ですか？」

『…ま〜だ怒ってんのかお前』

電話を掛けてきたのは、案の定マスターでした。まあ、このヘッドホンの番号を知っているのはマスターだけなので当然と言えば当然なんです。

「別に怒ってなんかないですよ。それより何の用ですか？」

『…里香の奴、昼飯どうしてる？今日昼飯の準備できなかったから気になったんだ』

「自分で用意して食べてます」

特に意味はないのだが、咄嗟に嘘をついた。しかしその瞬間、一階から「ガチャンッ」と言う何か割れた音と「はわわっ！」と言う悲鳴が聞こえた。

> i25820 | 2186 <

「…」

「…。やっぱりな、アイツ自分で「料理できない」みたいなこと言つてたもんな…」

「…」

「…ミク」

「嫌です」

「まだ何も言っていないだろ？」

「どうせ料理作ってやれとか言うんでしょ？嫌ですよ、私はボーカロイドです。マスターの妹の料理を作るためにいるんじゃないやありません」

「だからってほっとくのか？里香がかわいそうだとは思わないのか？」

「そ、それは…」

「何か不満があるなら帰ってからちゃんと聞く。だから、今は作ってやってくれ。頼むよ」

「…」

「…ミク」

「…これ以上食器の被害を出すのもマスターに申し訳ないですしね。わかりました、何か作ればいいんでしょう、作れば」

「…サンキュ」

「お礼なんていいですよ、マスターの頼みは断れませんしね」

「それでも、ありがとな」

「…どういたしまして。それじゃ、午後の授業も頑張ってください」

『あぁ』

ブツツ、と言う音と共に電話が切れる。私は一つ大きくため息をつき、ヘッドホンを外し机に戻し、里香さんのお昼ご飯を作るために部屋を出た。

第30話 里香さんの調理風景（後書き）

何気にミクさんのヘッドホンの新機能が明らかに。…電話はいらないけど、あのヘッドホンは普通に欲しいです。

どうでもいい事ですが、少し前の「ナンノコトヤラー」の回以来「なん」と言う字を「何」に変換しようとするたびに「ナン」になっ
てしまって、かなりウザったいです。

第31話 和解？（前書き）

約二週間：約二週間ですよ！約二週間放置ですよ！皆さん「なにや
ってるんだ作者の奴！」って思いましたよねごめんなさい！本当に
ごめんなさい！

お詫びとってはなんですが、今回かなり長いですー（約4000
字！）ので、楽しんでいただければ幸いです。

第31話 和解？

「…まったくもう、マスターったら…」

一階に続く階段を降りつつ、「はあ」と大きなため息を一つ。

「里香に何か作ってやってくれ」なんて、マスターひよっとして私の事を家政婦か何かと勘違いしてるんじゃないですか？…いや、まあ確かにボーカロイドらしからぬ無駄に高性能な機能が多々搭載されている点に関しては同意しますけど。料理できるのはともかく、食事なんて必要ですかね？もちろん食べるのは好きですよ、おいしいもの食べてるときは普通に幸せですし。でもそれってマスターに余計な負担掛けるような気がして、ちょっと申し訳ない気がするんですよねえ。私の場合は…本来の機能もちゃんと機能してないから余計に。それから防水機能も無駄な気がするんですよ。ボーカロイドに防水機能とかいるんですかね？お風呂は気持ちいいから大好きですけど、究極的にはアンドロイドの私はお風呂に入る必要はないわけで。外出先で雨に降られたときなんかも便利と言えば便利なんですけど、ボーカロイドは普段外出する必要なんてないわけで。私は…まあ例外ですけど。

…って、私は何自分のスペックを見直してるんですかね？いや、別に見直すことは何も悪い事じゃないですけど、なんでこのタイミングで？スペック確認はまた別の機会にやればいいんですよ、今はそんな事を考えてる場合じゃありません。

ずばり、里香さんのことですよ。

別に隠すつもりもありませんし、皆さんもう普通にお気づきだと思つうので言っちゃいますけど、正直里香さんの事はあまり良くは思つてません。

もちろん嫌いつてわけではないですよ？かわいいし、一生懸命だし、しっかりしてるし…まあビックリするくらいネガティブなのが玉たまにきす

瑕ですけど、今は頑張つて直そうと努力してるみたいですし。

ただ…その、なんていうか、マスターとベタベタしすぎだと思っ
てですよ。昨日だって私がお風呂入ってる間に何があったのか急に仲
良くなつてたし、今朝だつて一緒にキッチンに立つて楽しそうにし
てましたし。…おまけにマスターは私がかわいくないみたいなこと
言いましたし…。

つてあれ？私そんな事に怒つてたんでしたっけ？何か違うような…？
なんて事を考えてるうちに、キッチンに到着。…そこ、「階段どん
だけ長いんだよ」とか言わないでください。どこそその3分間しか戦
えない正義の味方だつて余裕で3分以上戦ってるんですから、細か
い事は気にしない方向でお願いします。

さて、まあそんなわけでキッチンに来た私を出迎えてくれたのは…。

ガチャンツ！

「はうっ！ま、またやつちやつたあ！あう〜…お兄ちゃんに怒られ
ちやうよ〜…」

…新たな食器の断末魔でした。

キッチンは…一言で言えば、惨劇です。「でいざすたー」です。「
かたすとろふ」です。…英語に自信はないですけど、確かどつちも
「悲劇的惨状」とかそんな意味だった気がします。

要するにそれくらいひどいんです。食器の破片がそこらじゅうに広
がってますし、お鍋が何故か床に転がってますし。…ま、まあ包丁
が地面に突き刺さつてたりしてないだけマシ…と思つておきましょ
う。

「さつきから何度も破壊音を聞いていたのである程度の惨状は覚悟

してましたが…これほどとは思いませんでした」

「ひいやあああああ！？み、みみみミクさん！？」

私の嘆息まじりの声を聞いて、里香さんが「ビクッ」と言う擬音が見えそうなほどの勢いで飛び上がりました。相当集中していたのか、私が降りてきた事に気付いてなかったみたいです。

そんな里香さんの様子を尻目に、私は散らばっている破片からお皿が何枚くらい犠牲になったのかを数えようとして…8枚目を数えたあたりで諦めた。

「結構な数が割れちゃったみたいですね…」

「ご、ごめんなさい！お、お腹が空いたから何かを作ろうと思ったんですけど、う、うまくいなくて…」

里香さんが目に涙を浮かべて必死に謝り始めた。…なんででしょう、この罪悪感。私なんか悪い事しちやいましたか？なんだかとてもなく悪い事をした気分になってきたんですけど。

「だ、大丈夫ですって、お皿はまだいっぱい残ってますし！と、とにかく怪我しないように片付けなきゃいけないので、破片を踏まないようにゆっくり台所から出てきて下さい」

「あ、は、はい…」

幸運にも今回は里香さんはあまり自己嫌悪に陥らず、素直に私の指示に従って台所から出てきてくれた。その間に私は倉庫から箒に塵取り、それから掃除機を持って台所へ戻り、破片の撤去作業を開始した。

「み、ミクさん。その…ごめんなさい…」

ダイニングの椅子に座った里香さんが、本当に申し訳なさそうな声で謝った。そんな彼女に私は掃除する手を休めず、同じく謝罪をした。

「いえ、私の方こそごめんなさい。もつと早く手伝いに来てれば良かったのに、今まで知らん顔してて申し訳ありませんでした」

「そ、そんな事！私かもつと器用だったらミクさんの手を煩わせることなくすんだのに、私が不器用だったから…。ごめんなさい！」

「謝らないでくださいよ、私は全然気にしてませんから」

「そ、それなら私も気にしてませんから！だから謝らないでください！」

…それから、少し気まずい沈黙が流れた。

当然ですよ。私はさつきも言ったとおり、里香さんの事をあまりよくは思ってません。彼女にだってそれは伝わっているはずなので、わざわざ声を掛けてくる事なんてないでしょう。

「…あの」

…そう思っていたのですが。

予想外にも、里香さんの方から声を掛けてきました。

「…もし気に障ったらごめんなさい。でも、聞きたい事があるんです…」

「…かまいませんよ、なんですか？」

その真剣みを帯びた口調に、私は掃除する手を休めてまっすぐに里香さんを見つめた。

「…その、こういう事を聞くのはルール違反…というか、本当は自

分で考えなきゃいけない問題だと思っんですが、私じゃどんなに考えてもわからなくて…」

なかなか聞く決心がつかなかったのか、聞き取るのが少し難しいほど小さな声でうつむきながらブツブツと言っていた里香さんですが、やがて決意したかのように私の目をまっすぐと見て、

「…ミクさん、どうして私の事を敵視してるんですか？」

そう、聞いた。

決まっています。私の出番をとっちゃうからですよ。私はそう言おうと口を開いて…すぐ閉じた。何故だか、それは本当の理由じゃない気がした。

…いえ、本当の理由じゃないわけじゃないんです。私の出番をとってしまうのはもちろん納得いきませんし、腹も立っています。だけど、なんとなく、漠然と、自分が怒っている最大の理由ではない気がしたんです。

「…」
「…」

何も言わない私を、里香さんはまっすぐに、真剣な眼差しで見つめてくる。そんな真剣な彼女に、私は嘘をつきたくなくて…。

「…理由は、自分でもよくわからないんです」

気付いたときには、自然に口が動いていた。

「少しだけ、本当に少しだけですけど、出番をとられてしまうからという理由もあると思うんです。でも、マスターから里香さんが

来るって話をされたときには別になんとも思いませんでした。むしろ、その時点では、家が賑やかになると思って嬉しかったんですよ」

私の言葉を、遮ることなく静かに聴いてくれる里香さん。私は続ける。

「ただ、いざ来てみると…なんていうか、ちょっとイライラしちゃって。今はどうしてか、そういう事は全然ないんですけど、昨日の夜とか、今朝とかに、何でかわからないんですが…。里香さんの事は…正直に言います、好きですよ。でも、なんだか時々、何故か嫌で…」

「…ひよっとして、ミクさん」

今まで黙っていた里香さんが、そこでようやく口を開いた。そして、

「お兄ちゃんの事、好きなんですか？」

まるで予想だにしていなかった結論を出した。

「…へ？」

随分と間抜けな声を出してしまった気がする。おまけにさっきまでのちよっとシリアス気味だった雰囲気も一気に霧散してしまった気

がする。

「だって、ミクさんがイライラしたのって昨日の夜と今朝でしたよね？」

「そ、そうですね…」

「それってどっちも私がお兄ちゃんと一緒にいた時間ですよ？」

「…え、それが何でそういう結論になるんですか？」

「私がお兄ちゃんと一緒にいたから嫉妬したのかと思ったんですけど…違いましたか？」

「そ、そんなわけ…っ！」

「そんなわけない」という言葉は、何故か最後まで言う事は出来なかった。

私？マスターの事が好き？あの意地悪なマスターを？イライラしてたのは嫉妬してたから？

「ミクさん？大丈夫ですか？」

「…ふえ！？」

混乱しているところにいきなり声を掛けられたせいで、思いつきりわけずってしまった。おまけに思考も強制中断してしまった。

「お兄ちゃんの事、好きなんですか？」

「っ！そ、それは…あう…！」

答えられなかった。わからない。わからないけど…何故か、か、顔が物凄く熱い…。お、オーバーヒートしてしまいそうです…！考えがうまくまとまらない頭で、

「よ、よく、わからない、です…！」

そう答えるのが、やっとだった。

「み、ミクさん？大丈夫ですか？何か顔が真っ赤ですけど…」

「だ、大丈夫です！と、とにかく！わ、わかっただけ欲しいのは、別に里香さんの事が嫌いってわけではないって事です！それだけはわかっただけです！こ、これしか言えなくて申し訳ないですが…」

「そ、そんな！嫌われているわけではないってわかっただけでも十分です！ありがとうございます！」

そんなわけで…なんだかよくわからない結末でしたけど、とりあえず里香さんと和解する事は出来た気がします。

ただその後、掃除をしている間も食事を用意している間も、マスターの顔が私の頭を離れる事はありませんでした。

第31話 和解？（後書き）

更新が遅れてしまった言い訳を少しさせて下さい。今回に限っては、「遊んでいた」とか「やる気が出なかった」とかそういうしょーもない理由じゃないんです。

実は前回の更新の少し後に書き始めたんですが、何故か書くにつれてミクさんがどんどんヤンデっぽく、というかなんか嫌な性格になっていってしまってます。「こんなのミクじゃない！」と思い何度も書き直したんですが、何度やっても可愛く書けなくて…。

それで二週間ほど悪戦苦闘して今ようやく、自分でもそれなりに納得のいけるものが書けたので、こうして投稿させていただきました。あれ、これって結局「しょーもない理由」じゃね？…と、ともかく、作者の個人的な理由で今回更新が遅れてしまい、本当に申し訳ありません。

それから、明後日から3日ほどキャンプに行ってくるのでまた一週間ほど間が空いてしまうと思いますが、どうかご了承ください。

さて、長々と失礼しました。こんな自分勝手な作者ですが、これからもお付き合いいただければ幸いです

第32話 ボーカロイドの願い（前書き）

七夕間に合わなかった…。というわけでどうも、この頃更新速度の低下が悩みの作者です。だって…スーパーストリートファイターⅤが面白すぎるんだもん…（ホントにごめんなさい、ここ最近それほどばかりやってみました…）

あ、イラストつきです。時間かけなかったんで相変わらず超適当ですが。

第32話 ボーカロイドの願い

…どうもこの頃、我が家の女性陣二名の様子がおかしい気がする。まず一つ目。

「んみゆ…おはようございます…」

「あ、ミクさん。おはよー、よく眠れた？」

「…」

ミクはまだ寝ぼけているのか、コクコクと頷くだけで返事はしない。

「顔洗ってきたら？目が覚めるよ？」

「…はあい」

そう一言だけ返事をして、ミクは洗面所に向かった。

…これが一つ目。何か妙にミクと里香の仲がいい。…まあ今のはミクが半分寝てる状態だったから微妙に伝わらなかつたかもしれないけど、里香が自然にタメ口で話せてた事でそれなりにわかつてもらえただろう。最近ずっとこんな調子で仲良さそうにしてる。

いや、全然いいと思うよ？最初の二日のあのギスギスした感じに比べたら何万倍もいい。…でもさ、人がいない間に急に仲良くなれると何か釈然としないというか、納得できないというか、とにかく妙な気分になるんだ。

当然この事を里香に聞いても「別に何も無いよ、ちょっとお話をしただけ」何て言って教えてくれない。まあ二人の間で問題が解決してるならいいけどさ、今はもっと困った事があるし。

そう、その困った事こそ、おかしい女性陣の様子その二。

「ふう、さつぱりしました。里香さん、おはようございます」

「うん、おはよう」

「何で里香オンリー？俺への挨拶はどうしたコラ」

「あ、ま、マスター…お、おはようございます…」

キッチンで朝飯を作ってる俺が会話に参加した途端、ミクの様子がおかしくなった。何か妙に顔が赤いし、うつむいて俺の顔見ようとしないし。

…というわけで見てわかるとおり、これが不思議その二。里香とは初日と比べてビックリするくらい仲良くなった反面、何か俺の事を避けるような行動をとる事が多くなった。学校から帰ってくると「しばらくその辺りを散歩してます」とか言う書置きをテーブルの上に残して夕飯ギリギリまで帰ってこなかったり、朝起きても俺と里香が登校するまで居間に降りてこなかったり。今日みたいに寝ぼけてるときは降りてくるけど、俺が挨拶してもロクに会話も出来ないまま上の自室（旧・俺の部屋）に帰ってしまう。「今日もそうなるのかなあ…」なんて思いつつ、会話を続けた。

「ん、おはよ。朝飯どうする？俺はご飯、里香はトーストにするけど」

「そ、それじゃあご飯をお願いします…」

おろ、これは意外。てっきり「お腹空いてないんで、今日のご飯いいです。上の部屋にいたので何かあったら声をかけて下さい」とか言われるかと思ったけど。全然オツケー、むしろウエルカムなので「了解」と返事をしてフライパンに向き直る。ご飯かパンか、なんて聞いたけど、どっちも目玉焼き乗せて食べるだけだからどっちだろつとやる事は変わらない。卵を三つパックから取り出し、あらかじめ油をひいたいたフライパンの上で割る。と、そこまでやったところで思い出した。

そういえば今日って七夕じゃん。7月7日。

ここ数年は何もしなかったからすっかり忘れてた。今年はミクも里香もいるし、せっかくだから短冊でも書くか。葵とか海翔もついでに呼んで。うん、まあ悪くないイベントだろう。

というわけで、善は急げだ。早速今ここにいる二人の予定でも聞いておこう。

「そっだ、二人とも今日なんか予定あるか？」

「え？今日は…特に何もないかな。ミクさんは？」

「わ、私ですか？暇、ですけど…な、何かするんですか？」

「いやさ、今日って七夕じゃん？せっかくだから短冊でも書いて飾ろうかと思って」

「あ、なるほど。でも笹なんてこの近所にあるの？」

「電車で30分くらいのところ雑木林的なところがあるからそこに行く。笹があるかどうかは知らんけど」

「葵さんと海翔さんも呼ぶんですか？」

「ああ。ひよっとしたらあいつらは家族と一緒になんかやるかもだけど、一応声はかける」

それを聞いたミクがホッと胸を撫で下ろすのを、俺は見逃さなかった。…なんだよ、俺が何かしたのかよ？そう露骨にされるといくら俺でも傷つくんだぞチクシヨウ…。

とにかく、俺たち三人は行くの決定。あとは葵と海翔だな。後で電話してみるか。

？
？

さて、そんなこんなで、現在時刻午後6時。雑木林には、俺、ミク、里香、葵、海翔の五人が集結していた。

「来たはいいけど、そう都合よく笹なんて見つかるかしらね…」
「無理に笹を探さなくてもいいんじゃない？僕は笹つぼいのがあればそれで代用すればいいと思うけど」

朝食を終えた後に二人に電話してみたところ、特に何も用事はないということだったので、全員夕方に我が家に集まる事になった。そこから駅から電車で揺られる事30分、さらに歩いて10分。俺たち五人は現在こうして植物に囲まれていた。

「お、これなんかどうだ？笹かどうかはわからんが、それつぼいだろ」

たまたま近くにあつた笹つぼい植物を指で指す。

「いいんじゃない？じゃあこれにしましょうか。異論は？」

「ない」

「ないよ」

「お兄ちゃんがないなら、私もないです」

「む…。ま、マスターがないなら、私もありませんっ」

三者三様…いや、四者四様(?)に答える。…なんか後半二人の答え方が凄く微妙だけど、まあいいや。

さて、笹(飯)も決まったことだし、とつとと短冊飾って帰るか。何か蚊も多いし蒸し暑いし、正直早く帰りたい。…発案者だからそんな事死んでも口に出せないけど。

「全員短冊持ってきたな？」

「……はい」「……」

「じゃあそれぞれ好きな場所に飾ってよし」

俺の言葉を合図に、全員が思い思いの場所に移動する。まあ笹（仮）も大した大きさはじゃないので、結構密集してるけど。

「さてと…俺も飾るか」

バッグから用意しておいた短冊を取り出し、笹に結びつける。葵なんかは2、3枚結んでいるが、俺はそんなに欲張りじゃない…もとい、特に「願い」というものがなかったので、適当に1枚だけ書いて持ってきた。

結び終えて一息ついてみると、ミクが精一杯背伸びをして笹（仮）の一番高いところに結ぼうとしている姿が目に入った。「…なんであんな無理して高いところに？」と不思議に思いつつ、手を貸してやろうと近寄る。

「なにやってんだお前？」

「うわわわわわ！？ま、まままマスター！？」

俺が声をかけると、ミクの体が「ビクウツ」と跳ねた。そのまま慌てて振り返りつつ、手に持った短冊を背中に隠す。

「…えっと…ゴメン？」

俺は俺でどうしていいかわからず、とりあえず謝ってしまった。まあ驚かせてしまった事に対する謝罪って事で間違っではない…？よな？

「い、いえ、こちらこそ…。そ、それで、どうかしましたか？」

「あ、そうだった。何かお前が高いところに短冊を結ぼうとしてたから、手伝ってやろうと思って。ホレ、短冊貸してみ」

「えっ！？い、いや、それは…」

「ん？」

「だ、大丈夫です！一人で出来ますから！」

「いや、だって出来てなかったじゃん」

「ほ、ホントに大丈夫ですって！」

「いやだから…」

「ひ、ひとりでできるもん！」

「短冊で料理か、新しいな…じゃなくて。何でそこまで頑かたくに手助けを拒むんだよお前は…」

「そ、それは…その…」

「その？」

「…と、とにかく大丈夫ですってば！自分のお願い事なんですから、自分でやりたいんですよ！」

「…はあ。わかったよ、好きにしろ。怪我だけはしないようにな」

「あ、ありがとうございます…」

… あんなに嫌がることないじゃんか、俺だってへこむんだぞ…。

それともあれか、「願い事を見られるのが恥ずかしい」とかそういうことか？まあそれなら納得できるけど…でもミクの願い事って「早く歌えるようになりますように」とかそんなんだろ？別に恥ずかしがる夢じゃないような…。

… ってことは、やっぱり避けられてるか、もしくは嫌われてるか、か…。

「…何かしねえとなあ…」

ため息混じりに呟きつつ、他の三人の様子を見るために歩き出した。

？
？

「…はあ、またやっちゃいました…」

ため息と一緒にそんな言葉を吐き出す。マスター、なんだかションボリしてましたよね…悪い事しちゃいました。

里香さんと仲直りした日からずっとこんな調子です。なんだかマスターの顔がちゃんと見れなくて、ちゃんと話せなくて、素直になれなくて…どうしちやっただんですかね、私…。ホントは今よりもっと仲良くなりたいのに…。

「…で、でも今のはしょうがないですよね。こ、こんな願い事、マスターに見せられるわけありませんし…」

そう誰にもなく呟きつつ、今まで後ろ手に隠していた短冊を見る。

> i 2 6 9 8 3 — 2 1 8 6 <

『これからずっとマスターと一緒にいられますように』

…『早く歌を歌えるようになりますように』とか書かないなんて、私ったらボーカロイド失格ですね。でも…。

「…ふふっ」

何ですかね、歌えるようになる事よりも何よりも、今はこれが私の一番の願いです。

「叶うといいなあ…」

誰にも聞こえないよう小さな声で呟いて、私は再び、誰にも見られ

ないようには、一番高いところと結び付けようと言闘を始めるのでした。

第32話 ボーカロイドの願い（後書き）

…非常に言い難いことなのですが。

明後日からデイズニールドに一週間ほど行ってきます。ごめんなさい！ただでさえ更新ペースがえらいことになってるのに、最低一週間はまた更新できませんっ！本当にごめんなさい！！

第33話 鏡…音…？（前書き）

ごめんなさい！ネットがしばらく使えなくなったりドリーミーシアター2をやったり日本入学校の夏期講習のボランティアをしたりイラストの練習をしたり色々やってたら小説を書く時間が割けなくて、気がついたら一ヶ月以上更新停滞という体たらく…。本当に申し訳ありませんでした！

な、何はともあれ、本編をお楽しみ下さい…。（挿絵あります。最近挿絵率が高いなあ…）

第33話 鏡…音…？

「マスター、いい加減に起きてくれませんか？」

「眠い〜、起きたくない〜…」

「バカな事言つてないで起きてください、リビングのソファでいつまでも寝られるととてもなく迷惑なんですよ」

「う〜、わあつたよお…」

ミクがうちに来て以来、未だに俺がソファに寝ているという衝撃の事実を明かしたところで、現在状況の説明を。

今日は土曜日、時刻は11時。休日はこれくらいの時間まで寝てる事もあるから、普段はミクも特に何も言わないのだが、今日に限っては事情が少し違った。

「ふあ〜…」

「そんなだらしなくあくびしてる暇があったら顔でも洗ってきたらどうです？今日はお客さんも来るんですし」

「ん、そうする…」

まだ重いまぶたを擦りながら洗面所へ。そう、何を隠そう、今日は珍しいお客さんがくる予定なのだ。

軽く顔を洗って、再びリビングへ。そこには…。

「ミクさん、この前私が買ってきたジュースって冷蔵庫のどこにあったっけ？」

「確か上から三番目、右側の扉にあったと思いますけど」

「あ、ホントだありがと。あとついでにプリンもどこかわかる？」

「プリンは…どこでしたっけ？ちょっとわからないです、ごめんなさい」

「そっか、うーん…どこやったっちゃったっけなあ…」

里香がなにやら冷蔵庫を漁っていた。何か困ってるみたいだったから、とりあえず助け舟を出すことに。

「プリンは上から二番目の一番奥に移しといたぞ、色々出すのにちよつと邪魔だったから」

「え？あ、お兄ちゃん、おはよー。上から二番目の奥…あ、あった！ありがとー！」

…とまあご覧の通り今日の里香はテンションが高い。里香は俺に礼を言つて、冷蔵庫からプリンとジュースを取り出してテーブルに並べていく。

しかし、なんだか妙な気分だな。感慨深いといつかなんと云うか…。

「…里香の友達がもううちに来るなんてなあ…」

？
？

二日前。俺が学校から帰つてくると、制服姿の里香がリビングのソファーに座つてテレビを見ていた。熱心に見ていたのは…料理番組。「あ…。まあ我が家で料理が出来ないのは里香一人だけだからなあ…」なんて脳内で呟いてから、挨拶を忘れていた事を思い出して慌てて挨拶。

「ただいまー」

「あ、お兄ちゃんおかえりー」

俺が声をかけると、里香はテレビを見ていたにもかかわらず、わざわざ振り向いて笑顔で挨拶を返してくれた。…ちくしょう、我が妹

ながら可愛らしい事しやがって。

「あ、そうだお兄ちゃん、ちょっとお願いがあるんだけど」

「ん？ああ、何？」

「えっと…実はね、今日学校で…」

「…あ、そつかお前ももう学校行ってるんだっけ」

「忘れてたの!？」

「忘れてた、すまん」

「何で忘れてたの!？っていかどうして忘れられるの!？今だつて私制服着てるのに!？」

「いや、何かなんとなく忘れてた」

「…そつか、お兄ちゃんにとって私ってその程度の存在なんだね、学校に言ってる事も忘れるほどどうでもいい存在なんだね…」

あ、拗ねた。敬語とかはかなり抜けたんだけど、このネガティブな感じは未だに時々発動するな…。まあ敬語がなくなっただけでも相
当な進歩だとは思っけど。

さて、からかうのはほどほどにして、何とかして里香を励まして話を進めよう。

「冗談だって、冗談。さすがにそこまで薄情じゃないって」

「…ホントに？」

「ホントだって」

「…私どうでも良くない？」

「良くないよ」

「…えへへ」

…目に涙を浮かべながら頬を染めて喜んでいる。なにこの可愛い生物。

「それで？」

「あ、うん。今日学校で友達と話してたらさ、今度うちに来たいって言ってくれたの。だから今度うちにご招待してもいいかな？」

「お前友達いたの!？」

「お兄ちゃんなんか嫌いだああああ!!」

…いかん、マジで驚いてしまった、里香がマジ泣きし始めた…。

いや、だって里香ってものすごく人見知り激しいイメージあったから、てつきりまだ友達って呼べる人は少ないのかと…。

と、とりあえず何とか里香に謝って慰めないと…!

? ?

…あの時は大変だったなあ…。確かあの後3時間以上一言も口聞い
てくれなかったんだっけ…。

とまあそういう事があって、今日里香の友達を呼ぶ事になったのだ。
名前は…何て言ったかな?なんだか妙に聞き覚えがある名前だな、
とは思ったけど、ド忘れしてしまった…。

「なあ里香、お前の友達の二人っていつ頃来るって行ったっけ？」

「え? そうだなあ…もうそろそろ来ると思っけど…」

とその時、机の上に置いてあった里香の携帯から(メールか電話かはわからないが)着信音が鳴った。里香は慌てて携帯に駆け寄り、画面を確認する。どうやらメールが来たらしい。

「もうすぐそこまで来てるみたい!外出て待つてていい!？」

「ああ、いいぞ。じゃあ俺は二階の部屋にいるから」

「私も上にいるので、何か御用があったら声かけてくださいね」

「え、二人ともなに言ってるの?二人も一緒に行こうよ」

「…は? いや、だってお前の友達だろ？」

「そうだけど、二人の事も話したら会ってみたいって。だから一緒にいて、お願い！」

…ふむ、妹つてのは「友達が来るとき兄は邪魔」という思考をする生物だと思ひ込んでいたのだが…まあ数ヶ月前まで妹じゃなかったからその辺少し違うのかもな。

「…まあお前が嫌じゃないならいつか。ミク、お前は？」

「えっと…マスターが残るなら私も残る事にします」

「なんだそりゃ…まいいや、じゃあそういう事になったから、とりあえず外行くか」

「やった、ありがとー！二人とも大好き！」

一緒にいると言っただけなのにこんなに喜べるのは凄いなあ、つい二日前「嫌いだああああ！」と泣きながら叫んだ奴と同一人物だとは思えない。

というわけで、俺、ミク、里香の三人は玄関前で里香の友達二人を待つて待機中。…ミクが私服じゃなく（本人曰く）制服なのでかなり目立つが、まあすぐ来るといふ事なのでかまわないだろう。

「…あ、来た！お〜い！鈴ちゃん、蓮くーん！」

不意に、里香が声を弾ませて手を振り出した。そうだ、二人の名前は鈴と蓮だった。ミクと二人で里香が手を振っている方向を見ると…

> i 2 8 9 9 1 — 2 1 8 6 <

…なんか。

「いらっしゃ〜い！待ってたよ〜！」

「きゃー、里香ー！」

「リン、そんな走んなくても里香は逃げないって…。すこしは落ち着きなよ…」

…見覚えのある二人組みが、里香と楽しそうにはしゃいでるんだが…。

横目で隣のミクを見ると、あんぐりと口を開けて呆けている。…やつぱり俺の見間違いってわけじゃないよな…。

「…なあミク、あいつらって…」

「…マスターも気付きました？」

「…そりゃあ…なあ…」

「二人とも！そんなところに立ってないで、こっち来てお互い自己紹介自己紹介！」

里香が凍り付いている俺とミクを「こっちこっち」と手招きしている。俺は少し…いや、かなり、いろんな意味で緊張しながら里香たちの方へ近付く。そんな俺の様子を見てミクも勘弁したのか、俺の後について歩いてきた。

「…初めまして。里香の兄の千歳奏です。いつも里香がお世話になってるようで、どうもありがとうございます」

「…えっと…初め、まして？ボーカロイドの初音ミクです」

「あ、はい、初めまして！今日はお招きいただきありがとうございます！…ざいまず！僕は鏡野蓮で…」

「え？」

「こっちが、姉の鏡野鈴です。よろしくお願いします！」

「ちよっとレン！『こっち』って何よ！ちゃんと紹介しなさい！」

「じ、自分でやればいいだろ！？」

急にいい争いを始めた二人。その様子を見て苦笑しながら仲裁に入る里香。なるほど、里香が特に困った様子を見せてないって事は、この二人がこんな様子で言い争うのはいつもの事って事か…。ってイヤイヤ、そんなことより…。

…え、鏡…野？鏡音じゃなくて？

第33話 鏡…音…？（後書き）

前書きにも書いたとおり、色々遊んでいて更新を怠ってしまいました、ごめんなさい…。ネタに多少詰まったというのも理由の一つだったりするんですが、やっぱり遊んでいたのが最大の理由で…本当に申し訳ありませんでした。次いつ更新できるかはわかりませんが、一週間以内には何とか…！

第34話 鏡野姉弟（前書き）

今回少し短めです。長くして更新ペースが落ちるよりは短くして更新ペースをあげたほうがいいかなあと思ひまして。

第34話 鏡野姉弟

「そういえばレン、あんたお菓子ちゃんと持ってきた？」

「え？いや、持ってきてないけど？」

「はあ！？何で持ってこないのよ、人の家にお邪魔するんだからお菓子持ってくるのなんて常識でしょ！？」

「お、俺だって持ってこようと思ったけど、里香がいらないって言うから…！」

「いらないうって言われても持ってくるのが普通でしょ！？まったくもう、なにやっつてんだか…！」

「だ、大丈夫だよリンちゃん、本当に良かったからそんなに怒らないでっ！」

呆然としている俺とミクの前で口論を続ける鏡音…じゃなくて、鏡野姉弟^{きょうのだい}。そしてその仲裁に入る里香。「…里香も友達の口喧嘩を仲裁できるくらい明るくなったんだなあ…」なんて感動（この場合は現実逃避とも言つ）していると、

「…あの、ちょっといいですか？」

とか細い声で呟きながら、おずおずと手を挙げるミク。それに気付いた年下三人組は視線をミクに向けた。

「ん？ミクさん、どうしたの？」

「…えっと、その、ちょっとハツキリさせたいんですけど…」

「？」

「…その、お二人は…鏡…野…さん、なんですか？鏡音さんじゃないって？」

ついに我慢できなくなったのか、ついにミクがその疑問を口にした。そうなのだ。もう皆様お気付きだと思いが、この鏡野姉弟、ミクの弟・妹にあたるボーカロイド、鏡音リン・レンにそっくりなのだ。金髪だし、目も青いし、双子だし…。

すると二人はその質問に対し、少し困ったように笑い、

「あゝ、まあ絶対言われると思った…」

「まあこれはもう慣れっこだよね、恒例行事みたいな感じだし」

となんだかよくわからないことを互いに言い合った後、男の子の方（確かレン君…だったかな？）がこちらに向き直って、

「言いたい事はよくわかります。僕たちがボーカロイドの鏡音リンとレンに似てるって事ですよね？」

「え、あ、はい、似てる…って言うか本人じゃ…？」

「残念ながら違うんです」

レン君が苦笑まじりにそういうと、それに続いて、

「あたしたちは人間よ、真正銘。ボーカロイドじゃないわ」

リンちゃんも会話に参加してきて、鏡野姉弟ボーカロイド説を否定した。しかし、それでもミクは引き下がらなかった。

「で、でも二人ともそっくりですし、お名前だって…！」

「それが色々あってね…」

リンちゃんがため息と共に語りだそうとした時。

「…って言うかさ、皆そろそろ中入らない？いつまでも玄関前で立

ち話つて言つのもなんだし…」

という里香の一言によって、この話題は一時中断になった。とりあえず二人を家に迎え入れ、里香が用意してあったプリンとジュースを頂く事にした。

? ?

「あたしたちの親がね、大の鏡音ファンだったのよ」

全員がお菓子を食べ終えてから改めて鏡野姉弟と鏡音姉弟を聞くと、二人はいきなりため息を一つついてから切り出した。

「僕たちの家族は生まれつき地毛が金髪だったのと、僕とリンが双子として生まれてきた事が災いして、両親は僕たちにそれぞれ『リン』『レン』って名前をつけたんです」

「な、なるほど…」

「で、それだけならまだ良かったんだけどあたしたちもなんか調子に乗っちゃって、髪型とか似せてみたりコスプレしてみたりしてるうちに周りの人から『ボーカロイドなの?』って聞かれるようになったのよね…」

…いや、いくら髪型似せたりコスプレしたりしたってここまでそっくりにはならないだろ。第一今日は二人とも普通に私服だし。

「でもいいじゃないですか、学校とかでも有名になったりしないんですか?」

「まあ有名ではあるんだけど…」

「そんなにいいもんでもないんですよ。学校入学手続きのときに『ボーカロイドを入学させるのはちょっと…』とか言われて断られか

けたり、クラスで未だに僕たちがボーカロイドだって信じてる人たちに歌を歌って欲しいってせがまれたり…」

「そ、それは…た、大変ですね…」

「ま、あたしはこの名前嫌いじゃないけどね。なんだかんだでちやほやされるのは好きだし、鏡音リンってキャラクターも好きだし」

「僕も結構好きですよ、『レン』って名前なんだかカッコいいですし、ボーカロイドのレンが歌ってる曲も結構好きですしね」

「む、真似しないでよ」

「ま、真似なんてしてないだろ？俺は自分の感想いっただけじゃないか！」

と、また姉弟喧嘩が始まりかけたところでまた里香が仲裁に入った。…なんだかんだでいいトリオなんじゃないだろうか、この三人。

さて、まあその後は特に何をするわけでもなく、しばらく学校での里香の様子や鏡野姉弟の話、それから俺やミクの話をした後、普通時間が来て普通に家に帰っていった。

鏡野姉弟、か…。うん、面白い奴らだな、また今度一緒に遊べるか誘ってみるかな。

第34話 鏡野姉弟（後書き）

里「…私の友達が来る話だったのに、私の出番がほぼ皆無だった…」
奏「げ、元気出せって！次の機会に期待しようぜ！」
ミ「そ、そうですよ！そんな落ち込まないでください！」
里「…グスン…」

…落ち込みまくってる里香さんは二人に任せて、少し嬉しいお知らせでも。

実はこのたび、この小説をお気に入り登録して下さっている方々の数がとうとう500人を突破いたしました！

さらに、ユニークアクセス数が5000人を突破いたしました！

さらにさらに、PVアクセス数が（あと1000人弱で）50000人を突破いたします！

一ヶ月放置しているうちに、嬉しい事が三つも重なって…なんともいえない微妙な気分です。もちろんめちゃくちゃ嬉しいんですが、出来ればコンスタントに更新できているうちに達成したかったかなあ…なんて思ったりしちゃって…。まあそれは自業自得ですし、素直にこの事実を喜びたいと思います！この作品を読んでくださっている皆様、本当にありがとうございます！これからも生暖かい目で見守っていただければ幸いです

skype始めました。

skype：Yoshoki4869

ほとんど需要ないかもなんですけど、せっかく作ったから載せておこ

うかと。チャットとか通話とかウェルカムですよ

第34・5話 番外編！第一回ミクラジ！！

「え〜、皆さん！おはようございます、こんにちは、こんばんは！初音ミクです！」

「こんばんは、そのマスターの千歳奏です！」

「今回は番外編です！」

「PVアクセス50000越え、ユニークアクセス50000越えを祝しまして！」

「「かんぱ〜い！！！」」

「いや〜、なんだかんだでこの小説も随分続いてるよな、思いつきで始めたシリーズにしては」

「ホントですね〜、私たち頑張ってますよね」

「今んところ全34話、文字数約87000、読了時間約175分。いや〜、中々頑張るな俺たち」

「って違うだろお前らっ！！」

「あ、スーパーマスター、もとい作者さん。どうしたんですか、スーパーマスターも乾杯しましょうよ」

「スーパーマスターって何！？」

「マスター含めてこの物語を書いてる方なので、スーパーマスターです」

「語呂悪すぎだろ！って言うかそうじゃなくて、何で乾杯してんだお前ら！？何自画自賛してんだお前ら！？何か違っただろ！？」

「…自画自賛は作者さんなんじゃ…」

そこっ！うるさいっ！

「違うないだろ、めでたいじゃん？めでたいときは乾杯するだろ？」

だから違うだろ！…いや、違うないけど、今やる事ではないだろ！
舞台裏でやれ、舞台裏で！

「舞台裏って…そんなものあるんですか？マスター知ってます？」
「知らん」

お前らもう少しさあ…こう、読者の皆様に感謝しようとかそういう
気持ちはないわけ？

「サンキュ」

「ありがとうございます」

「…というわけで、かんぱーい！！」

待て待て待て！！

「何ですか、ちょっとやかましいですよ？」

「…たく、せっかく楽しく宴会しようと思ってるのにさあ…空気読
めよ…」

…お前ら俺が作者ってわかってるよな？

「もちろん」

「一応はわかってますが」

…普通はさあ、「書いてくれてありがとう」とか感謝するんじゃない？

「…」

「…」

「「アリガトウゴザイマース」

…ああ…わかってたよ、そういう反応するだろつなって予想はしてたよ。でも実際やられると…普通に凹むな。

「…なんか作者さんめんどくさいです」

「…」

泣くぞっ!?!?

「…さて、冗談はこの辺にしておくか」

「そうですね、あんまりやって作者さんにホントに泣かれるのもめんどくさいですし」

…。

「あゝ、ほら拗ねんな拗ねんな。ちゃんと台本どおりやってやるから」

「…マスター、台本とか言っちゃっていいんですか?」

「いいんじゃない?」

…で、真面目にやるんだな?

「やるよ、やるから機嫌直せって」

…誰のせいだ。

「さ、さて！それじゃあ気を取り直して！」

「皆さんおはようございます、こんにちは、こんばんは！初音ミクですー！」

「ども、そのマスターの千歳奏です！」

え、そっから！？

「さてさて、今回は特別編です！」

「PVアクセス50000越え、ユニークアクセス50000越えを祝しましてー！」

「「かんぱーいー！」「」

…え、結局乾杯すんの？

「乾杯はしたほうが雰囲気も盛り上がるじゃないですか」

「そうそう、テンション上げてかなきゃこんな企画やってられな…
もとい、テンション上げたほうが楽しいだろ？」

今なんかさらりと本音を漏らしやがったな？

「気のせいだろ」

「そうですねよ、こんなめんどくさ…じゃなかった、楽しいイベント
なんですから！」

…お前らそんな嫌なら何で来たんだよ？別の奴呼べばよかつたら、
里香とか海翔とか葵とか。最近はリンもレンもいるんだからそいつ
ら呼ぶのもありだろ。

「そりゃ俺だつて交代できるなら交代してえよ、こんな企画めんどくせえ」

おい。

「でもさあ、里香は鏡野姉弟と遊びに行くらしいし、葵と海翔は勉強だか買物だかで忙しいとか言ってたし…」

「いいですねえ、私たちがこうやって作者さんとダラダラ喋ってる間に、皆さんは楽しく遊びに行つてたりお買い物に行つてたり…羨ましい限りです」

「それに比べて俺らはこいつとこんなしょーもない企画に巻き込まれて…普通に死にてえ」

楽しいか！？お前ら俺をいじめて楽しいか！？

「いや、別にいじめてるつもりないし」

「…え、マスターそれ本気で言ってます？え、いじめてたんじゃないんですか？」

「え、別に何もいじめてないだろ？」

「…作者さん、ごめんなさい。何かホントにごめんなさい。まさかマスターがここまでドSだとは思いませんでした…」

…なんだかんだでミクはやっぱり優しいんだな…。

「そ、そんな事ないですよお！」

さすがミク！みんなのアイドル！

「もう、別に褒めても何も出ませんよ」

大好き！天使！歌姫！

「何回も何回もうざいです作者さんっ！！」

このタイミングでキレんの！？え、数行前まで超上機嫌だったじゃん！？

「褒められすぎると何か嘘っぽく聞こえて嫌なんですよ！あとそっやって褒めまくる人って気持ち悪いです！」

…悪かったよう、そんな怒んなくてもいいだろお…。

「…えっと、わ、私も怒りすぎましたよ。褒めてもらったのに怒るのはダメですよね、ごめんなさい」

いや、ミクが謝ることじゃ…って、あれ？

「？…どうかしましたか？」

…奏は？

「…え？」

…さっきまでいたよな？あれ、どこいったんだ？

「…逃げた…んですかね？」

…あんの野郎、なんつー無責任な…。

「…すみません、作者さん。マスターには後で私がきつく言っておきますから…」

ああ、別にミクが謝ることじゃないけどさ…。と、とにかくそろそろ締めるか。

「そ、そうですね！そ、それじゃあ読者の皆さん！なんだかグダグダで趣旨を見失った回になってしまいましたけど、少しでもお楽しみただけましたでしょうか？」

なんだか今から黒歴史になってしまふ感がバリバリですが、読者の皆様に日ごろの感謝をこめて、頑張りました！

「これからも頑張って更新していくので、どうか見捨てないでくださいね」

それでは皆様！本当にいつもありがとうございます！

「これからもどうぞよろしくお願いします…！」

ではでは…！

第34・5話 番外編！第一回ミクラジ！！（後書き）

番外編つぼさを出すために、今回あえて前書きを書かないでみました。

さて、皆様いかがでしたでしょうか？PV50000ヒット記念、ユニーク5000ヒット記念企画の、ラジオ形式での番外編！ひどい黒歴史の匂いがしますが、ぶっちゃけ書いてて超楽しかったです！！

あ、ちなみにタイトルにノリで「第一回」とか書きましたが、第二回があるかどうかは未定です、って言うか多分ないです。次回からは普通の話に戻りますので、それもお楽しみに！

第35話 歌わない歌姫（前書き）

ミクさん誕生日おめでとおおおおお！…まあお話の内容がそれに
ふさわしいかは不明ですが…

というわけで今回超気合入れました（6500字以上！）

第35話 歌わない歌姫

ピンポン

「あ、はい」

ソファーから身を起こし、玄関に向かう。現在ミクはお使いに、里香は鏡野家に遊びに行ってる。お泊り会らしく、里香は明日の朝まで帰ってこないそうだ。

つまり家には現在俺しかいないわけで、訪問者には俺が対応するしかないわけで…要するにあれだ、めんどくさい。

「しかしミクの奴、お使いとはいよいよホントに家政婦っぽくなってきたな…」

まあミクが自分から言い出したことだし、あいつがそれでいいならいいけどさ。

「…そろそろちゃんと曲作ってやるかなあ…」

誰にともなく呟いて、玄関を開ける。インターホンを鳴らした主は宅配便で、小さな小包を受け取った。

「しかし誰からだこれ？俺は別に通販で何も頼んでないから…里香かミクか？」

ふと差出人の欄を見ると、そこには随分前に聞いた会社の名前が記入してあった。

『クリプトン・フューチャー・メディア株式会社』

「…って事はもしかして」

開けて中身を確認すると…青緑色の、ディスクが入っていた。

？ ？

「…さて、どうしたもんか」

俺は片手でCDケースを弄りながら呟く。

待ちに待ったディスクがようやく届いたんだからとつとインストールすればいい話なんだが、同封されていた手紙を読んで、俺は悩んでいた。

3ページ半もあるので全部は説明しないが、要点だけを述べるとこうだ。

・まずは遅れに遅れてしまった謝罪。まあ電話したときは2ヶ月と
か言ってたからなあ、別にどうでもいいけど。
・次に使用方法。これは初めてやった時と違いはほとんどなく、確
認のためだけの文章のようだ。

・最後に、8月31日、つまり今日がミクの誕生日だということ。
正式な誕生日というわけではないが、何でも発売日が8月3
1日だったのでファンたちの間でそう決まったらしい。どうやら「
誕生日プレゼントとしてこのディスクを見せればいいのでは？」と
いう提案らしい。

そして、最後の最後に、「追記」として、実に簡潔な一文が添えてあった。

『なお、このディスクをインストールする場合、現在使用している初音ミクの全データは初期化されますのでご注意ください』

…つまり、このディスクを使ってミクが本来のボーカロイドの機能を取り戻すためには、彼女の記憶やら何やらをすべて犠牲にしなければならぬってことだ。

もちろん俺の答えはノーだ。今更言うまでもない事だが、俺はミクに歌わせる事にそれほど執着しているわけでもない。俺とミクの今までの関係をすべてリセットしてまで彼女を歌わせる理由はどこにもない。…まあ多少残念ではあるけど。

ただ…もしもミクが歌う事を望んだら…俺はどうするべきなのか。ミクの気持ちを尊重して望み通り再インストールしてやるべきなのか、それとも俺のワガママを通して再インストールを拒むべきなのか…。

「…ケーキ買ってこよ」

とりあえず考えるのは後だ。まだミクが再インストールを選ぶって決まったわけじゃないんだから、悩んでてもしょうがない。それよりもまずは誕生日を祝う準備をしてやらないと。当日に出来る事なんてたかが知れてるけど、やらないよりマシだ。当日に出来る事なさてと、うまいケーキ屋ってどこだっけな…。

？
？

「はあ…」

あ、いきなりため息なんて失礼しました。ちょっと悩み事があったもので…。
最近なんだかマスターとうまくやれてない気がするんですよえ。
…まあ原因は100%私にあるんですが…。

あの日。

里香さんと仲直りしたあの日から、私は何かおかしいんです。

マスターともつとずっと一緒にいたいのに、いざ一緒になると緊張しちゃってつい心にもない事を口走っちゃったり、逃げるようにその場を去ってしまったり…。

今日だって同じです。里香さんが出かけちゃって、私とマスターの二人きりになっちゃって…。逃げる口実が欲しくてマスターにお使いを頼まれたりして…。

「…何やってるのかなあ、私…」

またため息を一つ。

『お兄ちゃんの事、好きなんですか？』

里香さんの言葉を思い出す。この感情が『好き』という感情なのかは、正直わかりません。マスターが私の中で何かしら特別な存在だつて言うのは確かなんです。それが本当に『好き』つて言う事なのかはわかりません。

でも、仮にこれが『好き』なのだとしても、それは無駄な感情ですよ。ね。

だってマスターは人間で、私はボーカロイド。

いくら私がマスターを好きになっただって、マスターが私の事を好きになっってくれる事はない。
わかってる。
わかってるんです。

…それなのに。

『ミクさん、気付いてる？ミクさんがあんまりよそよそしくしてるから、お兄ちゃん』ミクに嫌われてるみたい』って勘違いしてるよ？』

里香さんからそれを聞いた時、どうしてあんなに切なくなっただんでしょう？どうしてあんなに苦しくなっただんでしょう？

マスターに受け入れてもらえないことはわかっていたはずなのに。それなのに。

マスターが離れていつている現実を知った瞬間、どうしようもなく苦しくなって、泣きたくなった。涙を流せたならその場に泣き崩れていたかもしれない。

もうだめです。わたしは、マスターと離れる事の辛さを知ってしまった。マスターと離れる事に、もう私は耐えられない。

でも、マスターは絶対に振り向いてくれない。私はボーカロイドなんだから。機械と人間という、決して越える事の出来ない壁がある。

「…マスター、私はどうすればいいんですか？」

いつそ…いつその事、この記憶も何もかも…

すべて、消えてしまえばいいのに…。

? ?

「よし、こんなもんか」

臨時誕生日パーティーの準備を終えて、俺は多少の達成感と共に呟いた。

時間がなかったのでデコレートしたのはダイニングだけだが、一日で作ったにしてはそれなりのものが出来上がった。

ケーキはこの辺りでは一番うまいと評判の店まで自転車で買いに行き、テーブルクロスはケーキ屋に売っていた「HAPPY BIRTHDAY!」という文字が七色で描かれているものを敷き、紙皿と紙コップは前に歓迎会で使ったものを再び使用。歓迎会で使った「おめでとう!」と書かれた垂れ幕を再び壁に張り付け、準備は万端。

約60%は歓迎会のおきに使ったものの流用なのだが、新しいテーブルクロスが前とは違った雰囲気をつけていてあまり気にならない。

「あとはミクが帰ってくるのを待つだけだな。ふう、疲れた…」

ソファーに寝転がりつつ、他の連中の事を思い浮かべる。

今日がミクの誕生日という事で当然葵やら海翔やら里香と鏡野姉弟やらも呼んだのだが、全員用事があるだの遠慮しておくだの言っただけで断られた。ノリの悪い奴らめ。

特に里香なんて、

『え、今日ミクさんの誕生日だったの!?ゴメン、じゃあすぐにかえ…。…いや、やっぱり今日はお兄ちゃんはミクさん祝ってあげて?私は帰ってから改めてお祝いするから。じゃあね!』
とか何とか言って反論する前に切られてしまった。

…正直、今の俺とミクじゃ場が持たないから誰かに来て欲しかったんだが…こないものはしょうがない。

「…ちょっと難しい問題もあるしなあ…」

『なお、このディスクをインストールする場合、現在使用している初音ミクの全データは初期化されますのでご注意ください』

部屋に置いてあるディスクに同封されていた手紙の一文を思い出す。結局ミクが望んだ場合、俺がどうすればいいかという答えは出ていない。彼女の意味を尊重するべきなのだろうが、それは俺が嫌だ。どうすりゃいいのかねえ…。

そこまで考えて若干鬱になった辺りで、玄関から「ガチャリ」という音と、「た、ただいま戻りました…」というか細い声が聞こえてきた。

俺は一度深呼吸をして、覚悟を決めて立ち上がった。

??

「よ、おかえり」

「あ、ま、マスター…!」

靴を脱いで家に上がると、マスターが片方の手をポケットに突っ込んだ状態でダイニングに立っていた。

「た、ただいま戻りました。荷物はキッチンにおいておきますね」

「おう」

「それから、私は着替えて部屋にいたので何かあったら声かけてくださいね…」

「ああいや、着替え終わったらすぐ降りてきてくれ。ちょっと話があるから」

「？はあ…」

私は疑問に思いながらも荷物をキッチンに置き、二階に上がって着替えた後、言われたとおりダイニングに戻った。

「マスター、話してなん…」

「誕生日おめでとう！」

パンツ！！

「キャッ！？」

私がキッチンへ向かおうとした瞬間、何か大きな音が鳴った。それに驚いた私は、思わず尻餅をついてしまった。

「あ、ゴメン、別に驚かそうと思ったわけじゃ…。いや、驚かそうとしてただんだけど、そんなに驚くと思ってなくて…」

「いたたた…な、何ですか？」

「えっと…だからその、誕生日、おめでとう」

「た、誕生日？」

「ほら、お前が発売されたのって8月31日だろ？だから今日が誕生日って事になってるらしいぞ？」

「

転んでしまった私を助け起こしながら、マスターは私に事情を説明

し始める。どうやらさっきの音はクラツカーの音だったらしい。そこまで事情を把握して、ようやくダイニングがいつもと違ってパーティー用にデコレートされていることに気がついた。

「…えっと、これ、マスターが準備してくれたんですか？」

「他に誰がいるんだよ、里香だって出かけてるっつのに」

「え、里香さんいないんですか？」

「いないよ、今日は帰ってこないって。なんでも『今日はお兄ちゃんはミクさん祝ってあげて？私は帰ってから改めてお祝いするから』だとさ」

…これはあれですかね、私は里香さんに気を遣われたんですかね？正直今この状況はとてつもなく辛いんですが…明日、一応ちゃんとお礼を言わなきゃですね。

「…とりあえずさ」

マスターはいつの間に取り出したのか、ケーキの箱を手に抱えている。

「ケーキ食べようぜ？」

？ ？

「さて、ケーキも食べ終わったところで、プレゼントタイムと行きますか！」

マスターが少し高すぎるような気もするテンションで切り出す。というのも、ケーキを食べてる間も私はマスターの質問に対して「はい」と「いいえ」としか答えなかったからです。

それでもマスターは積極的に話しかけてくれたんですが、どうしても会話が続かずに二人とも黙り込んでしまうことが多く、誕生日というにはあまりに暗い時間を過ごしてしまいました。なので、おそらくマスターは今、無理にでもテンションを上げようとしてくれているんでしょう。…私に気を遣って。

(本当に、なにやってるんだろう、私…)

そんな自己嫌悪に陥っている私を知ってか知らずか、マスターはそのまま話を進める。

「さて、俺のプレゼントはこいつなんだが…これなんだと思う？」

そういうとマスターは一枚のディスクを取り出した。表面は青緑色…ちょうど私の髪の毛のような色で、特に何も書かれていない。でも私には一っだけ、マスターが私に見せるディスクを知っている。それは随分前の出来事だけど、確かに覚えている。

「…私を歌えるようにするディスク、ですか？」

「正解。今朝運がいい事に届いたんだよ」

それを聞いて、沈んでいた私の気持ちが少しだけ晴れた気がした。「ずっとマスターのために歌うことが出来なくて申し訳ない思いをしていたけど、今日ようやく歌えるようになるんだ」と。

「ただその前に、これに関して良いニュースと悪いニュースがある。どっちから聞きたい？」

「え？…じゃ、じゃあ良い方からお願いします」

「これを使えば、お前はボーカロイドとして歌えるようになる」

「?そんなの当たり前じゃないですか、そのためのディスクでしょ?」

「じゃあ悪いニュース」

「はあ…」

「これを使うと、お前はこれまでの記憶を全部なくす事になる」

マスターが何を言っているのか、すぐには理解できなかった。

「…え?」

かろつじて出た声は、おそらく震えていたと思う。おまけに虫の囁さえずりのように小さかったかも知れない。

「つまり、歌えるようになる代わりに記憶を全部失うか、歌うのを諦めてこれまでと同じように生活していくか、どっちかを選べって事だ。俺は…お前が望むようにすれば良いと思う。好きなほうを選べ」

記憶をなくす?私か?今までの記憶を全部?

そんなのダメ、マスターの記憶がなくなるなんて絶対ダメです。でも、私はついさつき「記憶なんてなくなってしまえばいいのに」って言いませんでしたか?

本心なわけがない。本当にマスターとの記憶が全部消えればいいな

んで思っているわけがない。

でも…この胸の切なさを消すには、もうそれくらいしか方法が…。それに、私はボーカロイド…。ボーカロイドの仕事は、マスターのために歌を歌うこと。

歌えないボーカロイドなんて…いる意味、ないじゃないですか。

…だったら…記憶が消えても…マスターのために歌えるようになる
ほうが…！

「ほいつ」

バキッ！

「…バキッ？」

…何かが壊れるような音を聞いて、慌てて音のしたほうを向いた。その方向にはマスターが…真つ二つに割れたディスクをそれぞれの手に持ったマスターがいた。

> i30036 — 2186 <

「な…」

「あ、悪い、やっぱり俺が嫌だったから壊しちゃった」

「何やってるんですかあああああ!!??」

心の底から叫んでしまった。

「うわっ、何だよ!? 耳元で叫ぶなって…」

「叫ぶでしょう、普通叫ぶでしょう!? 私今ものすごい本気で悩んでたんですよ!? 何で壊すんですか!? 今私の答え待ってたんですよ!? 何で答える前にデストロイしてるんですかあ!? 私インストールして下さいって言おうと思ってたのに、その決意どうしてくれるんですかあ!?!」

「いやだから俺が嫌だったから壊したんだって。俺は歌える初音ミクより、歌えないお前のほうがいい」

「なっ…!」

予想外の一言に、思考が停止する。言葉が紡げない。顔が熱い。体が熱い。

「で、でも！ボーカロイドの仕事はマスターの…！私の仕事はあなたのために歌うことです！マスター何かおかしいですよ、歌えない

ボーカロイドがいいなんて！」

「…そんなに歌えるようになったのか？」

「当たり前でしょう!？」

「今までの事を全部忘れてもか？」

「…っ!…わ、忘れたくないわけ…ないじゃないですか!…!でも、私はボーカロイドなんだから、あなたのために歌わなきゃ!…」

「そうだよな、確かにお前はボーカロイドだ。ボーカロイドってのは自分のマスターの意思を尊重するべきなんじゃないか？」

「そ、それはそうですけど、こればかりは譲れません! 『歌う』ってというのは私の存在意義なんです! 歌わない歌姫に意味は無いんですよ!」

「俺はいいと思うけどな、歌わない歌姫」

「よくありません!…!」

「…それじゃあしょうがないな」

マスター納得してくれたようなので、話を終えて一息つくこうと思っ
た瞬間、

「ミク、これ命令な。お前はそのまま記憶を残したまま、歌えない
ボーカロイドとして過ごすように」

『命令』という絶対の力を持って、マスターは私に言った。

「…それは卑怯じゃないですか？」

「俺だつてこんな形は嫌だけど、お前が変なところで強情なのが悪
い」

「…変なところじゃないです！歌は私の中で一番大切な事です！」
「…」
「私は…！私…は…っ！」

反論をしたいのに、喉がしゃくりあげて言葉にならない。
ふと頬に冷たい何かを感じた。指先で触れると、濡れているのがわかった。

(…私、泣いてる？機械なのに？)

それを認識してしまつたら、もう止められない。涙は際限無く流れ出し、嗚咽が漏れるのを止められなかった。

そんな私を無言で見ていたマスターは、ゆっくりと私に近付いて…優しく、頭を撫でてくれた。

限界だった。気付くと、私は大声で泣きながらマスターに抱きついてた。マスターはそんな私を拒まず、相変わらず私の頭を優しく撫で続けてくれていた。

？
？

「落ち着いたか？」

数分間泣き続けた私を飽きる事無くまで続けてくれたマスターは、私の肩の震えが消えた頃を見計らって声をかけてくれた。

「あ…。…はい、ありがとうございます…すみませんでした」

名残惜しさに後ろ髪を引かれながら、マスターの体を離す。

「…どういたしました。…悪いな、ディスクいきなり壊したりして」

「…今更謝らないでください」

「…そうだな、悪い」

「ほら、また」

そこでなんだかおかしくなって、思わずクスクスと笑ってしまった。
マスターも釣られるように笑う。

「久々に笑ったな、お前」

「え？」

「いや、何か最近俺の前で笑わなかったからさ」

「あ…。」「ごめんなさい」

「別にいいよ、今見れたしな。それより、明日出かけるからそのつもりでいるよ？」

「え？明日、ですか？」

「誕生日プレゼント折っちゃったろ？」

「え、何か買ってきてくれるんですか？」

「あんま高いものじゃなければな」

「やった 明日ですね、わかりました！」

というわけで、明日はマスターとお出かけする事になりました。

…あれ、これって俗に言うデートって言う奴なんじゃないですか？

第35話 歌わない歌姫（後書き）

何気に奏は初描きです。しかし見事に特徴が無い…；

次回からはいつもの長さ（2500字前後）に戻ると思います。

第36話 ボーカロイド × マスター 〃 ? (前書き)

お待たせしました、一週間ちょっとぶりの更新です。

前回「普通の長さに戻ります」とか言ってましたが、何だかんだ言
って結構(と言つかめちゃくちゃ)長くなりました。お時間に余裕
がある時にお読みいただければ幸いです。

第36話 ボーカロイド × マスター Ⅱ ？

「ん…」

小鳥のさえずりを目覚まし代わりに眠りから覚める。ベッドの上で大きく伸びをしてから少しはだけてしまったパジャマを直し、窓の外を覗き込む。

天気は曇り。雨が降りそうなほど厚い雲でもなさそうだけれど、しばらくすれば晴れそうなほど薄い雲でもなさそうな、そんな微妙な天気です。

…なんで今日に限ってこんな微妙な天気なのかなあ、今日ぐらい快晴…とまではいかなくても、晴れてくれたっていいのに…。

そう思うとちよつとガツカリな感じがしますが、今日はもつとずつと楽しいイベントがあるので、許してあげましょう。

「準備しなきゃ…とりあえず顔洗いに行く」

階段を下りて洗面所に。そこでふと鏡を見て…

「…ひどい顔…」

目が真っ赤に腫れ上がっている私の顔を見て、思わずそう呟いてしまいました。

実は昨日、寝る前にも大泣きしちゃったんですよ…。

と言うのも、歌えないと言う問題は解決したものの、その事に浮かれてもう一つの大きな問題があること忘れてて、それを寝る前に思い出しちゃって鬱になって泣いちゃったんですよ…。

まあその問題と言うのは…言わずもがな、越えられない壁のことで

す。いくら歌えない私を受け入れてくれたからと言って、所詮私はボーカロイドでマスターは人間なんですよね…。
その事に寝る直前に気付いてしまって、そしたら自然に涙が溢れてきてしまって…まあ現在こんな感じでひどい顔になってしまっている。

「…でも、もう決めたもんね」

そう、昨日散々泣いて、もう私の中で答えは出しました。

確かに私はボーカロイド、人間のマスターと対等ではられない。

私はたぶん、マスターの事が…その、好きなんだと思います。でも、私は人間じゃない。人間のマスターとつ、付き合う事は出来ないんです、絶対に…。

でも、もうそれでもいいんです。

たとえマスターの恋人になれなくても、一緒に入れるだけで私は十分幸せだから。マスターに嫌われたり捨てられたりしない限り、私は幸せだから…。

だから、今日は緊張することなく、ただマスターとのデ…お出かけを、素直に楽しみたいと思います。

「…顔洗ったら治るといいけどなあ…」

そんな淡い期待をこめて、改めて顔を洗うのでした。

？
？

「今日は午後から雨降る可能性大だつてさ、傘持つてかねえと」

「そ、そうですね…」

「…ついかさ、お前どうした？なんか目赤いぞ？なんかあったか？」

「え！？あ、いえ、大丈夫ですよ？」

「?あ、あれか、もしかして昨日泣いてたからか」

「ふええ!?な、何で知ってるんですか!？」

「何でって…おかしな事言うな、昨日大泣きしてただろ?」

な、ななななんでマスターが知ってるんですか!?しかも大泣きつてことまで知ってるし!え、私そんな大きな声で泣いてましたっけ!?!いやいや、それも考慮してちゃんと声は我慢してたはずですし、そもそもいくらなんでも一階のリビングで寝てるマスターに二階のベッドルームの鳴咽が聞こえるわけないんじゃない!?もしかしてあれですか、私の部屋の前で寝てたんですか!?

「…そんなに慌てる事じゃないだろ?」

「ああ慌てますよ!驚きますよ!」

「…なんかよくわからんが、今日はあれだぞ、午後から降水確率70%だつていうから、傘持ってかないとだな」

「は、はあ…」

な、なんか納得いきませんが、まあいいでしょう。今日はいいです、また今度真相を聞きだしてやりますから…。

「それにしても降水確率70%って…何で今日に限って」

「まあ天気ばかりはしょうがないだろ」

「む…なんか潔過ぎせいやく過ぎです」

「しょうがねえもんはしょうがねえだろ。それにまだ降るって決まっただけじゃないし」

「それはそうですね…」

…なんかマスター、あんまり今日の…その…で、デート、楽しみにしてないんですかね?なんかいつもと大して変わらないんですけど…。

「さてと、じゃあ朝食食つたらとつと出ないとな。なるべく長い間出かけてた…じゃなくて、雨降って身動き取れなくなる前にとつとと買物終わらせないといけないし」

「そうですね。…ところでマスター、今買物の前なんて言いかけたんです?」

「…」

「…」

「…忘れた」

「…」

「…」

…よし、これも後日言及しときます。

「と、とにかくさつさと食べ！早く出かけないと!」

「そ、そういうマスターだってまだ食べてるじゃないですか!」

「…んぐっ、今食べ終わった!」

「早っ!え、ついさつきまだお茶碗の半分くらい残ってましたよね

!?!あの一瞬で今の全部食べたんですか!?!」

「ほら、いいからさつさと食べ!」

「いや、あの…私も一応女の子だから、ちょっとは恥じらいと言うものがあつてですね?私としては早食いはちよつと…」

「いいから!別に早食いははしたないとかそんな風には思わないから!いいじゃん、早食いする女の子!元気がありそうで可愛いよ!」

「!ん…はぐっ…ん…っ!」

「ちょ、今なんかすごい声が…おい、大丈夫か!?!ひよつとしてのど詰まらせたか!?!なにやっつてんだお前!?!」

「…!…!…!」

「み、水、水っ!」

(…ああ、なんかとても今からデートって雰囲気じゃないなあ…)
遠のく意識を必死に繋ぎ止めながら、そんな事を意識の中で呟いた。

? ?

電車に揺られて30分。隣町の方がお店がいっぱいあるので、電車に乗って隣町までやってきました。

「…一応確認しとくけど、もう大丈夫だよな?」

「だ、大丈夫です…。ご迷惑おかけしました…」

「いや、まあ別にいいけど…。ぷっ…。」

「わ、笑いましたね!?私があんなに苦しんでたのに、しかもその現場を目撃してたのに笑いましたね!?苦しかったんですよ、すごい苦しかったですよ!？」

「わかった、わかったよ!悪かったって!…ふははっ!」

「だ、だから笑わないでくださいってばあ!」

ポカポカとマスターの頭を叩いてはみたものの、私は(か弱いので)そんなに力がないので、たいしたダメージは与えられていない様子。…むう、いつかちゃんと仕返ししてやります…!

「さてと、んじやどこ行く?」

「そうですねー、とりあえず新しいお洋服が欲しいですかね」

「了解」

と言うわけでお洋服屋さんへ。

結構自分で買いに行ったり藝さんにもらったりしてるのでいろんな服は持ってるんですけど、よくよく考えたらマスターに選んでもらった服って言うのは持ってなかったですしね。この機会に選んでもらおうかなあ…という魂胆なわけです。ちなみに今日はピンクのス

カートにお花の髪飾りをつけてきました。
さて、と言うわけでお洋服屋さんに着きました。

「ふわぁ…さすがに大きいですねえ…」

「そうだなあ、俺もここまででつかいは始めてかもな」

「早く入りましようよ！ねっ、ねっ？」

「わかったわかった、まあ落ち着けっ」

マスターは口では呆れたようなことを言いながらも、苦笑を浮かべてちやんとついてきてくれた。

「で、どんなの買うんだ？」

「それはマスターしだいですかね」

「…それは何か、そういうことか？」

「そういうことです」

「…待て、俺の勘違いかもしれん。どういふことかちやんと説明してくれ」

「マスターが選んでくれた服を買いいます」

「…やっぱりそういう企画ですかそうですかチクシヨウ…」

「可愛いを選んでくださいな」

さて、それじゃあマスターも観念してくれたところで早速レディー
スコーナーへゴーです！

「それじゃあマスター、よろしくお願ひします」

「…俺は女性用の服はよくわかんねえんだよなあ…」

「大丈夫ですよ、マスターが選んでくれたって言うのが意味あるんですから」

「なんだそりゃ…」

と言いつつもちやんと選んでくれるマスター。私がワクワクして見ていると、マスターが一着の服を見て手を止めた。

「お、なんかいいのありました?」

「いや。そういうわけじゃないけど…なんかものっすげえ居心地悪いなって」

「そうですか?」

「だって女性用の服を男が見てるって…なんかなあ…」

…まあ気持ちはわかりますけど。

「じゃあ他になんか代案あるんですか?」

「…お前が数着選んで、そっから俺が選ぶとか」

「却下です」

「即答かよ…」

「だって私もう何着か自分で選んで買ってますから、その方法だとなんか新鮮味がないんですよ」

「じゃあもうまるつきり違うものを探すとか」

「たとえば?」

「…水着とか?」

「水着?この時期にですか?」

「一応この辺りに年中無休の室内プールがあるんだよ。年中いつでも真夏の気候、って言うのが売りの」

「…ふむ」

なるほど、水着ですか。悪くないかもですね、私はまだ水着持ってませんし。

…ただその場合マスターもっと公開処刑に近い状況になるんじゃない?…まあいいですけど、うるたえるマスターも可愛いですし

「わかりました、いいですよ。…マスターがそれでいいのなら」

と云うわけで今度は水着コーナーへ。

？ ？

「…しまったな…」

水着コーナーに着いたとたん、マスターが自分の提案がさらに自分の首を絞めてることに気付いたのか、頭を抱えてうなだれている。

「どうかしたんですか？」

「…なんでもない…って言うかミク、お前気付いてただろ？」

「ナンノコトヤラー、です」

「…何だそれ、バカじゃねえの？」

「ま、マスターがこないだ自分でやってたんじゃないですか!？」

「ナンノコ…何の事だ？」

「言った!今半分くらい言いましたよね絶対言いましたよねっ!？」

「そんなバカみたいな事言うわけないだろ、なに言ってるんだお前？」

「な…っ!」

な、納得いきません!これはひどくないですか、どうなんですかこれ!?

…ふ、ふん、まあいいですよ!今からマスターの慌てふためく姿をたっぷり堪能してやりますから!これくらいの屈辱は甘んじて受けてあげますよ!

「そ、それじゃあマスター!水着選んでください!」

「うっ…。…やっぱ俺が選ばなきゃダメ?」

「ダメです」

「…はあ、墓穴つた…」

マスターは（たぶん私が今までで聞いた中で）一番大きなため息をついて、足を引きずるようにして水着売り場に向かっていった。私もそれに続く。

さてさて、ようやく私のターンですよ。ここでマスターはそれなりに狼狽するはずですから、それを私がこう、いい感じにからかえば、いつも私がからかわれている時と立場が逆転していつもの仕返しに…！

「お」

「へ？」

私がそんな計画を脳内で練っていると、ふとゲツソリとした顔で水着を選んでいたマスターがふと声を上げた。マスターの手元を見ると、一着の水着。

「……………これいいんじゃない？…うん、なんかすげえ似合いそう。イメージぴつたりだな、これでいいだろ。はいよ」

そう言っつてマスターは勝手に自分で納得して、選んだ水着を私に手渡した。ちなみに水着は緑と白の縞々のビキニタイプです。

…っっていうかあれ、ちよつと早すぎませんか？今私完璧な計画を実行に移そうと思っつてたんですけど。こんな早く見つけれちゃうと計画を実行するタイミングもないんですけど。

「ん、気に入らないか？」

「…いえ、そういうわけじゃないんですけど…っっていうかなんかむしろイメージ通りというかなんというか」

「よし、それじゃあそれで決定だな。とつとレジ行って買ってくるか」

「…」

…なんでしよう、この感じ。なんか計画台無しになっちゃってますっ
ごい悔しいのに、「似合いそう」って言葉を聞いて「ああ、何だか
んだ言つてちゃんと選んでくれてるんだなあ」ってわかってうれし
くなって…。

だ、ダメダメ！もう決めたでしょ、私はそばにいるだけ！それ以上
は望まないのっ！一緒に、いるだけ…。

「ミク、なにやってんだ？早く行くぞ」

「あ、は、はいっ！」

思わず考え込んで足を止めてしまった私は、マスターの声で我に帰
り、慌ててマスターの後を追った。

？
？

「うわあ、これひどいな…」

水着を買った後近くにあったファミリレストランで昼食を済ませ
て外に出ると、町は豪雨に見舞われていた。

「やっぱ降ったか、まあ降水確率70%じゃあしょうがねえか」

「…はあ」

「そんなため息つくくなって、目的のもんは買えたんだし」

「…それはまあ、そうですね…」

「せっかくのデートなんだから、もうちょっと長くいたかった」な

んて言うわけにもいかず、なんだかやりきれない気持ちになる。ちやんと折りたたみの傘は持ってきたけれど、帰る準備なんか万端でも何もうれしくないです…。

そこまで考えて深いため息をつく、隣のマスターが小さく「げっ…」と呟いて、なんだか「あちゃー…」という素振りをしている。

「マスター、どうしたんですか？」

「…傘持ってくるの忘れた」

「え、あんなに『傘忘れんな』『傘忘れんな』ってしつこく言ってたくせに忘れたんですか？」

「…」

「まったく…人に注意する前にまずは自分の準備をちゃんとしましよようよ…」

「面目ない…」

「…まあいいですけど。とりあえず私は持ってますから、一緒に入りましょう」

「悪い、サンキュ」

とまあそんなわけで、マスターと相合傘をする事に。

ちなみに傘はマスターが持ってくれています。私が持つっていったんですが、「俺が忘れたんだから俺が持つ」っていつて聞かないので、しようがないから持つてもらってます。

とりあえずこれ以上外にいるのは得策ではないと判断し、やむを得ず駅に向かう事になりました。はあ、残念だなあ…。

「しかしついてねえなあ、今日に限って雨なんて」

「ホントですよ、何でよりにもよって今日なんでしょう…?」

「まあ天気ばかりはしょうがないか。また今度くればいいだろ」

「…そうですね」

…そっか、もう一緒にいられる時間は終わりなんですね…。
そう思うと、なんだかすごく胸が苦しくなってる…って、ダメなんで
すってだから！こんなんじゃ、ダメ、なんです…！

「ミク、寒くないか？」

「へ？な、何ですか急に？」

「いや、なんか様子がおかしいから寒いのかと思って」

「だ、大丈夫です…」

こ、こんな時に急に優しくしないでくださいよ！…いや、優しくしてくるのは素直にすごく嬉しいんですけど、このタイミングで優しくされると固めようとしている意思が揺らいじゃうんですよ！
そんな風に私が葛藤しているうちに、いつの間にかもう駅のすぐ近くまで来ていた。

…もうここで、終わりなんだ。

思わず足を止めてしまう。マスターはそんな私に気付いて、慌てて止まって私が濡れないように傘を私の上に添えてくれた。

「ミク？どうした？」

マスターが心配して声をかけてくれる。でも、今の私には答えられるほどの余裕がない。

…決めたはずなのに。もう昨日散々泣いて、これ以上泣かなくていいように決めたのに。

なのに、今になって。二人っきりの時間がなくなってしまっ今になって、また心が揺らいでいる。

もう疑う余地なんてない。私はマスターが好きなんだ。だけど、私がボーカロイドだって事実是不変わらない。

「ミク…？」

でも…。

「…もう…だめ…。これ以上…っ」

「え？」

「我慢…出来ないっ…！」

「…んっ！」

> i30990 — 2186 <

…ああ、ついにやつちやつたなあ…。

唇に当たる心地よい感覚に酔いしれながら、そんな事を漠然と考えていた。

確かに私はボーカロイド、人間じゃない。マスターはそんな私を認めてはくれないのかもしれない。

…でも。それでも、私がこの人の事が好きという事実には嘘はない。それは誰かにプログラムされたわけでもない、そうすると命令されたわけでもない。私が、私の意志で、この人を好きになった。

…ああ、バカだなあ、私。もっと早く気付いて、認めていれば、こんなに楽だったのに。今までどうしてこんなに我慢してたんだろう？ そう自問はしてみたものの、答えはわかりきっている。認めたとこで、マスターに受け入れてもらえなかった時のことを考えると…今この瞬間だって、恐怖で押しつぶされそうになる。

だけど…だからっていつてずっと我慢していたらこの後もずっと後悔する事になるし、我慢しているストレスに逆につぶされてしまうと思うから…。だから…。

触れていた唇を離す。ずいぶん長い間触れていたような気がするが、実際はおそらく3秒も経っていないと思う。

「マスター…」

「…」

マスターは呆然としている。…当然ですよ、ボーカロイドの私がいきなりマスターに…その、キス、しちゃったんですから…。

「ビックリ、しましたよね…?」

「そりゃ、まあ…」

「受け入れてもらえない事はわかってます。だけど…せめて、知って欲しかったから…」

「…」

マスターは無言で私を見つめている。私も…すごく恥ずかしいし怖いけど、マスターが次に発するであろう言葉を覚悟して。目を逸らさずにまっすぐにマスターを見つめる。

…数分にも感じられた数秒後、マスターが口を開く。私はマスターの言葉を受け入れるため、静かに目を閉じてその言葉を待った。

「…まったく、せっかく俺が我慢してたのに。あっさりそれを崩しやがって…」

「え?」

まったく予想外の言葉に、意味が理解できなかった。理解できなかったにもかかわらず、その意味を考えるよりも早く、ほぼ反射的に聞き返してしまった。

「だから、俺がずっと悩んでた事をあっさりと解決しやがってって言ったんだ」

「…えっと、言ってる意味がわからないんですけど…」

「だから、えっと…ああもうチクシヨウ、要するに！」

「俺もお前の事が好きなんだよっ！」

思考が止まった。

昨日マスターに認めてもらったときも、さっきキスしたときも思考は9割以上止まっていたけど、今はもうそんな比じゃない。ストップ、フリーズ、完全停止…そういう言葉で形容することすら出来ないほどに、見事なまでに完全に止まっていた。

「…おい、お前自分だけ思考停止してんじゃないやねえぞ、俺だって止まるほど今恥ずかしいんだからな？」

その言葉で我に返った。マスターがそうやって声をかけてくれなかったら、たぶんあと10分はそのまま硬直していたと思います。

「…あ」

ただ問題は、今度はマスターの顔を直視できなくなったってことですかね…。

「…なんだよ？」

「な、ななな何でもありませんっ！！！」

「…ったく、いきなりキスなんかしやがって…」

「ご、ごめんなさいっ！や、やつぱり嫌でしたか…？」

「そうじゃなくて、やるならちゃんと俺の心が決まってから俺からって思ってたんだよ」

「あ、あうう…」

「…恥ずかしがるなら最初からやらなきゃいいのに」

「そ、そういうわけにもいかないじゃないですかっ！」

「なんだそりゃ…」

マスターが呆れながらも優しく微笑んでくれている…ような気がする。顔が見れないので確証はないですが…。

「で、どうするっ？」

「ど、どうするって？」

「俺とお前、付き合っつてことでもいいのか？」

「っ、っ、っつき合っつ！？」

「…そりゃまあお互い好きなわけだし」

「で、ででもそこに行き着くまでのステップとかもあああああるじゃないですか！？」

「…いや、むしろ付き合っつのが最初のステップなんじゃね？」

「い、言われてみれば、そ、そうですね…。そ、それじゃあ…」

「よ、よろしく、お、おおお願いし、します…」

「ああ、よろしく」

そうして。

ボーカロイドとそのマスターと言う、少々奇妙なカップルが生まれた。

第36話 ボーカロイド × マスター 〃 ? (後書き)

初めてこんなに長い話を書きました。つつかれたあ…。
さてさて、次回は奏視点です。お楽しみにっ！

第37話 マスター × ボーカロイド 〃 ? (前書き)

お久しぶりです、ちょっと色々とバタバタしてしましまして、なかなか更新できずに申し訳ありませんでした。

前回の予告どおり、デートの奏視点です。前回のようになんかなり長いので、覚悟して読んでくださいw

あ、挿絵つきです。

第37話 マスター × ポーカロイド Ⅱ ？

「ふわあ…あ」

ソファに寝ていたせいで所々痛む箇所をさすりながら体を起こす。数回頭をボリボリと掻き、天気を確認するため窓のほうを見る。

天気は曇り。今すぐ雨が降りそうなほど暗い雲でもないが、午後までには晴れそうなほど明るい雲でもない、そんな中途半端な天気。

…昨日の天気予報では今日は晴れるって言ってたんだがな。天気予報め、嘘つきやがったな…。せめて雨だけは降らなきゃいいんだけど…。

朝から少しテンションが下がってしまったが、まあ今日はそれ以上にテンションの上がるイベントがあるから許してやるう、感謝しろ天気予報。

「…まず顔洗って…朝飯の準備だな」

あくびをかみ殺しながら洗面所へ。そこでふと見た鏡に映っている自分の顔を見て…

「…隈くまが出来てる…」

目の下に出来た黒い線を見て、かみ殺したはずのあくびがため息と なって口から出て行った。

実を言うと、昨日はいろいろ思うところがあって中々寝られなかったんだよな…。

というのも、昨日ミクが寝る前に見せた表情が気になっちゃったんだよ。口調やら仕草やらは前までみたいに生き生きしてて…うん、

可愛かったんだけど、なんか表情が、こう…100%笑顔じゃなかったって言うか…どこか陰があったような気がしたっていうか…。その理由を一晚中考えてたせいで中々寝付けなくて、現在目の下にくつきり隈が出来てしまっている。

…というのが理由その一。もう一つは…その、今日のデートが楽しみだったというかなんというか…。す、ストレートに言えば要するに「遠足が待ち遠しくて前日の夜に中々寝られない小学生」状態だったわけだよ、うん。…ガキか俺は。

自分で自分の今の状態に苦笑しつつ、やっぱり改めて実感した。

やっぱり俺、ミクのこと好きなんだよなあ…。

そりゃ確かにミクは人間じゃないし、普通は恋愛の対象じゃないってことくらいわかってる。葵が初めてミクに会った時も言っていたけど、いくら人間に近い形・機能を持っているからといって、ボーカロイドはあくまで機械であり、人間じゃない。世間一般から見れば、ミクに服を買い与えることはパソコンに化粧品を買ってやるようなもので、ミクに恋をするということは洗濯機に恋をするようなものだ。…さすがにその例はどうかと思うけど、実際そういうことなんだろう。

「…ま、関係ないけどな」

それがどうした？パソコンに化粧品を買ってやるなんておかしい？洗濯機に恋をするなんてありえない？…ミクに恋をするなんて変態みたい？

変態上等、知ったことか。俺はあいつが好きなんだ、誰になんと言われようとこれだけは間違いない。

ミクが昨日何を思っただんなんな表情をしたのかはわからないけど、出来れば力になってやりたいと思う。んでもって、ずっと笑っててもらいたい。それが俺の、あいつのマスターとしての…あいつを好きになった男としての役目のはずだから。

ただまあ…問題は、あいつがどう思ってるかなんだよな。

認めたくはないが、なんだかんだで俺はヘタレらしい。ミクの気持ちを確認できないと、自分から告白するのが怖い。…今の関係を壊してしまうのが、どうしようもなく怖い。

…今すぐに出さなきゃいけない結論、じゃないか。

「…隈つて顔洗えば消えるんだっけ？消えなかったらどうするかなあ…」

大事なことは先延ばしにしつつ、ヘタレな俺は改めて顔を洗うのだった。

？ ？

「今日は午後から雨降る可能性大だったさ、傘持つてかねえと」

「そ、そうですね…」

「…つーかさ、お前どうした？なんか目赤いぞ？なんかあったか？」

「え！？あ、いえ、大丈夫ですよ？」

「？あ、あれか、もしかして昨日泣いてたからか」

「ふええ！？な、何で知ってるんですか！？」

「何でって…おかしい事言うな、昨日大泣きしてただろ？」

なに言ってるんだこいつ？昨日散々泣いた拳句、俺に抱きついてきたくせに。あれか、昨日は混乱しすぎて記憶がほとんど残ってないとかそういうあれか？…だとしたらちよつとありがたいかも知れん、昨日の俺なんか今思うとめっちゃくちや恥ずかしい事言ってた気がするし。

…でも覚えてないんだったら何でこんな慌ててんだ？

「…そんなに慌てる事じゃないだろ？」

「あああ慌てますよ！驚きますよ！」

「…なんかよくわからんが、今日はあれだぞ、午後から降水確率70%だつていうから、傘持ってかないとだな」

「は、はあ…」

なんかよくわからんが、このまま追求しても真相は見えてきそうにないのでとりあえず話題を変えることにする。

「それにしても降水確率70%つて…何で今日に限って」

「まあ天気ばかりはしょうがないだろ」

「む…なんか潔過ぎけつ過ぎです」

「しょうがねえもんはしょうがねえだろ。それにまだ降るって決まっただけじゃないし」

「それはそうですけど…」

そりゃ俺だつて実際スゲーガツカリしてんだぞ。せつかくデートなのに降水確率70%なんて言われて「あ、はいそうですか」で終わるわけあるか。ただ、だからってイライラしたって仕方ないだろ、天気が変わるわけじゃないんだからって話だ。

「さてと、じゃあ朝飯食つたらとつと出ないとな。なるべく長い間出かけてた…じゃなくて、雨降って身動き取れなくなる前にとつとと買い物終わらせないといけないし」

「そうですね。…ところでマスター、今買い物の前なんて言いかけたんです？」

「…」

「…」

「…忘れた」

「…」

「…」

…危ねえ、思わず本音を半分以上言いかけた。いかん、想像以上に浮かれてるらしいな俺。…と、とにかくこの場はごまかさないと…！

「と、とにかくさっさと食べ！早く出かけないと！」

「そ、そういうマスターだってまだ食べてるじゃないですか！」

「…んぐっ、今食べ終わった！」

「早っ！え、ついさっきまだお茶碗の半分くらい残ってましたよね！？あの一瞬で今の全部食べたんですか！？」

「ほら、いいからさっさと食べ！」

「いや、あの…私も一応女の子だから、ちょっとは恥じらいと言うものがあってですね？私としては早食いはちよっと…」

「いいから！別に早食いははしたないとかそんな風には思わないから！いいじゃん、早食いする女の子！元気がありそうで可愛いよ！」

「！ん…はぐっ…ん…っ…！」

「ちょ、今なんかすごい声が…おい、大丈夫か！？ひよっとしてのど詰まらせたか！？なにやってんだお前！？」

「…！…！…！」

「み、水、水っ！」

(…先行き不安だなあ…)

必死にミクの背中をさすりながら、心中でそんなことを呟いた。

？ ？

ミクが朝飯を喉に詰まらせてから30分。電車に乗って隣町までやってきた。

「…一応確認しとくけど、もう大丈夫だよな？」

「だ、大丈夫です…。ご迷惑おかけしました…」

「いや、まあ別にいいけど…ぷっ…！」

「わ、笑いましたね！？私があんなに苦しんでたのに、しかもその現場を目撃してたのに笑いましたね！？苦しかったんですよ、すごい苦しかったんですよ！？」

「わかった、わかったよ！悪かったって…！…ふははっ！」

「だ、だから笑わないでくださいってばあ！」

顔を真っ赤にしたミクが、必死に背伸びをして頭をポカポカと叩いてくる。…これは予想以上に可愛いな、パンチも全然痛くないし、もつとずつとやっつて欲しいくらいだ。

ま、それはまたの機会ということだ。

「さてと、んじゃどこ行く？」

「そうですねー、とりあえず新しいお洋服が欲しいですかね」

「了解」

バーズデーガールのご要望で服屋へ。

しかし、こうやってミクと二人で服屋に行くのは初めて会ったところを思い出すなあ。あの頃は俺も随分いろいろ調べたよなあ、ミクの歌わせ方とかどんな曲があるかとか。…そう言えば最近全然やってないような…？帰ったらちよつと最近の曲を調べてみるかな。

と、そんな風に感慨に耽^{ふけ}っていると、いつの間にか目的地についていた。

「ふわあ…さすがに大きいですねえ…」

「そうだなあ、俺もここまででつかいののは始めてかもな」

「早く入りましようよ！ねっ、ねっ？」

「わかったわかった、まあ落ち着けて」

浮き足立って店内に入っていくミクに苦笑を浮かべつつ、なんだか

「なんで俺も軽い足取りで後を追った。」

「で、どんなの買うんだ？」

「それはマスターしだいですかね。」

「…それは何か、そういうことか？」

「そういうことです。」

「…待て、俺の勘違いかもしれん。どういふことかちゃんと説明してくれ。」

「マスターが選んでくれた服を買いいます。」

「…やっぱりそういう企画ですかそうですね。」

「可愛いを選んでくださいな。」

「嵌められた…。いや、全然予想できた展開なんだけど、何か嵌められた気分だ…。」

「それじゃあマスター、よろしくお願いします。」

「…俺は女性用の服はよくわかんねえんだよなあ…。」

「大丈夫ですよ、マスターが選んでくれたって言うのが意味あるんですから。」

「なんだそりゃ…。」

しかし俺が選んだ服をミクが着てくれるというのは中々魅力的な企画なのでは？よし、こうなったら完全俺の趣味で選んでやる…とちよつとした仕返しを思いついた時点で、あることに気づいて手がピタリと止まってしまった。

「お、なんかいいのありました？」

「いや。そういうわけじゃないけど…なんかものっすげえ居心地悪いなって。」

「そうですね？」

「だって女性用の服を男が見てるって…なんかなあ…」

高校生が自分の趣味で女性用の服を真剣に選んでる…うん、限りなくシニールで変態的だ。

「じゃあ他になんか代案あるんですか？」

「…お前が数着選んで、そこから俺が選ぶとか」

「却下です」

「即答かよ…」

「だって私もう何着か自分で選んで買ってますから、その方法だとなんか新鮮味がないんですよ」

「じゃあもうまるつきり違うものを探すとか」

「たとえば？」

「…水着とか？」

「水着？この時期にですか？」

「一応この辺りに年中無休の室内プールがあるんだよ。年中いつでも真夏の気候、って言うのが売りの」

「…ふむ」

俺の提案を聞いて、考え込む様子を見せるミク。…何でもいいけど早く決めてほしい、それでもって早くこの公開処刑のような状況から開放してほしい。

「わかりました、いいですよ。…マスターがそれでいいんなら」

…最後の台詞が少し気になったが、とりあえず水着コーナーへ移動することにした。

？
？

「…しまったな…」

水着コーナーに着いた瞬間、自分の失態に気づいた。なにやってんの俺、さっきの何倍も公開処刑じゃんこれ…。

「どうかしたんですか？」

「…なんでもない…って言うかミク、お前気付いてたたる？」

「ナンノコトヤラー、です」

「…何だそれ、バカじゃねえの？」

「ま、マスターがこないだ自分でやってたんじゃないですか!？」

「ナンノコ…何の事だ？」

「言った!今半分くらい言いましたよね絶対言いましたよねっ!？」

「そんなバカみたいな事言うわけないだろ、なに言ってるんだお前？」

「な…っ!」

ふふん、どうだコノヤロ…。今から俺は極限の辱めを受けるんだから、これくらいの反撃は許されるはずだよな？

ミクもこの状況だと俺のほうがダメージが大きいことに気づいているのか、一瞬悔しそうに地団太を踏んだ後、すぐに余裕の表情に戻った。

「そ、それじゃあマスター!水着選んでください!」

「うっ…。…やっぱ俺が選ばなきゃダメ？」

「ダメです」

「…はあ、墓穴った…」

というわけで渋々水着売り場へ…。…くそう、こうなったら超恥ずかしい水着を選んで逆に恥ずかしい目に…。

「お」
「へ？」

そんな計画を脳内で練っていると、ふと目に留まる水着があった。緑と白のストライプの、ビキニタイプの水着。

「……これいいんじゃない？…うん、なんかすげえ似合いそう。イメージぴったりだな、これでいいだろ。はいよ」

これを着ているミクを想像してみる。…うん、ばつちし。すげえ、ここまでイメージぴったりな水着があるもんなのか、ビックリだ。まあ何はともあれ、早く終わってくれて助かった。あゝよかったよかったです…。

俺が安堵している一方、ミクは水着を凝視してボーっとしている。

「ん、気に入らないか？」

「…いえ、そういうわけじゃないんですけど…っていうかなんかむしろイメージ通りというかなんというか」

「よし、それじゃあそれで決定だな。とっとレジ行って買ってくるか」

「…」

…なんかミクの様子がおかしいな。顔赤いし、そのわりに何か悔しそうな目してるし、けど何か口元はにやけてるし…。…要するに何かすげえ顔になってる。(幸せ×悔しさ)÷2＝今の顔、みたいな方程式が組めるくらい変な顔してた。…自分で恥ずかしくなるなら最初からこんなめんどくさいこと企画しなきゃいいのに。

「ミク、なにやってんだ？早く行くぞ」

「あ、は、はいっ…」

固まってしまっているミクに再び声をかけると、今度は慌てて反応してトテトテと慌てて俺の元に駆け寄ってきた。…なんでこいつはこっぴどく可愛いらしいんだろう？

？
？

「うわぁ、これひどいな…」

昼食をフアミレスで済ませて店を出ると、いきなりザアザアという轟音が耳に轟いた。

「やっぱ降ったか、まあ降水確率70%じゃあしょうがねえか」

「…はあ」

「そんなため息つくなんて、目的のもんは買ったんだし」

「…それはまあ、そうですね」

「はあ…」と二度目のため息。さっきまでのハイテンションはどこへやら、雨が降り出した途端急にミクの元気がなくなってしまった。デートを楽しみにしてたのに、雨が降って残念がってるのか？…まあんなわけねえか。

そんな妄想を脳内で繰り広げつつ、傘を捜して鞆の中を漁る。…が、どういいうわけかそれらしき物の感触はない。

…あれ？え、マジで？あれか、浮かれすぎてて忘れたか？…うわぁ、信じらんねえ、どんだけ馬鹿なんだよ俺…。

「マスター、どうしたんですか？」

「…傘持ってくんの忘れた」

「え、あんなに『傘忘れんな』『傘忘れんな』ってしつこく言うってたくせに忘れたんですか？」

「……」
「まったく…人に注意する前にまずは自分の準備をちゃんとしまし
ようよ…」
「面目ない…」
「…まあいいですけど。とりあえず私は持ってますから、一緒に入
りましょう」
「悪い、サンキュ」

というわけで、図らずともミクと相合傘をすることに。さすがに忘
れた上に傘まで持つてもらうのも悪いので、傘は俺が持っている。
…おおう、なんだかんだでなんかかなりおいしい状況に…。
しかし、残念ながら天気は土砂降り。これ以上外にいたって何も出
来ないし、最悪風邪を引くかもしれない。…ボーカロイドも風邪を
引くのかどうかは知らないが。なので、今日はこのまま帰ることに
なった。…誠に遺憾である。

「しかしついてねえなあ、今日に限って雨なんて」
「ホントですよ、何でよりもよって今日なんでしょう…?」
「まあ天気ばかりはしょうがないか。また今度くればいいだろ」
「…そうですね」

しかし傘が小さいな…。一人用だからしょうがないけど。
一応ミクが濡れないように気をつけてはいるけど、大丈夫かね?何
か俯いてて元気ないし、ひよっとして寒いのか?

「ミク、寒くないか?」
「へ?な、何ですか急に?」
「いや、なんか様子がおかしいから寒いのかと思って」
「だ、大丈夫です…」

相変わらず俯いて歩き続けるミク。心なしか、少しだけ頬が上気しているように見えて、風邪を引いたんじゃないかと本気で心配になつてくる。急いで家に帰るために速度を上げるべきか、無理をさせないように速度を落とすべきかと悩んでいると、不意にミクが完全に足を止めてしまった。

「ミク？どうした？」

まさか本当に風邪引いたか？もしかしてもう立ってるのも辛いとか？やばい、全然気づいてやれなかったな…。と、とにかく…。ど、どつするべきだ？どつか座れるところまで連れてってやるべきか？さすがに少しテンパっていると、不意にミクの肩が小刻みに震えていることに気づいた。寒さで肩が震えだしたか？

「ミク…？」

顔を覗き込もうと、少し屈んで頭を下げる。

「…もう…だめ…。これ以上…っ」

「え？」

「我慢…出来ないっ！！」

「…んっ！」

唇に、何かが当たった。

いや、「当たった」と言うには優しすぎる、「触れた」とか「撫でた」とか、そういう言葉が似合うほど優しく、唇が何かの存在を感じた。

「それ」が他人の唇だと気づくまでに0.5秒。さらに「それ」が、ミクの唇だと気づくまでもう0.5秒。最終的にその行為が「キス」だと気づくのに1秒。

そこに至ってようやく、俺がミクとキスをしてしまったんだと気づいた。同時に、頭が真っ白になった。

心地よい感覚が離れる。たった2秒ほどの出来事だったはずなのに、離れてしまった感覚が恐ろしく名残惜しかった。

「…マスター…」

「…」

ミクが俺を呼ぶ。だが、まだ脳が正常に作動していない俺は返事が出来なかった。

「…ビツクリ、しましたよね…?」

「…そりゃ、まあ…」

「…受け入れてもらえない事はわかってます。だけど…せめて、知っていて欲しかったから…」

「…」

…ようやく正常な思考回路が回復してきた。同時に、どうしようもなく恥ずかしくなってくる。思わず目を逸らしそうになるが、ミクの視線はまっすぐ俺を向いていたので、俺もすっかりとミクを見つめた。

…キス、されたんだよな。

…って事は、ミクも俺のことが好き?

…なんだよ、って事はあれか?

今までの関係が壊れるかもって怖がってたのは…無意味?

え、じゃあ俺の今までの我慢の意味は!?それも全部無意味!?

…いや、まあ単純に俺がヘタレしてたのが悪いんだけどさ。

思わず音もなく失笑してしまった。もっとも、目を閉じてしまって

いるミクには見えていないだろうが。

なんだよ、馬鹿じゃねえのか俺？悩む必要なんて全然なかったんじゃない。ちょっと勇氣出して告白してれば、俺から告白でハッピーエンド、って感じでカッコいい展開になってたのに。

「…ったく、せつかく俺が我慢してたのに。あっさりそれを崩しやがって…」

「え？」

思わず考えていたことが口から漏れてしまった。ミクが驚愕したような表情でこつちを見ている。…第一歩はミクにやらせちゃったんだ、こつからは俺がやらないとだな。

「だから、俺がずっと悩んでた事をあっさりと解決しやがってって言ったんだ」

「…えっと、言ってる意味がわからないんですけど…」

「だから、えっと…ああもうチクシヨウ、要するに！」

言っぞ、怖気づくな！ハッキリ言ってやれ！

「俺もお前の事が好きなんだよっ！」

目を思いっきり瞑って、力いっぱい叫んでやった。道行く人たちが何事かと振り返ったりする気配も感じたが、そんなもんは全部無視。数秒が過ぎ去って、俺が恐る恐ると言う感じで目を開けると…ミクがボーっとした表情で虚空を見つめていた。

「…おい、お前自分だけ思考停止してんじゃないやねえぞ、俺だって止まるほど今恥ずかしいんだからな？」

「…あ」

ようやく我に返ったミクは、俺の顔を一瞬見て…すぐに目を逸らした。

今までだったら「また嫌われた!？」とかそんな感じでショックを受けてたところだが、今は違う。もうお互いの思いは確認したし、目を逸らしたのが恥ずかしかったからだっこともわかってる。…なんたつて、俺も今逸らしそうになっているのを必死で耐えてるんだから。

「…なんだよ？」

「な、ななな何でもありませんっ!!!」

「…ったく、いきなりキスなんかしやがって…」

「ご、ごめんなさいっ!や、やっぱり嫌でしたか…?」

「そうじゃなくて、やるならちゃんと俺の心が決まってから俺からつて思つてたんだよ」

「あ、あうう…」

「…恥ずかしがるなら最初からやらなきゃいいのに」

「そ、そういうわけにもいかないじゃないですかっ!」

「なんだそりゃ…」

顔を真っ赤にして、目のふちに涙をためて、あたふたと落ち着きなく慌てるミクが可愛らしくて、愛おしくて仕方がない。今更ながら、もっと早く告白してれば、と後悔している自分がいた。

「で、どうするっ…」

「で、どうするって?」

「俺とお前、付き合うつてことでもいいのか？」

「っ、っ、っ付き合っ！？」

「…そりゃまあお互い好きなわけだし」

「で、でででもそこに行き着くまでのステップとかもあああるじゃないですか!？」

「…いや、むしろ付き合っるのが最初のステップなんじゃね？」

「い、言われてみれば、そ、そうですね…。そ、それじゃあ…」

「よ、よろしく、お、おおお願いし、します…」

「ああ、よろしく」

> i32706 | 2186 <

そうして。

ボーカロイドとそのマスターと言う、少々奇妙なカップルが生まれた。

第37話 マスター × ボーカロイド 〃 ? (後書き)

当初の予定では次の話くらいで完結させる予定だったんですが、鏡野姉弟の出番の少なさとかやりたいエピソードとか諸々の事情で、もう少し続くことになりそうです。目標は50話突破ですので、皆様どうかお付き合いいただければ幸いです

第38話 占い（前書き）

久しぶりに普通の話を書いた気がします。

今回は3000文字程度の、普通の長さのお話です。

…だんだん前書きに書くことがなくなってきました；

第38話 占い

み、皆さんどうもこんにちは、おはようございます、もしくはこんにちは、初音ミクです！み、皆さんもご存知だとは思ってますが、改めてお知らせします！

じ、実は私、マスターとお付き合いする事になりました！

「…えへ、えへへ」

そんなわけなので、現在ちょっとテンションがおかしいです。今も別に何も無いのに、顔が少しにやけちゃってます。…今の私、傍かはたら見たらかなり気持ち悪いでしょうね…。

まあでも今はマスターも里香さんも学校に行つてて家にいないので、そんなの気にする必要ないんですけどね。

それにしても、本当にマスターと付き合える日が来るなんて夢にも思つてませんでした。ご存知のとおり、私はボーカロイド、つまりアンドロイドで、マスターは人間で、つまりは本来付き合えないはずで…。だけどマスターはそれも全部わかつてて私を受け入れてくれて…。あ、ダメ、また顔が緩んできちゃいました。

このまま幸せ気分浸つてるのもいいんですが、少し小腹が空いたのでキッチンへ。階段を下りてダイニングにつくと、ふと見慣れない雑誌がテーブルの上にあるのに気付きました。

「？なんだろう、これ？」

興味を引かれて表紙を覗き込むと、そこには「気になる彼との相性診断！」と大きく書かれていました。

…ば、バカバカしい、占いなんて当たるわけないじゃないですか。

そうですね、毎朝ニュースでやってる天気予報だつて当たるとは限らないじゃないですか。もし占いなんか当たるとなれば、天気予報だつて毎日100%当たるはずですもん！

…。でもまあ、占いなんて基本暇つぶしでやるものですからね。ちよつと試しにやってみようかな…。べ、別にマスターとの相性が気になるとか、そういうわけじゃないんですよ！？これはあれです、マスターも里香さんもいなくて暇なので、ちよつと気分転換にやってみようと思っただけです！勘違いしないでくださいねっ！

さ、さて！というわけで、早速始めましょう！いろんな種類の占いがあるみたいですけど、とりあえず最初のから順番にやってみようか。

まずは…生年月日を入れて占うタイプ。

私は…まあこの前もお祝いしてもらいましたし、8月31日がいいですね。マスターのは…あれ？そういういえば私、マスターのお誕生日知らないような…。

「…違うのにしよ」

「今度ちゃんとマスターに誕生日聞いておかないとなあ」と呟きながらページをめくる。今度のは血液型占い。…マスターはおるか、私自分のすら知らない…。って当たり前ですよ、ボーカロイドなんですから。

「…次」

九星占い。…これも生年月日だから却下。

「…」

あ、ダメだ、どんどんテンションが落ちていつちやいます。…こんなことになるなら、マスターの誕生日くらいもっと前に聞いておけばよかったなあ…。

一つため息をついてから次の占いに目を移すと、今まで沈んでいた気持ちが一気に浮上したような気がした。

「姓名占い！」

これなら出来ます！まあ私の名前は私だけのじゃなくて他の固体と共通ですが、マスターの名前はこの世に一つしかないはずなので問題ないはずです！

さて、いざ！まずは男性の名前の欄に：「千歳 奏」、そして女性の名前に「初音ミク」と。さて、これで対応表を見れば結果がわかるはず…！

？ ？

「ん、終わった終わった…！」

校門を出て、軽く伸びをする。寝不足だったおかげか、今日は普段に増して疲れた気がする。授業中何度寝そうになったことか…。

ちなみに今日は葵も海翔も放課後に用事があるらしく、今俺の隣に二人はいない。珍しく一人で静かにのんびりと下校することが出来るそうだ。

そんな風に思っていると、

「お兄ちゃん、お疲れ様」

「ん？里香か？」

不意に背後から声をかけた人物に向かって、俺は振り向かずに答え

る。

「あ、すごい、よくわかったね」

「そりゃまあ、俺のことそう呼ぶ奴はお前しかいないからな」

苦笑交じりに振り向くと、そこには案の定制服姿の里香と、鏡野姉弟の二人もいた。

「何だ、お前らもいたのか」

「何よ、いちや悪い？」

「こら、鈴。…どうも、お久しぶりです、先輩」

「…相変わらず両極端な双子だな」

「何か文句あんの？」

「別に？変わってんなあって思ったただけだ。それで、お前らは何で俺の高校の前にいるわけ？学校見学ってわけでもないだろ？」

「ほら、ちよつと前にここの近所に新しい喫茶店が出来たでしょ？だから皆でそこでお茶してから帰ろうと思ったんだけど、行ったらすごい混んでてすぐに入れなくて、しょうがないからまた今度つてことになって、ついでだからお兄ちゃんと合流しようって話になったの」

「…ふん」

なぜそこで俺に合流しようという話になったのかは理解できないが、まあ避けられたりするよりは全然いいので特に突っ込まない。今日は葵も海翔もいなくて暇だったし。

そんなわけで、俺、里香、鈴、蓮の四人という、極めて珍しい組み合わせで下校することに。鏡野姉弟にはついでに家に上がってもらったことになった。

「そついえばお兄ちゃん」

「ん？」

「お兄ちゃんって占い信じる人？」

「占い？何でまた急に？」

「こないだ買ってきた雑誌にさ、何か恋愛占いというか相性占いというか、とにかく占い特集みたいのが載ってたさ。それでお兄ちゃんも信じてるのかな？って思ってた」

「ふ〜ん。俺は…基本信じない」

「基本…ってどういうことですか？」

「自分にマイナスな結果なら信じないで、自分にプラスな結果なら信じるって事」

「うわあ…」

「何よその『普段は無神論者だけど都合のいい時だけ神様を信じる』みたいなスタンスは…」

「何だ、お前ら姉弟は信じてるのか？」

「逆よ逆、あたしたちは100%信じないわ」

「そりやまたどうして？」

「考えてもみなさいよ、あたしと蓮は双子なのよ？」

「…は？」

「鈴、それだけじゃ普通わかんないって…。先輩、俺と鈴は双子です。つまり、血液型も、生年月日も、干支も星座も…違うのはせいぜい手相くらいで、基本的にどれも同じなんですよ」

「なるほど、どの占いやってても結果が同じって事か」

「そっぴうことです。だから俺も鈴も占いってというのは信じない」とにしてるんです」

「へ〜、面白いな。ちなみに里香はどうなんだ？」

「私は…あんまり信じてないかな。結果云々『うんぬん』よりも、占いそのものが好きって感じ」

「何だよ、誰も占い信じてないのかよ」

「当たり前でしょ、あんな胡散臭いもの信じる奴なんかいるわけないじゃない」

「…鈴の言い方は悪いけど、確かに本気で信じてる人はほとんどいないと思います。すごい純粋な人が、本当にそういうオカルト的なものが好きな人なら信じてるかもしれませんが」

『じゃあミクなら信じるかもな』と心の中で苦笑しつつ会話を続けていると、程なくして家に到着した。

「ミクさん、ただいま」

「おじゃまします」

「ただい…」

「マスタアアアアアッ！」

「まっ！？」

玄関で靴を脱いでリビングに上がった瞬間、ミクの全体重を乗せたタックル…もとい、抱きつきを喰らい、俺は後方へ吹っ飛ばされた…いや、実際ミクは小さくて質量もないから大した威力じゃなかったんだけど、予想外だった上に全速力だったせいでまったく反応できず、吹っ飛ばされた挙句に奇声まで上げてしまった。

「マスター！私たち恋人ですよね！？心通じ合ってますよね！？私がかこうやって抱きついて甘えたり泣いちゃってるのも『ウザりたい』なんて思っていないですよね！？」

「ゲホッ、ゲホッ…お、落ち着けて、なにがあった？」

「…グスッ、実は…」

浮かんだ涙を袖で拭きながら、ミクはダイニングテーブルの方を…正確には、その上に置いてあった雑誌を指差した。パラパラとペー

ジをめくっていくと、ふと「姓名で占う相性占い」というコーナーに何やらペンで書き込んだ様子があることに気付いて手を止めた。そこには「女性の名前」の欄に「初音ミク」、「男性の名前」の欄に「千歳 奏」、そして結果が書かれている対応表の一部に丸が書かれていた。

印がされていた箇所を読むと、

『心が通じ合っていません』

『ちよつとウザがられてるかも?』

『あまり相性がよくないようです』

などと、あまりよろしくない結果ばかりが書いてあった。

「…これをやってみたら、俺とお前の相性が最悪って書いてあって悲しくなつたと。そういうことか?」

そう聞くと、ミクはまた泣きそうな顔になりながらコクコクと首を縦に振った。そんな様子に俺は大きなため息をついた後、ワシヤワシヤと少し力強く頭を撫でてやる。

「うわわ、わ…!…ま、マスター?」

「まさかホントに信じるとは思わなかったよ」

「え?」

「なんでもない、こつちの話だ」

「は、はあ…」

「とにかく、占いなんか信じてんじゃねえよ。心配すんな、心も通じ合ってるし、全然ウザくなんてないから。むしろ可愛いくらいだ」

「…ホントですか?」

「当たり前だろ?」

「…じゃあ…ギョッ、てしてください」

「はいはい」

苦笑しながら、俯いているミクの体を抱きしめてやる。…ぶっちゃけ里香とか鏡野姉弟がいる前でやるのはかなり恥ずかしかったのだが、やってやらないともっと拗ねるだろうから仕方ない。

しばらくしてから、名残惜しいのを我慢して腕の力を緩めてやると、ミクは一步下がって顔を上げた。目は少し赤く腫れていたが、彼女の顔にはいつもの綺麗な笑顔があった。

「満足したか？」

「…はい、ありがとうございます。ごめんなさい」

「気にすんな」

俺がそう言つと、ミクははにかんだ笑顔を浮かべた。

数秒後、今更ながら里香と鈴と蓮がいることに気付いたミクが狼狽し、それを中学組三人がからかうという、概ね予想通りの展開になった。ミクは始終顔を真っ赤にしていたが、同時に幸せそうな表情をしているように見えた。

第38話 占い（後書き）

皆さんは占いて信じますか？

重要なお知らせ

皆様、いつもこの作品を呼んでいただきありがとうございます。作者です。

「新しい話が投稿されたっ！」と勘違いされてしまった方、申し訳ありません。今回は最新話の投稿ではなく、題名どおり重要なお知らせです。

実は…この小説を書くのに飽きてしまったので、急遽この小説は打ち切りにします…!!

…嘘ですごめんなさい許してください。

本当のことを言うと、ちょっと大学関連のことで色々と忙しくなってしまったので、しばらくの間連載を休止させていたきたいのです。

期間は12月の初めまでを予定しております。詳しくは活動報告のほうに書かせていただいたので、一度御高覧いただければ幸いです。この小説を読むのを楽しみにしてください。皆様（もしいれば、ですが）には申し訳ないのですが、アメリカの大学受験は家族内でも初めての経験なので、正直小説を書いている余裕が無いんです。申し訳ありませんが、何卒ご理解のほどよろしく願います。

それでは皆様、また12月にお会いしましょう。少しでも楽しみに

していただけたら幸いです。

なお、このお知らせは次話を投稿した時点で削除いたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4325q/>

ミクノポップ!!

2011年11月8日18時11分発行